

平成22年度

報 告 書

国際キャリア開発プログラム

国際キャリア合宿セミナー・国際キャリア実習

国際舞台で活躍を目指す
若者たちへ

平成21年度文部科学省 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム
「地域の大学連携による学生の国際キャリア開発プログラム」

宇都宮大学 作新学院大学 白鷗大学

目 次

「国際キャリア開発プログラム」の開講にあたって

第1部 国際キャリア合宿セミナー

1. 開催趣旨	3
2. コンセプト&ルール、各分科会の発表方法	4
3. 合宿セミナーの成果（参加者アンケート及びレポートより）	5
国際キャリア開発基礎	6
1. 開催日程表	7
2. 全体講義と総括	8
3. 講義及び講師、分科会	11
国際キャリア開発特論	30
1. 開催日程表	31
2. 全体講義	32
3. 講義及び講師、分科会	37
4. 総括／レポート作成とキャリア開発	54
国際実務英語 I	56
1. 開催日程表	57
2. 全体講義	58
3. 講義及び講師、分科会	61
附 表	
参加者名簿	74
実行委員会名簿	78
参加者アンケート	79

第2部 国際キャリア実習

1. 実習 I の概要	81
2. 実習先	82
3. 実施の流れ	
4. 実習先との協定	
5. 実習時に必要な書類	
6. 実習生の感想・実習先の評価	83
7. 実習生の指導について	87

附 表

1. 実習候補先一覧	90
2. 国際キャリア実習 I ・フローチャート	92
3. インターンシップ実習生派遣に関する協定書（案）	93
4. 実習時に必要な書類	94
4-1. 国際キャリア実習 I 申込書	94
4-2. 志望動機調査票	95
4-3. 実習計画書	96
4-4. 誓約書	97
4-5. 実習記録（中間期）	98
4-6. 実習最終報告書	99
4-7. 覚書	100
5. 実習評価表	101
6. ポートフォリオ	103
7. 実習 I 履修者一覧表	105
編集後記	106

「国際キャリア開発プログラム」の開講にあたって

宇都宮大学理事・副学長 渡邊 直樹

平成21年度後期から開始された本取組「地域の大学連携による学生の国際キャリア開発プログラム」は、将来、国際社会において自分の能力を活かしたいと考える学生にそのために必要な国際キャリアパスを保証する教育プログラムであり、栃木県内の3大学、白鷗大学・作新学院大学・宇都宮大学の連携と国際医療福祉大学やその他国際交流団体等の協力の下で行われています。本取組はここに2年目を迎え、国際社会で活躍されている方々の体験に基づく専門的かつ実際の授業科目「国際キャリア開発」、「国際実務英語Ⅰ」及び学生の実習科目である「国際キャリア実習Ⅰ」が開講され、いよいよ本格的に学生に国際的キャリアパスを保証する学修プログラムが開始されることになりました。

合宿によって行われる質の高い集中的な授業と国内外で実施されるインターンシップ体験は、学生の皆さんにとって国際社会において活動するための前提条件といえます。9月に茨城県銚田市にある「栃木県立とちぎ海浜自然の家」で実施された「国際キャリア開発基礎」には、3連携大学の学生を初め、全国各地から合計130名が参加されました。また、講師の方々はそれぞれ国際社会においてご活躍中であり、ご多忙のなかこのプログラムのために時間を割いて参集くださいました。学生は、これら多様な経歴を有する方々による多様な講義に熱心に耳を傾け、自らの将来のために必要なキャリアに関して十分な情報を得ることができたと考えます。

平成22年9月下旬には「国際実務英語Ⅰ」が、各界の代表者と外国人を招待して「栃木県芳賀青年の家」において2泊3日の合宿形式にて開催されました。3連携大学と全国から集まった54名の参加者は、それぞれ多様なプログラムの中から自分の将来のキャリア獲得に相応しいと考える授業に参加していました。これらの講義はほとんど英語のみで行われたにもかかわらず、学生は集中力をもってこれに臨み、疑問点に関して積極的にねばり強く質問し、また学生同士で議論を重ねるなど真剣に取り組んでいました。最終的には、課題に対するレポートを慣れない英語で作成するため、夜遅くまで机に向かっていた学生もいたようです。その完成後は、学生は一様に安堵感と満足感に満たされた表情をしていた、と講師の先生方からは伺っております。「もう一日欲しいかった」という多くの学生の声は、このプログラムの内容の豊かさと稠密さを評価したものといたします。

平成23年2月には、同じ「栃木県芳賀青年の家」において、「国際キャリア開発基礎」の発展型である「国際キャリア開発特論」が3泊4日の合宿形式にて開催されました。また、夏休み等の長期休暇を利用する「国際キャリア実習Ⅰ」（インターンシップ）もすでに開講されています。現在のところ15名が登録し、すでに修了者もおりますが課題もあります。この実習に参加にする学生の旅費に係る援助は本取組の予算要求の対象外となっており、このことは学生にとって大きな負担となることは申し上げるまでもありません。学生のみなさんの奮起頑張りに期待する他ありません。

とまれ、本取組関係者及びご協力いただいている団体に改めて感謝の意を表しますとともに、学生の皆さんにはこのプログラムによって獲得した学修成果が将来の国際キャリアパスへの礎となることを祈念してご挨拶といたします。

第1部

国際キャリア合宿セミナー

1. 開催趣旨

国際キャリア合宿セミナー 2010

～ 国際舞台で活躍をめざす若者たちへ ～

国際キャリア開発プログラム 取組責任者

友松 篤信（宇都宮大学国際学部教授）

2004年に始まった「国際キャリア合宿セミナー」も今年度で第7回を数えることとなりました。本セミナーは、国際協力や国際交流に関心をもち、世界を舞台に活動する国際機関や国際交流団体、NGOや国際企業などで活躍したいと考える若者たちに、そうした仕事に関する正しい知識、そこで求められるコミュニケーションなどの能力、そこにいたる具体的な道筋（キャリアパス）について学ぶ機会を提供するものです。国際学部を有する宇都宮大学が作新学院大学・白鷗大学と連携して、国際社会で活躍する人材養成に向けて国際キャリア教育を実践する意義はとて大きいと考えています。

国際社会に活動の場を求める若者は少なくないにもかかわらず、彼らの意志を実際の仕事・職業に結び付けていく道筋はそれほど準備されていないのが現実です。国際社会での活動の舞台は多様であり、そこへの道筋もまだまだ一般化されているとは言えません。言語や文化の相違など乗り越えるべき壁も多く存在します。本セミナーでは、多方面の国際分野の第一線で活躍されている方々を講師として招き、それぞれの仕事について話していただき、こうした先達の体験をもとに国際キャリア形成の道を探り、後に続く若者たちの背中を後押ししたいと考えています。

本年は、これまでの経験を踏まえて、栃木県・JICA等からの引き続いての支援に加え、作新学院大学・白鷗大学・国際医療福祉大学からの組織的な協力を得て企画を進めてきました。本年も、昨年同様、宇都宮大学の学生はもちろん、広く栃木県内外の学生、青年、社会人の参加を得ています。「大学コンソーシアムとちぎ」を通して履修申請した県内の大学生には、それぞれの大学で単位が認定されます。

本セミナーは、夏季に開講される「国際キャリア開発基礎」「国際実務英語Ⅰ」と、春季に開講される「国際キャリア開発特論」によって構成されます。「国際キャリア開発基礎及び特論」は日本語で、「国際実務英語Ⅰ」は英語で専門知識を学びます。本セミナーでは、まずグローバル時代に必要な知識やスキルを学びます。つぎに、各界の第一線で活躍されている講師に、それぞれご自身の仕事について、体験に基づいてお話しいたします。その後、各講師を囲む分科会が用意され、その分野における仕事の内容、やりがいと問題点、求められる資質・能力、専門知識を学びます。さらに、分科会で学んだことを全体発表の場でプレゼンします。本セミナーでは、参加者各個人が国際キャリアの実践者としてあとに続くための道筋を探っていきます。各参加者が主体的・積極的にプログラムに参加することによって、さらに自らの意志を強くし、その実現に向かう道筋を学び取ることを期待しています。

本プログラムは平成21年度文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択されています。本企画の推進・実行には、宇都宮大学の教職員だけでなく、作新学院大学、白鷗大学、国際医療福祉大学の教職員や国際交流団体（いっくら国際文化交流会）、JICA国際協力推進員、さらに学生からなる実行委員会が組織されました。各方面のご協力を深く感謝申し上げます。

2. コンセプト&ルール、各分科会の発表方法

1. コンセプト

- ① 合宿セミナーでは、参加者は専門性を身につけることより、学ぼうとする意欲を持つことの方が重要である。また、他人の強みを見て圧倒され、自分自身への自信をなくしたり恐怖心を持つのでなく、それをばねに自分ももう少し頑張ろうという刺激として受けとめること。ネガティブでなく、ポジティブ・シンキングでいること。
- ② 基本的にキャリアは「個人」プレーヤーで、自分一人でキャリアを切り開いていくのが一般的である。しかし同時に、キャリアは「チームワーク」が重要で、相談に乗る、アドバイスをしてくれるなど支える仲間がいないと、個人のキャリアも形成できない。本合宿では、人と競争する、あるいは自分が一番になることを目指すのではなく、他者とのつながりを大切にし、お互いに支えあって協調・共有すること。

2. ルール

- ① どんな意見も歓迎し、正しい、悪い、馬鹿げた質問はないので、積極的に質問をしよう。
- ② 一人が議論を独占するのではなく、一人ひとりの参加を大切にする。
- ③ 自分と異なる意見に批判や反論しない。批判はいいことだが、頭からこの意見はおかしいと決め付けるのではなく、相手の言い分を最後まで聞いて相手を理解する努力をする。
- ④ 分科会の発表の準備の際に、意見の質を最初考えずに、数多く意見を出す。
- ⑤ 一つのアイデアからさらに深く突っ込んで話を膨らませて、グループ化してまとめる。また、他の発想と結び付けて意見を発展させる。
- ⑥ 健康に注意をする。

3. 発表方法

学んだことを3つ、その根拠を3つずつ、そしてそれを基にアクションプラン3つを発表する。学んだことは、分科会に参加しなかった者にもわかりやすいように、ミクロレベルでなくマクロレベルのものを選択し、専門用語を使わない。

3. 合宿セミナーの成果（参加者アンケート及びレポートより）

1. 学ぶ姿勢・学習法（国際キャリア開発基礎、国際実務英語Ⅰ）

先生が一方的に教える授業では学生の頭は受動的になり、知識を忘れやすい。頭を能動的にするために、知識の入力だけでなく、それを即、他人に伝えたり（アウトプット）教えることが大事である。その能動性の有無が原因で、人によって伸び方が違う。正解を他人から教えられるのではなく、自分やグループで正解について深く考える習慣をつけ、常に「なぜ？」と疑問を持つことにより、自分の意見を持てるようになる。大学生活でも主体的になることによって、脳が活性化する。

2. 自己分析（国際キャリア開発基礎・特論）

自分自身について知らない人は大変多い。多くの人と接するなかで刺激を受けるだけでなく、自分の考えの甘さや行動力の無さなどを改めて実感する。自分の強み、不足点や価値観がわかり、それによって自分のビジョンや将来の計画がより明確になる。

3. 人間力（国際キャリア開発基礎・特論、国際実務英語Ⅰ）

栃木県では地理的な要因もあり、大学外との交流が不足したり、他人と将来について意見交換をする機会が少ない。全国から問題意識の高い学生が参加する本合宿セミナーでは、短時間に知らない人と話す機会が多いため、コミュニケーション力が上がり、自分の視野や行動範囲も広がる。それによって自分の方向性がわかり、自分自身の自信もつく。ネガティブでなく、ポジティブな精神を持てるようになる。

4. 論理的思考（国際キャリア開発特論）

ビジョン実現に向けたプロポーザル作りでは、因果関係を考えながら、ロジカルに筋道をたてることで、自分や周りにとっても納得できるものとなる。また問題が起きた際、その原因を分析するだけでなく、その分析を裏返すことによって解決方法が見つかり、問題解決力も身につけることができる。

5. 語学力（国際実務英語Ⅰ）

日常生活において外国語を習得する場が少ないが、英語漬けの合宿セミナーでは、文法や表現の間違いなどを気にせずに話すことによって、外国語習得の意欲や自信が上がる。

6. 学生間ネットワーク

本プログラムの改善を目的に、平成22年の「国際キャリア開発基礎」後に学生団体 ICDP-s (International Career Development Program for Students) が設立された。組織は約60名で構成され、連携3大学以外に国際医療福祉大学、共愛学園前橋国際大学、首都大学東京、独協大学、津田塾大学の学生が参加している。

活動実績は下記の通りである。

1. 国際キャリア合宿セミナーへの参加経験を基に、今後のプログラム内容に学生視点から多角的に提言、参加する。
2. 本プログラム参加者同士のネットワーク形成による持続的な情報交換、親睦を深める場として機能する。例：メーリングリストでのイベント広報や、同窓会の開催。

当ネットワークは、卒業後も継続可能であり、10年後に講師として再び参加できることを期待する。

メンバーのモチベーションを維持し、かつ向上するために、今後は組織体制を確立し、情報・意見交換の場を強化し、講演会、セミナー、ワークショップ、スタディツアーなど ICDP-s 主催のイベントを企画する。

国際キャリア開発基礎

1. 目的

—国際分野で働くこととは—

国際的な分野の第一線で活躍する講師を招き、国際的な仕事の意義や面白さを学びます。

分科会では実際の仕事や問題の発掘、その解決方法を学び、自己の国際的キャリアパスを明確にしていきます。

2. 開催日時

2010年9月4日(土)～6日(月) 2泊3日

3. 会場

栃木県立とちぎ海浜自然の家 〒311-1412 茨城県銚田市玉田336-2

4. 合宿セミナーの様子



挨拶 渡邊理事



全体講義



分科会



分科会



全体発表



閉講式



1. 開催日程表

1日目（4日）

時間	プログラム内容	備考
10:45 11:30	開講式・オリエンテーション	挨拶、プログラム説明
11:30 12:30	全体講義「世界を舞台に活躍する思考術 ～ココロ変われば世界が変わる！」	講師 羽根拓也氏
12:30 13:15	昼食	インターン実習報告会 (佐川想、川口ゆず子、小林文也)
13:15 16:15	全体講義「世界を舞台に活躍する思考術 ～ココロ変われば世界が変わる！」	講師 羽根拓也氏
16:30 18:00	各講師の講義	
18:30 21:00	夕食・交流会・フリートーク	ファシリテーター打合せ

2日目（5日）

時間	プログラム内容	備考
7:00 7:45	朝食	
8:00 10:00	全体講義「海外安全管理」	講師 内田昭男氏
10:10 12:00	分科会	
12:00 13:00	昼食	サークル活動等紹介 (佐川想、逸見栞、佐藤康平、岩崎芽依)
13:00 16:00	分科会	
16:00 18:30	分科会全体発表準備	
18:30 19:30	夕食	
19:30 21:00	分科会全体発表準備	

3日目（6日）

時間	プログラム内容	備考
7:00 8:30	朝食・掃除	
9:00 12:20	分科会全体発表（分科会ごと）	発表15分 質疑応答5分
12:20 13:10	昼食	
13:10 14:10	総括	講師 羽根拓也氏
14:20 14:35	閉講式	閉講の挨拶、証書の授与

2. 全体講義と総括

全体講義・総括 国際キャリア概論

「世界を舞台に活躍する思考術～ココロ変われば世界が変わる！」

【講師氏名】羽根 拓也（はね たくや）

株式会社アクティブラーニング 代表取締役社長

【講義概要】

国際社会で働くことになんとなく興味がある。しかし、実際に海外の現場で働くためには、負荷に負けない強い思考力、行動力がある。

本セミナーでは、今、大企業、公的機関等が次々に導入しているアクティブラーニング社の「世界で通じる能動的思考術」を紹介。

国際協力機構（JICA）の専門家職員が、海外に派遣前に必須科目として受講しているアクティブラーニング。日本人にありがちな「受動思考」に対して、「能動思考」を実践し、人生を切り開いていく行動力の構築法を伝授。海外でのキャリアアップはもちろん、あらゆる職場で役に立つライフスタイル育成法は必見！



▼能動思考術

- △受動学習と能動学習
- △脳を活性化させる学習法
- △他者との相互成長の技術

▼価値観育成術

- △強い心と弱い心の違い
- △価値観は育てるもの
- △世界で活躍できる人材になる

【略 歴】

文部科学省：就業力支援プロジェクト審査委員、経済産業省：社会人基礎力育成プロジェクト委員、デジタルハリウッド大学（院）教授・教育手法最高責任者、山口大学客員教授

日本の塾、予備校で指導後、渡米。ハーバード大学等、アメリカの有名大学で語学専任教師として活躍。独自の指導法が 高い評価を受け、平成6年、同大より優秀指導証書授与。米国で高い評価を受けた独自の教育法を体系化。帰国後、97年、「人間力育成」に特化したアクティブラーニング（以下AL）社を設立。ソニー、博報堂、リクルート、JRといった大手企業をはじめ、経産省、JICA等、公的機関が次々AL社のプログラムを導入。現在、全国の国立、私立大学でも、大学改革、学科開発のコンサルティング、教員向けFD指導、学生向け、「アクティブラーニングクラス」「就学力育成クラス」などを提供し、高い評価を受けている。

2009年、世界の起業家を評価する「アントレプレナーオブザイヤー」の日本セミファイナリストに選ばれる。2010年、羽根が企画開発支援したJR東日本のe-learningプログラムが経済産業大臣賞を受賞。

【概要】

このセミナーでは世界を舞台に活躍するための「思考術」を学ぶことを目的とし、ワークショップスタイルで、正解を自分や周りの人と考えるトレーニングが行われた。課題実行を繰り返すことで理解や定着効果が増大し、学生は下記のことを学んだ。

グローバル時代の企業の動き

企業の海外意識が高まる中、事務系全員をグローバル要員として海外赴任したり、企業内の公用語を英語にするなど、時代の変革が大きい。世界で活躍するために必要な資質として、自ら考え行動する力が求められることから、能動性が鍵となる。2004年の起業率に関しては、日本は2%と34ヶ国中最下位である。起業率の違いを生む要因として、国民性、制度、教育方法の3つが挙げられる。



学習方法

教師から教えてもらう「正解コピー型」の受動的学習と、自分から学ぼうとする「正解探求型」の能動的学習がある。そしてビジネスの世界での方法論について、人間の学習は“イン”（入力）と“アウト”（出力）の2段階で成り立っており、ビジネスの基礎を学ぶ“イン”と自分で工夫する“アウト”の両者が必要であるが、“アウト”が弱い。“アウト”が重要とする考え方は、千利休による守破離（しゅはり）にあった。物事を習得する上での3つのプロセス、すなわち先達の英知を取り込む基礎である守（しゅ）、取り入れたものを自分流にアレンジまたは活用し、応用する破（は）、そして取り入れたものから離れ、普遍成長する離（り）である。学んだことを他者にアウトプットすることで脳が開く（「開脳」）ことから、教える行為に高い学習効果がある（Learning in Teaching）。

「開脳」とは脳の伝達物質が出やすくなり、活性化している状態で、能動的な時に脳は活性化する。能動学習と「開脳」との関係では、受け身になることが結果として脳内学習を止めているので、自分の脳をできるだけ主体的にすることが鍵である。新鮮である海外での体験は能動的になりやすく、さらに海外での社会貢献活動はやりがいや喜びがわかり、人生の生きる意味を感じ取ることができる機会であるため、羽根氏は海外行きを学生に勧めた。

自分の価値観

「人生で最も大切なものを3つ挙げよ！」という質問をさらに深堀トレーニングとして、参加者に生産的会話を要求した。質問の回答に「なぜ」を繰り返し、新視点での回答を作成していった結果、新たな視点を見出すことができるようになった。

就活のために

学生が直面する就職活動に関して、社会は「専門性」から「人間性」を重視しつつあり、前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）そしてチームで働く力（チームワーク）という3つの人間力を求めている。そのために、学生時代に体験した意義や価値観をハイレベルに引き上げ、関心と価値観がほぼ定まっている精神的支柱を持ち、それを言語化できることが重要である。

学生の感想

講義中に「人生で最も大切なもの3つは？」と聞かれ答えを出すのに時間がかかった。この質問は何が本質なのか深く掘り下げていくことが目標であったが、自分の価値観を知ることが難しいと知った。だから時間をかけて自分と向き合っていこうと決めた。（宇都宮大学 国際学部 1年生 兼子 由衣）

全体講義 海外安全管理

【講師氏名】内田 昭男（うちだ あきお）
独立行政法人 国際協力機構（JICA）
総務部安全管理室 安全対策アドバイザー

【講義概要】

① 最新の治安事情と海外でのリスク

- (1) 海外におけるリスクと日本人の危機意識
- (2) 海外における邦人保護の実態と犯罪被害の実情

② 海外安全対策の基本

- (1) 基本コンセプト～セルフ・ディフェンス
 - ① 危機管理能力の習得
 - ② 危機意識の持続
 - ③ 情報の重要性の認識
 - ④ 緊急事態への対応
- (2) 海外安全の3原則
- (3) 緊急事態への対応

③ 海外で遭遇する主な犯罪

- (1) 犯罪被害防止の基本理念
 - ① 被害の未然防止
 - ② 遭遇時の被害拡大の防止（無抵抗主義）
- (2) 屋外犯罪防止対策
どこの国でも発生しており、日本人が遭遇するケースが非常に多い。
（例）路上強盗、すり、置引き、ひったくり、車上狙い、詐欺盗
- (3) 屋外犯罪防止対策
悪質性が高く、重要事態への発展も懸念される。
（例）屋内強盗、空巣、忍込み、ホテル荒し等
- (4) 住居の安全対策

④ その他の安全対策

- (1) テロ（特に、爆弾テロ）対策
 - ① テロに巻き込まれないために。
 - ② テロ遭遇時の被害軽減のために。
- (2) 誘拐、人質、拉致対策
 - ① 誘拐されないために
 - ② 誘拐されたら
- (3) 大衆運動対策



【略 歴】

学習院大学卒。一般会社勤務を経て警視庁警察官採用、主に地域・交通警察部門に従事。FBI研修後、在ベルギー日本国大使館で勤務。帰国後、外事警察（国際テロ）を担当、各種事件情報の収集及び事件捜査に当たる。警視庁勇退後国際協力機構に入構、安全対策アドバイザーとして関係者の国内外での危機管理の指導・教養に従事。あわせて、各国での治安情勢分析、安全確認調査及び安全対策巡回指導等にも務める。

3. 講義及び講師、分科会

	講義内容・分科会	講師	ファシリテーター
A	人道支援	高嶋由美子	捧 純也 秋元明日香 川島 正恵 柿崎 朋子 高島あゆみ
B	環境と地域づくり	壽賀 一仁	佐川 想 逸見 栞 望月 悠平
C	障がい者を取り込んだ地域開発	石井 博之	秋田 裕介 佐藤 杏子
D	コミュニティー開発とボランティア	眞貝 沙羅	鳴瀬 貴子 遠藤宗之介
E	日本語教育	村上 吉文	似内 竜介 劉 禹君
F	ジャーナリズムと平和	大崎 敦司	井上 良 江連 祐希 佐藤 康平
G	観光とまちづくり	大野 邦雄	古田土陽介 張 欣
H	開発輸入ビジネス	佐々木敏行	小笠原睦月 中條 玲 中島 久雄 横尾 知香
I	国際経営コンサルタント	池田 栄治	斉藤 弘貴 青木 未来

講義（A）人道支援

【講師氏名】高嶋由美子（たかしま ゆみこ）

国連UNHCR協会（認定NPO法人）事務局長

【講義内容】

・自分のキャリア

学生時代の希望→研究者→見習い国連職員→運命の出会い→
国連職員→NPO

・本分科会の目的

1) 緊急援助とは何か、疑似体験を通して、考えてみる。

ビデオを見ながら、実際のオペレーションでどこがどう間違えているかを発見し、どのようにしてそれを克服するかを現実的に考えてみる。

2) 限られた情報の中で、いろいろなオプションを、「いちばん」の選択枝を選んでみる。

実際に緊急援助の場を想定して、グループごとに、どのような難民キャンプの設営をするか、上記のビデオでの失敗点を参考に考えてみる。

3) 国連職員ってどのようなことをするのか考えてみる。

UNHCRの仕事および職員の生活などの紹介を通して、【道具】としての国連職員というキャリア・パスをひとつの選択枝として考えてみる。



・本分科会の流れ

(1) 基礎講座 UNHCRの概要

UNHCRの仕事ということを通して「国連職員としての生活」、および、「その利点と挑戦」などを実体験から話させていただきたいと思います。

(2) 現場体験 難民キャンプでの問題点

皆さんをイラクのクルド人難民キャンプにご招待いたします。そこで初期に行われていたオペレーションを通して、何が問題なのか、そして、どのような解決方法があるのか、また、その解決方法が現実的なのかと、問題発見から実際の解決方法を導くエクササイズを、まずは個人、そしてその後グループでお行います。

(3) 難民キャンプを作るならば？

限られた情報の中で、何が一番いい選択枝なのかを探していく作業を通して、白黒とはっきり判断できない現場で、時間を争っての共同作業（今まで一緒に働いてきていない人と）をしていきつつ、決断していく過程を学びことを目的とします。

【略 歴】

学習院大学院政治学研究科博士課程に在籍。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）でスーダン、東ティモール、タイ、カンボジア、ミャンマー、アフガニスタン、ケニア、ウガンダ、イランで勤務。宮沢賢治学会イーハトーブセンターによる「イーハトーブ賞」や日本青年会議所による「人間力大賞-NHK賞」を受賞。NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」に出演。

【学生のレポートより】

人道支援の現場にいる国連職員が、人道支援の方法に関して矛盾を持って活動をしていることに、親近感が湧いた。高嶋氏が言った「冷たい頭と熱い心を持つて」は、深く胸に突き刺さる言葉。人道支援の現場だけでなく、どんな時でもこれは必要だと感じた。（宇都宮大学 国際学部 2年生 逸見 栞）

【全体発表概要】

UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は、難民の国際的保護（自国の保護を受けられない人をUNHCRが保護）と難民問題の恒久的解決（将来的に難民が難民ではなくなる）という役割を持つ。難民はさまざまな理由で迫害を受けている、または受ける可能性があるために国外にいる人たちである。

人道支援とは、人と人との信頼を築いたり、互いに助け合う活動で、一方的に支援を行うのではなく、どんなに緊急を要する状況でも難民キャンプのリーダーたちとともに座って話し合いながらキャンプの運営について考える。

難民問題の恒久的解決のために、①自主帰還（自分の国へ帰る）、②受入国に定住、それができない場合は、③第三国定住がある。UNHCRの人道支援には、①難民の命と権利を守る緊急支援、②難民の生活が始まる際の中期的支援、③難民の生活再建の恒久的解決に向けた支援の3段階がある。これらは、紛争の解決など、難民問題の根本的解決ではない。

UNHCRの現場から学んだこと

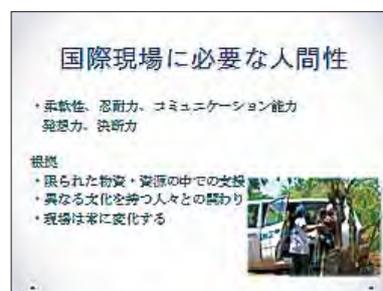
1. バンドエイド：UNHCRは一時的な援助、つまり止血をするバンドエイドのような援助を行っている。UNHCR職員は問題の根本を解決したい気持ちが強いのだが、一時的な援助をしなければならないという矛盾の中で活動している。
2. 最優先事項：難民キャンプには何万人もの難民が一斉に押し寄せてくる急事態の中で、やらなくてはならないことがたくさんある。その中の最優先事項を決定する必要がある。
3. 冷たい頭と熱い心：緊急事態の中で何が最も重要であるかを決めるには、冷静な判断力が必要である。それと共に、一時的な援助しかできないという矛盾や葛藤の中でも、出来ることをやり続けていく情熱も重要である。



根 拠

国際現場に必要な人間性は、柔軟性、忍耐力、コミュニケーション能力、発想力、決断力である。

1. 限られた物資、資源の中で難民支援をしなければならないから。例を挙げると、難民キャンプの現場では、常に清潔な水がなく、泥水などを石や砂をろ過装置の代わりに使い飲料水、生活用水にする。何かが無いから出来ないではなく、その代わりに何をどう使うかを考えることが重要である。
2. 異なる文化や価値観を持つ人々と関わり、支援を進めていかなければならないからだ。様々な文化や、価値観を持つ人々が混在する現場では、人間関係や支援を円滑に進めるために、自分とは違う考えや宗教観を受け入れ、柔軟に対応する必要がある。
3. 難民支援の現場は常に変化していくからだ。現場によって、難民の社会的や文化的背景や環境が異なるために、次に何が起こるか、どう状況が変化するかが読めない。



アクションプラン

現場では人材も物資もないという厳しい状況で、現地の人と信頼関係を築く大切さを学んだ。そのためにはコミュニケーション能力や発想力、決断力、また主体的に世界で動くことの重要性を実感した。具体的に、ツイッターやMixi、FaceBookなどで情報を発信して友人に国際協力の理解を深めてもらう。

分科会参加学生の感想：難民援助活動が「必要最低限の援助」であることが一番衝撃的であった。一人一人の命を救うのは簡単なことではない。現場で人の命を救うことが、紛争問題の根本的な解決に貢献できると思っていたので、それが非常に甘い考えであることに気づかされた。（宇都宮大学 国際学部 1年生 庄司 萌）

ファシリテーター感想：今回の合宿を通して困難と成功を体験し、一層ファシリテーターという役割への関心が高まった。ぜひまたその役割を務めたいとともに、周りにも広めていきたい。（宇都宮大学 国際学部 2年 秋元明日香）

講義（B）環境と地域づくり

【講師氏名】 壽賀 一仁（すが かずひと）

あいあいネット（いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク）理事

【講義概要】

1. 「環境と地域づくり」にかかわる仕事とは？

それぞれ独自の自然環境のもとにある農山漁村の暮らしを、地元の方々があらためて見直し、自然の価値や暮らしの技を再発見して回復したり、新たな工夫を凝らしたりして地域づくりに自ら役立てていくことをお手伝いする仕事。具体的には、地域を見直すワークショップや研修、他地域の事例紹介、相互交流等を通じた「まなびあい」の機会提供+α。

2. 仕事の背景にあるもの

地球環境の危機（気候変動、「開発」、生物多様性喪失、水不足など）にさらされる暮らし

⇨しかし、従来ひとびとは地域の環境のなかで育まれた暮らし方の伝統や知恵を持っていた。

⇨だが、現在はそうした地域それぞれの暮らしを妨げる因果関係のネットワークが存在する。

3. 仕事へと至るきっかけ

田舎、ボーイスカウト、動物行動学、登山、そしてエチオピア

4. 仕事を通じた視点の移動

外人から住民へ、開発から暮らしへ、外国だけでなく日本も

5. 現在までのキャリア

（国連への憧れ）→日本発の国際NGO→現地NGO→住民組織→地域で暮らすひとびと。

自分の暮らしのなかでの実践。協力活動と研究の往復。外国の地域と日本をつなぐ。

6. 仕事の魅力

それぞれの自然環境で育まれた地域独自の暮らしを地元の方々から学びつつ協働する面白さ。

自分の地元で当事者として実践する難しさと面白さ。NGOの枠だけに縛られない仕事の幅。



【略 歴】

1965年生まれ。中学生の頃より赤十字語学奉仕団でボランティア活動を行う。東京大学在学中に日本国際ボランティアセンター（JVC）に参加、1990～93年の間エチオピアで農村復興事業に従事。その後JVC東京事務所からアフリカ、アジア、南米の農村開発事業を支援すると同時に、現地NGOとの協働を目指してアフリカ日本協議会を設立し活動。また高知県で農業研修を受け、わずかではあるが自ら実践に取り組む。2000～02年の間JVCを退職し、ジンバブウェで住民主体の農村開発を調査。帰国後JVC勤務のかたわら、一橋大学大学院で研究を継続。今年3月JVC事務局次長を辞し、04年から参加していたあいあいネットに活動の軸を移して、国内外における住民主体の地域づくりの支援、相互交流、調査研究に力を注ぐ。このほか、大学の非常勤講師やJICA農業・農村開発分野課題別支援委員なども務める。

【学生のレポートより】

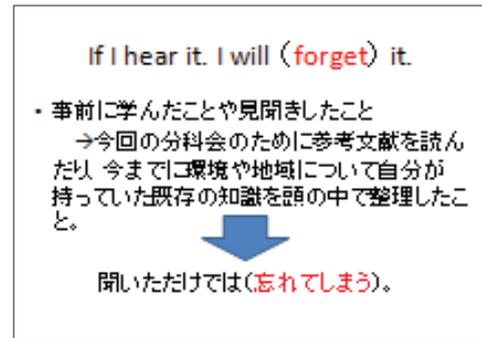
海外だけではなく日本での活動を通して、私達が農山漁村の暮らしを見直したり、自然やその地域伝統の技の価値を改めて認識することで、その村のさらなる発展へと結びついていくのではないかと思った。（宇都宮大学 国際学部 1年生 佐藤 利津）

【全体発表概要】

学んだこと

① 因果関係のネットワークと改善点

因果関係のネットワークとは原因とそれによって生ずる結果が繰り返すネットワークをさし、それを知ることにより、改善点が見えてくる。因果関係の例として、訪問先で起きている悪い要因の出来ごとの歴史的背景や地理的要因等が挙げられる。また反対に、本来その地にある伝統的な方法やその地域の在来性に着目しながら、在来していたものの良さを再認識して改善点に繋げる事が可能である。

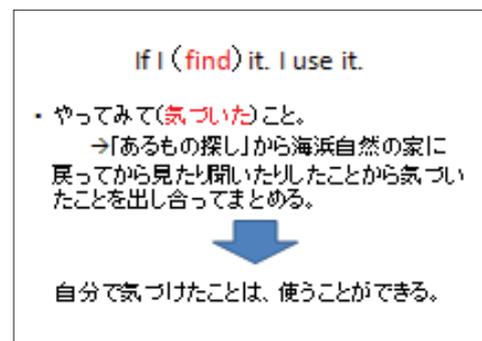


② よそ者（外部者）の役割

外国に行く際、よそ者（外部者）が果たす役割は大きい。よそ者は村の実態を見ながら先住民や住民に物事を教えるのではなく、あくまで問題に気付いてもらうという態度を重視して共に改善を図る。

③ 地方学とよそ者の作法（よそ者としての礼儀）

地元学とは、地元の者がよそ者の目を借りながらも自ら地元の事を調べ、考え、創る、地域・生活づくりすることである。その目的は過去を知り、変化を予測し、なじませ、未来を共有し、現在に手を打つことにある。また地元学を用いたアクティビティとして「あるもの探し」を行い、実際に作法を体験した。本来の「あるもの探し」とは形は異なるものの、参加者全員がよそ者の為に地元の方々に聞く時の作法や実際に沢山のモノに気づくという、よそ者としての視点を具体的にかつ楽しく学んだ。



アクション・プラン

① 市町村に「あるもの探し」を通しての町おこしの推奨

地元の方々も参加し市町村の新たな魅力や外部者によって気づかされる改善点など、「あるもの探し」を通しての町おこしを市町村に推奨したい。

② ボランティア活動

環境問題が騒がれている現在、自分達が住んでいる地域において出来ること（例：地域で行われるゴミ拾いや自然体験学習のスタッフなど）にボランティアで参加して、環境問題と地域に貢献する。

③ ファシリテーションの活用

コミュニティの人々に対して交流や対話の相手として認められる為に、多くの場でファシリテーションを実行していく。

分科会参加学生の感想：何より印象深かったのは海外の現場に行ったら自分達はよそ者だという言葉でした。よそ者は基本的に地域づくりにおいて相手に気づかせることが重要だという先生のメッセージは今でも頭に残っています。（白鷗大学 教育学部 3年 望月 悠平）

ファシリテーター感想：ファシリテートの大切さとファシリテートが人の行動に与える変化を感じる事が出来た。この分科会での経験を気にファシリテーションを他の分野でも活かしたいと思いました。（白鷗大学 教育学部 3年 望月 悠平）

講義（C）障がい者を取り込んだ地域開発

【講師氏名】石井 博之（いしい ひろゆき）

国際医療福祉大学 理学療法学科 講師

【講義概要】

1. 初めに

私は理学療法士という仕事に就き、日本や海外で障がい者（児）にリハビリテーションをおこなってきました。これらで多くの人々との交流で得た体験は私にとってかけがえのないものです。今回はそれらの体験から、国際協力の魅力を少しでもお伝えできたらと思います。

また地域で暮らす障がい者の生活向上には、我々リハビリテーション専門職だけではなく、食（農業）や教育、経済など地域開発全体の視点が大切であり、皆さんと一緒に地域で暮らす人々全てが幸せになることはどんなことを考えていければと思っています。



2. 主な活動概要

- 1) マレーシアでの青年海外協力隊経験；1993年から2年間、サラワク州社会開発省福祉局に赴任。障がい児早期リハビリテーション介入プログラム、C B R（Community Based Rehabilitation；地域に根付いたリハビリテーション）などいくつかの活動場所を巡回訪問。
- 2) マラウイ共和国での青年海外協力隊調整員経験；1999年から2年間、青年海外協力隊調整員としてマラウイ共和国 J I C A（国際協力機構）事務所に赴任。
- 3) 中国でのリハビリテーション専門職要請大学設立支援；2004年から1年半、J I C A 専門家として中国リハビリテーション研究センターに赴任。
- 4) ヨルダンでの C B R 活動への支援；2007年から1年間、社会開発省に赴任し、農村部での障がい者支援体制構築を行った。
- 5) 2010年9月から中国広西チワン族自治区に赴任予定。

3. 国際協力の魅力

ここで私は自分の理学療法士としての技術、知識を伝えること以上に、現地で暮らす人々の暮らしの中から実に多くのことを私自身が学んだように思います。そこには人と人との結びつき、思いやり、やさしさがあり、それ無くしてはどんなに高度な技術があっても良い物は産まれないということを実感しました。

また、ともすれば先進国の人々がどこかに忘れてしまったような大切なものを彼らは何よりも大切にしているのではないかと感じます。そしてこれからの時代、豊かな国が貧しい国を助けるのではなく、同じ視線に立って共に尊重し合い、お互いがお互いから学びあえたら素晴らしいと思います。

【略 歴】

国際医療福祉大学大学院博士課程修了、保健医療学博士。マレーシア、マラウイ、ベトナム、ヨルダンなどで、J I C A 専門家として派遣。地域医療、海外理学療法事情、発展途上国における適正技術などを研究。専門は、義肢学、装具学、高次脳機能障害学。

【学生のレポートより】

今までは、障がいを持つ人だけを支援すればいいと考えていたが、障がいを持つ人と持たない人との関係まで視野に入れて活動していくのは、大変だが必要不可欠なことなのだと思います。(宇都宮大学 国際学部 3年生 鈴木瑠里子)

【全体発表概要】

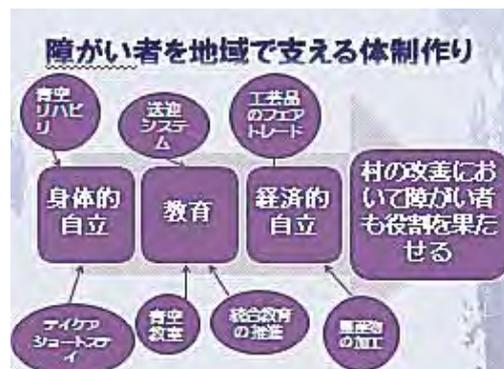
学んだこと

まず障がいについての共通認識を確認するため「はたして障がいを持つことは不幸か」というテーマでディスカッションを行った。「障がいを持つことは不幸である理由」として、周囲からの障がいに対する差別・偏見があることや、移動面において環境のバリアが存在すること(例：点字ブロックの上に駐輪されている)などの意見が挙げられた一方、「障がいを持つことは必ずしも不幸とは言えない理由」として、障がいをバネに才能を磨いていく人々がいること、環境が整えられれば障がいは障がいではなくなるのではないかということ、そして「障がいを持つことは不幸か」ということは本人が決めることである、などのポジティブな意見も挙げられた。

結論として、「障がいによって心理的・物理的バリアは発生するが、視点を変えることができれば不幸になるとは言えない」と考え、障がいについて一つの共通認識が確認できた。「本当に福祉施設は必要か」に関しては、「福祉施設が必要である理由」として、専門家によるケアなどが受けられること、今日の核家族社会においてそれぞれの家族が仕事や学業に専念できることなどが挙げられた一方、「福祉施設が不要である理由」として介護慣れによる自立の妨げ、障がい者と健常者が隔離された社会の形成、福祉コストなどの問題が挙げられた。地域に溶け込む役割を持った施設(デイケアやショートステイなど)というものが、本来在るべき福祉施設の形ではないかという結論に至った。

以上2つのディスカッション内容を踏まえ、ヨルダンのある村に暮らす障がいを持った女性の事例から、その村全体が幸せになる方法として「障がい者を取り込んだ地域開発」というテーマについて、考察・検討した。

まず、障がい者の身体的自立を民間で行うリハビリ(青空リハビリと命名)やデイケアなどの施設によるケアで確立する。次に障がい者に教育の機会を確保するため、村人の協力による学校への送迎システムや民間の青空教室の実現、統合教育の推進を図る。さらに工芸品製作や農産物の加工などの職を創出し障がい者の経済的自立を促すとともに、村における役割を果たすことで、「障がい者を対象の中心とした地域開発」ではなく、「地域開発に障がい者も同じ村の構成員として参画する」という状態を目指す。



アクションプラン

実際にヨルダンへ赴き、今回のプロジェクトが少しでも実現するよう行動することを真摯に考え、今後の課題とする。

分科会参加学生の感想：私は福祉についてほとんど知識のない状態での参加であったが、地域開発というものを考えるにあたって、これまで授業やサークルで触れたことのある途上国開発、農村開発に通じるものがあり、改めて国際協力と福祉の大きな重なりを感じた。地域開発の具体的なシミュレーションの中で学べたことで、より具体性を持って理解することができたと思う。(宇都宮大学 国際学部 4年生 佐藤 杏子)

講義（D）コミュニティ開発とボランティア

【講師氏名】眞貝 沙羅（しんかい さら）

白鷗大学 教育学部 特任講師

【講義概要】

1. 大学生だったとき
国際協力に関心を持ったきっかけ
学生時代に経験したボランティア活動と留学
2. 海外ボランティア体験
青年海外協力隊に参加
現地での活動と異文化の中で暮らし
3. 帰国後
大学院進学
自分のテーマ設定：「住民参加型の開発とは？」
4. 白鷗大学へ
自分の身近にあった「現場」
5. まとめ
出会った人達との相互作用
学生時代にやっておくこと



分科会内容

- ◆コミュニティ開発とは？ 住民参加のプロセスと手法を体験します。
- ◆海外ボランティアに参加してみよう！ ステップと求められる素質を考えます。
- ◆ケース・スタディ：現場の抱える課題と醍醐味
～講義と参加型ワークショップを通して学んでいきます。～
住民主体の開発とは？皆さんの積極的な議論を期待しています！

【略 歴】

津田塾大学学芸学部国際関係学科に在学中、国立フィリピン大学に留学。農村や漁村で社会調査をしながらコミュニティ開発を学ぶ。大学を卒業後、青年海外協力隊員、村落開発普及員として中米パナマに赴任。帰国後、JICA青年海外協力隊事務局で国内協力員として勤務。その後、イギリスのレディング大学に留学。農村開発の修士課程を修了。ベトナムでJICAインターンを経験後、2010年10月より白鷗大学に勤務。国際キャリア開発プログラムを担当。

【学生のレポートより】

学ぼう、吸収しよう、考えようとする姿勢がより強く持てるため、目的意識が大切である点に大変共感した。私はボランティア系のサークルで軽い気持ちでタイの農村と小学校を訪問したことがあるが、目的意識を持っていたならもっと広い視野で物事が見られたのではないかと後悔した。（宇都宮大学 国際学部 2年生 青野 宏美）

【全体発表概要】

学んだこととその根拠

○ オープンマインド

コミュニティ開発は、人と人とのつながりの中で行われるもので、住民とのワークショップを用いる。開発にあたり、コミュニティワーカーに求められる資質は、積極性、社交性、決断力、根気、我慢、やる気などが挙げられる。また、相手の意見を聞く力、信頼、オープンマインド、偏見を持たないなども重要である。

○ ファシリテート

開発にあたって、開発ワーカーが意見を押し付けるのではなく、コミュニティ全体としての意見を引きださないと住民の協力は得られない。そのために、スムーズな議論のためにきっかけを作ることが重要となる。事実、従来の開発では意見を押し付けることが多く、協力があまり得られないということがあった。しかし、ファシリテートを行うことで住民の持つ要望や意見を引きだし、協力を得られるほか、持続的な開発も望める。

○ 住民参加型開発

「住民の 住民による 住民のための開発」ということが重要となる。つまり開発ワーカーでなく、住民自らが主体的に活動を行うことで、より良い開発、そして、住民の自立を目指す。依存ではなく自立を目指すことも、コミュニティ開発の中に含まれ、最終的に住民自らがコミュニティを運営していくことを望む。それら住民参加型を行うには、感覚・価値観の違いを理解し、ニーズを見極める、つまり相互理解が必要となってくる。

アクションプラン①サークル活動

人数が多いサークルだと、メンバー全員の意見が行き届かないことがある。なので、メンバー全員で話し合う場を設けて、一人ひとりの不満などを一つずつ解消していける関係を作る。

アクションプラン

○ サークル活動

サークル活動ではサークル長などまとめる人がいる。そのまとめる立場の人が、自らのやりたいことだけを行い、自分の意見だけを押し付けていては、やがてそのサークルは連結を失い、機能しなくなる。そこで、ファシリテートを利用することにより、サークル活動を通して全員が何をやりたいのか、どのような考えを持っているのかを引きだし、よい活動ができるのではないかと。

アクションプラン③海外ボランティア

ボランティアによって自分が達成感を得たり、満足することで終わらせるのではなく、現地の人々と食話し、コミュニケーションをとることを重要視することで相手にとってはどんな活動が本当に役に立つのか考え、見極める。そして現地の人目線で、現地の人と共に活動する。

○ 留学生とのコミュニケーション

留学生とのコミュニケーションをする際、オープンマインドが必要になるのではないかと。自分からアクションを起こさなければ留学生とのコミュニケーションはできなく、また偏見を持たずに心を開かなければ、その交流は長く続かないからである。オープンマインドを活用することで、異国や異文化の人々と理解が深められ、交流がより良い方向へ結びつく。

○ ボランティア

全てを一方的にやってあげるのではなく、住民参加型開発のような考えが必要なのではないかと。ボランティアをする対象の人とコミュニケーションをとり、相互理解をしたうえで、一緒に何かをやるのがボランティア活動をする際には良いのではないかと。それによって、ボランティアをする側、対象の人との間に信頼などが芽生える。

分科会参加学生の感想：コミュニティー開発の厳しさを強く感じた。便利品を差し出したり作るだけの開発では、一時的なもので便利になるかもしれないが、それが壊れると地域開発どころか生活の妨害にも成り兼ねない。そこで、今回研究した『オープンマインド』、『ファシリテート能力』と『住民参加型開発』の考え方は、実際に明日からでも活動に移せるのではないかと思う。(宇都宮大学 国際学部 1年生 高中 祥太)

ファシリテーター感想：国際キャリア開発基礎の合宿やファシリテーターという役割を通して、自分自身、発見することも多くあり、そして得ることも数多くありました。ここで経験したことや新たに知ることができたことを、これからの学生生活や日常生活に生かしていきたいと思います。(白鷗大学 経営学部 3年 鳴瀬 貴子)

講義（E）日本語教育

【講師氏名】村上 吉文（むらかみ よしふみ）

国際交流基金日本語教育上級専門家

【講義概要】

1. 仕事の内容

日本語教師の仕事は日本語を母語としない人に日本語を教えることです。外国人がほとんどですが、日本国籍を持っている人の中にも日本語を母語としない人は大勢います。

授業の前には「教案」や「教材」を作ります。経験が無いうちは徹夜になることも少なくありません。

いい教案を書くには自分自身が常に勉強していなければなりません。日本語は自然に話せるようになっているため、文法や発音について普通の人は客観的に説明することができません。また、学習者の母語についての知識も必要です。海外で働く日本語教師は業務外でも外国語が常に必要です。ITエンジニアや看護師に対する日本語教育では、学習者の専門分野に関する知識も必要になります。



2. 仕事の背景

日本語教育は世界で拡大中です。海外の学習者は2006年から2009年の間に2割増加しています（300万から360万人 国際交流基金調べ）。その背景には経済のグローバル化や日本発のサブカル（アニメ、マンガ、ゲームなど）の普及があります。

また、国内でも少子高齢化により外国人労働者が必要とされています。民主党の古川元久官房副長官などによる「1000万人移民受け入れ構想」、自民党の中川秀直（元）内閣官房長官による「多民族共生国家」論（こちらも1000万の移民受け入れ）などがあります。

3. 仕事の魅力

「球技大会は明日、体育館___あります」「バスケット部の部室は体育館___あります」似たような文なのに、下線部に入る助詞が違うのはなぜでしょう。こういった言葉に対する疑問に関心を持てる人なら、日本語教師の仕事は面白いでしょう。

また、日本語教師は常に異文化に接しています。日本の国内でも学習者は常に外国人ですし、海外で仕事をすることも多いです。私が一年以上住んだことのある国はカナダ、モンゴル、サウジアラビア、ベトナムの四カ国で合計13年、今月からはエジプトに二年の契約で派遣されます。とても刺激的な毎日です。

しかし、一番の魅力は人間の成長に立ち会うことができることではないでしょうか。かつての教え子が日本の会社や大使館などで働く様子をFACEBOOKなどで見ると、感無量です。

【略 歴】

杏林大学大学院卒。与野学院日本語学校に就職。青年海外協力隊としてモンゴルで活動。以後、国際交流基金の日本語教育専門家としてサウジアラビア、モンゴル、ベトナムに派遣される。エジプトの国際交流基金カイロ日本文化交流センターに赴任予定。

【学生のレポートより】

日本語の学習者が年々増えているというデータに、また、教師の活動範囲が日本国内だけでない事実に驚いた。これからの高齢社会で外国人労働者が増えることが予想され、ますます日本語学習者が増えるのではないかと思った。（宇都宮大学 国際学部 1年生 黒淵 琴美）

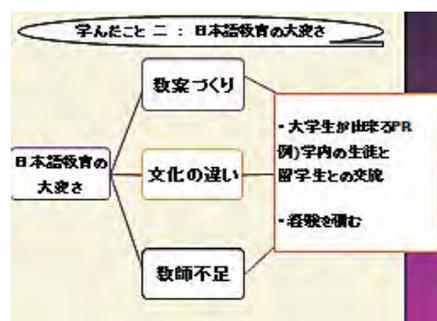
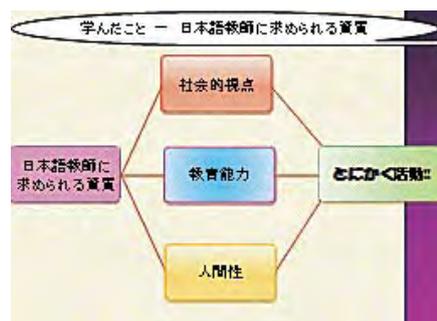
【全体発表概要】

学んだことその根拠

1. 日本語教師は身近な国際貢献

決して難しい道でなく、どこにいてもできる交流活動である。日本語教師の資質には、社会的視点、教育能力、人間性の3つが挙げられる。これらはどんな社会に出ても必要なもので、国際問題に偏見を持たないことや、広い視野で周りを見ることができ、教育能力や人間性に関しては、言語能力や自律・対人能力、などのことを指す。

アクションプラン：いろんなところで活動し、その中でリーダーシップを発揮しながら周りとともに何かを作っていくこと



2. 日本語教育の現状の大変さ

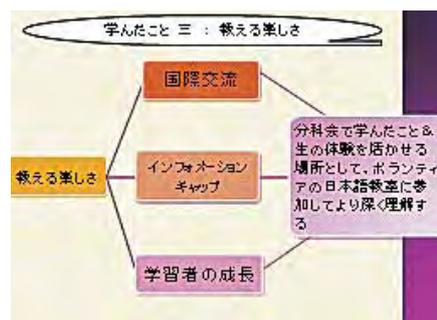
教案づくりでは、基礎や応用の教え方の例文や場面を考えるのに、基準が分からず苦労した。より沢山のコミュニケーションがとれるようなものにする必要がある。文化の違いに関しては、国内外にかかわらずこの仕事ならだれもが直面する問題で、どんな違いがあっても、とにかくそれを受け入れる姿勢を忘れず、同じ目線に立って行動していくことが重要である。教師不足に関しては、これは実際には教師の数はあまり変動しておらず、生徒数がここ最近でどんどん増えてきている現実があり、供給が間に合っていないとのことだ。

アクションプラン：日本語教師を目指す学生として、学校の留学生と積極的に交流したり、日本語教師のボランティアなどを学内でPRするなど、とにかく知ることや、知ってもらうことが必要である。

3. 教えることの楽しさ

教えることを通して自分も様々なことが知れるので、交流が盛んになり、自分の世界も広がっていくのが感じられる。インフォメーション・ギャップについては、知らない情報を埋め合うことで、新たなコミュニケーションが生まれ、学びも大きくなる。学習者の成長は、指導者であれば誰もが経験する喜びであって、初めは全く話せなかった人が、ある日日本語で「ありがとう」と言ってくれたりすることは何よりの喜びだろう。

アクションプラン：実際に日本語教育の現場に出てみる。



分科会参加学生の感想：日本語教師は魅力的な仕事でありながら、現実の厳しさを感じた。世界で日本語を学びたい人が年々増えているのに、日本語教師の数がなかなか増えていない。日本語教師になるための資格試験の合格率はわずか17%で、日本にいる日本語教師の半分は給料なしのボランティアである。(宇都宮大学 国際学部 2年生 劉 禹君)

講義（F） ジャーナリズムと平和

【講師氏名】大崎 敦司（おおさき あつし）

ジャーナリスト／元朝日新聞記者／津田塾大学講師（平和学）／
NGO・映像でアフリカを伝える報道グループ「SAMAFA」主宰

【講義概要】

【1】記者の報道の仕事と役割／マスメディアの影響力と組織

新聞社の仕事と役割、マスメディア・フリーの記者、ネット時代に過熱化する「速報」競争

【2】国際報道の仕事／戦争と平和、アフリカ・中東の現実を伝える

海外特派員の仕事、戦争報道の仕事の具体例と注意点、日本のマスメディアの国際報道の特徴と弱さ、取材中の困難、良い取材に必要な事前準備

【3】「事実」をどう伝えるか／問題意識と伝えるスタンス

事実を正しく把握するために、何を伝えるか、人間性と優しいまなざし、社会悪や不正への怒り、暴力や非道な権力の行使に、ペンと映像の力で戦いを挑む、偏った立場で事実を一方的に伝える危険性、「両刃の剣」＝報道の危険性、より深い取材を目指して、「調査報道」とスクープの大切さ、隠された真実を伝える責任

【4】「映像」などのパワフルなツールを使って伝える

「SAMAFA」（Sangenjaya Magnum for Africa）、アフリカの平和構築・開発援助の番組制作、「伝えるためのツール」の特長 ①書く、②写真、③ビデオ動画、④語り伝える ⑤ネット

【5】記者になるために必要なもの／志望に向けたアドバイス

記者を志した理由／夢をどう実現？、優れた記者、カメラマンの資質、記者になるための具体的なアプローチ、大学時代に磨ける感性と問題意識、社会常識、「伝える力」を伸ばすには

【6】取材の仕方と記事の書き方《実践的体験講座》

取材の基本的な進め方、取材相手への接触、執筆者・撮影者としてのスタンスの決め方、記事書きと注意点、写真・動画の注意点、試みに取材をし、映像を撮り、記事を書いてみよう。

【略 歴】

慶應義塾大学法学部卒業。在学中、アフリカの国際政治研究を主導した小田英郎教授（現名誉教授）にアフリカの紛争について学び、アフリカを取材旅行。以来20年間でアフリカ33ヵ国を歩く。朝日新聞社に入社後、日本国内とアフリカ・ナイロビ、イラク・バグダッドなどで勤務。イラク戦争を始め中東、アフリカの紛争やテロ、難民、感染症、開発、核・エネルギー、環境、軍事、平和問題を長年取材。ブッシュ前米大統領のアフリカ5ヵ国初訪問にも同行取材。2001年、社外活動としてアフリカ関係のジャーナリスト達とNGO「SAMAFA」を結成。2008年フリーに。国際労働機関（ILO）のためにタンザニアで貧困解決



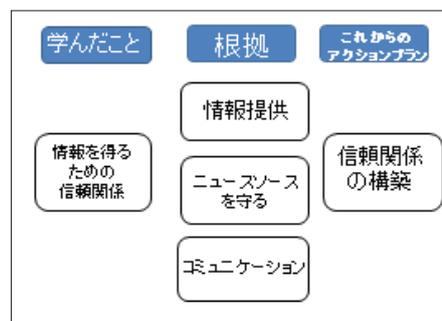
とインフラ開発の必要性を訴えるテレビ放映用番組を制作。津田塾大学講師（平和学）としてライフワークの「戦争と平和の問題」を講義している。

【学生のレポートより】

大崎氏の、報道と平和に対するとっても熱い気持ちがあっすぐ伝わってきた。「戦争は世界で最低最悪な行為だと思う。」とあんなに力強く、全力であっすぐ教えてくれる方はなかなかいない。豊かな国として「伝える」必要があるという考えにも強く共感した。（宇都宮大学 国際学部 1年生 田中 えり）

【全体発表概要】

学んだこととその根拠



1. 情報を得るための信頼関係

何事においても相手との信頼関係の構築は必須であり、情報を聞き出すことにおいてもそれは変わらない。しかし、簡単に信頼関係を構築するといっても何かのマニュアルがあるわけではなく、相手によって接し方を変えなければいけない。大崎先生の信頼構築のための努力、工夫に関するお話からそのようなことを学んだ。

アクションプラン：何事にもおける信頼関係の構築を実践する。

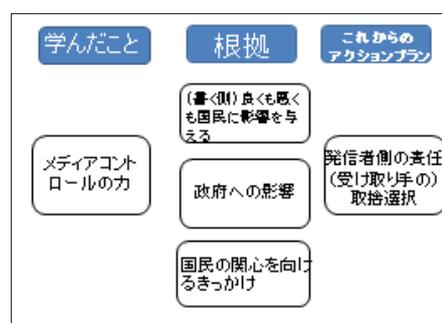
2. 伝える大切さ

ただ情報を自分で持っているだけでは何も始まらない。能動的に情報の発信、受信を心がける。そしてその際には情報に誤りが含まれると多大な迷惑・混乱が生じる可能性がある。

アクションプラン：情報の発信の際には正確な情報の伝達を心がけ、憶測で話さない。

3. メディアコントロール

1994年にルワンダで起きた大虐殺を例に挙げながら、巨大なメディアの持つ影響力の大きさと、その力は常に大衆を間違った方向へ導く可能性について話を聞いた。そしてこの力の責任はメディア側だけでなく受け取り手側であるわれわれも細心の注意を払う必要があることを学んだ。



アクションプラン：受け取り手である場合は情報を冷静に分析、捨捨選択する。発信者である場合は自分の発する情報に責任を持つ。

分科会参加学生の感想：実際に記者になり、取材を行い記事を仕上げるというシミュレーションで、人から話を聞きだすことの難しさを感じた。スクープなどを取るために記者が取材する相手は、基本的に本当の話をしたくはない人が多い。その中で、根気と誠実な姿勢や論理的な話し方が重要であると感じた。（宇都宮大学 国際学部 4年生 齋藤 亜季）

講義（G）観光とまちづくり

【講師氏名】大野 邦雄（おおの くにお）

作新学院大学 経営学部 特任教授

【講義概要】

- I. 私の歩んできた道
 1. エンジニアとして
 2. 産学官連携コーディネータとして
- II. 今なぜ観光まちづくりなのか
 1. 日本の置かれている立場
 2. 輸入に頼る日本の課題
 3. 観光産業の特長
- III. 観光まちづくりを考えてみよう
 1. 栃木の位置づけと観光資源
 2. 観光資源活用例
 3. 観光資源開発例
 4. 観光シミュレーション



海外から訪れる人に喜ばれ、且つ、住む人にとっても住み良く、更に観光業に携わる人にとっても有益な観光地にするにはどうあるべきだろうかとか、観光産業を持続するにはどうすべきか、などを考える一助になって頂ければと思います。

【略 歴】

電気通信大学機械工学科卒。松下電器産業株式会社（現パナソニック株）で設計開発、経営企画を歴任。松下を早期退職し宇都宮大学にて産学官連携コーディネータとして8年目。昨年11月からは作新学院大学にて「国際キャリア開発プログラム」の特任として従事。松下時代よりボランティア活動の一環としてまちづくりに携わり、更に、産学官連携コーディネータの活動の一環としてインバウンドを念頭においた観光まちづくりを推進。

【学生のレポートより】

実際に観光地に住むと、お客さんの集まる時期・場所・時間には大きく偏りがあることがわかる。しかしその偏りにあわせて、まちづくりのイベントや行事がされていることにも気付く。よりよいまちづくりに参加するために、こうした観光の地域の作り方にも目を向けて、イベントや行事には積極的に取り組みたいと思った。（宇都宮大 国際学部 2年生 波多腰優里）

【全体発表概要】

学んだこととその根拠

1. 観光まちづくりの重要性：

日本は地下資源が無く、資源を輸入し加工したものを輸出することで利益を得ている。資源の価格設定など資源国に握られているので、日本は技術産業だけでなく他の産業にも頼る必要がある。小泉元総理が「Visit Japan」と提唱したように、日本には観光資源がたくさんある。観光客が増えることで、交通機関、店舗など、観光に関連するさまざまな産業が潤う。観光資源は大きく環境を破壊することなく、かつ少しずつ手を加えていくだけで長持ちする。

アクションプラン：実際に自分の身の回りのまちおこしに参加したり、提言したり、関わっていくことで、身近なところから観光資源を作っていく。

2. 理想の目標をもってあきらめずにやり遂げる事の大切さ：

何事も、夢を持って実現することは大変だが、夢に向かって行動し続ける事によって、必ず成功は見えてくる。観光まちづくりにおいても実際に周りを動かしたり、行政を動かしたり、強い意志がないと変える事ができない。

アクションプラン：小さな目標を1つステップして、大きな目標に設定してみる。

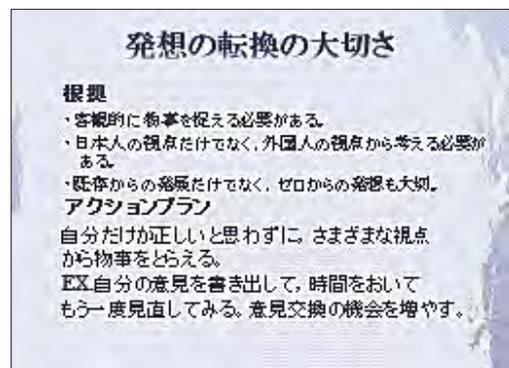
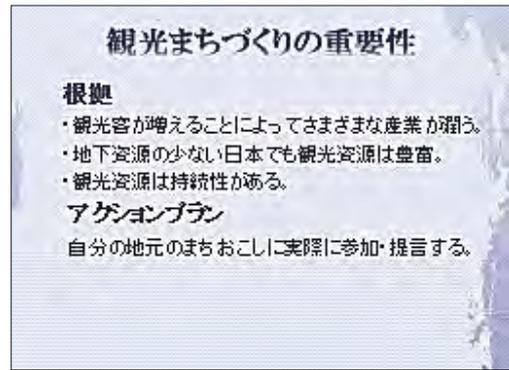
3. 発想転換の大切さ：

まちづくりにおいては、地域の人たちだけで、まちづくりをするものだと考えがちだが、外からの人がまちづくりに参加することで、今まで無かった考えを反映したり、気付かなかったりした点に気付くことができる。

〈まちづくりに必要な3モノ〉

- ・よそ者：外からの視点
- ・若者：若い力、情熱
- ・バカ者：周りから馬鹿にされても何としても成功させるという強い意志。

アクションプラン：自分の意見を書き出して、時間をおいてもう一度見直してみたり、周りの人に見てもらったり、意見交換の場を増やすことで、自分とは違う発想を知ることが大切である。自分だけが正しいと思わずに、様々な視点から物事をとらえることをすることが必要だ。



分科会参加学生の感想：栃木県の産業の概要から、栃木県は資源が豊富で観光やまちづくりに適した土地であることを知り、栃木県でまちづくりをするのはおもしろいかもと思った。まちづくりで1番大切なものはイメージーションであるということを理解した。(宇都宮大学 国際学部 3年生 赤坂 優実)

講義（H） 開発輸入ビジネス

【講師氏名】 佐々木 敏行（ささき としゆき）

株式会社F A R E A S T 代表取締役

【講義概要】

社名F A R E A S Tの由来は、世界の文化を商品にのせて、遙か東の果てのこの国に運ぶことにあります。世界を歩けば様々な文化に出遭います。それは食べること、着ること、住むこと…およそ生きることにまつわるあらゆることにその土地独自の文化や歴史が映って見えます。その有りようは時に怪しく、魅力的ですが、古来人間はこうした異なる文化との接触を通じて、それを理解し、取り入れ発展してきたのです。我々F A R E A S Tのバイヤーが異国の地を訪ねて感じた、驚き、感動、ワクワク感を日本という文化圏にも伝えたいというのがわざわざ海を越え、遙か東の果てにまで運んでくるそもそもの動機です。



1. 貿易という仕事

異文化圏の人々と有形無形のものがある価値基準で交換することが貿易です。文化や習慣、ものの考え方が異なる場合、コミュニケーションを深めていくには、その差異を認め合い、互いに溝を埋めていくという作業が必要になります。ビジネスでは互いに自らの価値を主張し合い、相手の価値を認め合うという行為のなかである基準を設けていく。それが交渉です。その過程で未知の文化に触れ、共感したり、反発したりしながら互いに理解を深めていき、延いてはビジネスとして持続的な発展を可能にしていく。これは旅ではなかなか味わえない、貿易業というビジネスならではの魅力です。

2. 開発輸入

世界各地には未だ日本では知られていない素晴らしいものが沢山あります。それを発掘し、日本市場に受け入れられやすいように企画開発していきます。マーケットを調査し、購買心理を研究し、デザインに趣向を凝らします。さらに、人にモノを渡すとき、それは安全なものでなければなりません。人とモノを交換するとき、それは当然に互いを利するものでなければ続きません。だからF A R E A S Tで取り扱う商品はスタイリッシュでありながら、当然にNatural, Organic, Fair tradeであるべきだと考えております。

3. 販売

手塩にかけた商品を宣伝し、販売することは最も重要なことと言えます。極端に言うとなければビジネスの継続もありません。勿論生産現地への寄与も適いません。企画力、宣伝力、販売力を磨くことでビジネスセンスが向上します。結果的に事業に関わる出来るだけ多くの人への還元ができるとなればそれは本望であるし、販売を通して自らの表現が市場で受け入れられる喜びもまたそれはそれで格別なものです。

【略 歴】

発展途上国を中心に世界各地で食品、雑貨の開発輸入を行う。商材発掘→輸入→企画・デザイン→営業販売までを一貫して行い、ナチュラル、オーガニック、フェアトレードなどをコンセプトとし、各地の文化やストーリーを織り込んだスタイリッシュな商品化を実践する。販路は日本全国及び海外。開発輸入の専門家として途上国や各関係機関へのコンサルテーション、開発輸入に関する講演なども行う。20代の大半は海外を放浪し、世界にはまだまだ素晴らしい文化やものがあることを見聞する。

【学生のレポートより】

「できない理由を見つけない」という佐々木氏の言葉は、本当に何にでも当てはまることだと思った。私は今まで、正直あまりフェアトレードに対する関心はなかったが、これからは商品を見るなど、開発途上国のために自分にできることを考えていきたいと思った（宇都宮大学 国際学部 1年生 佐々木 秋）

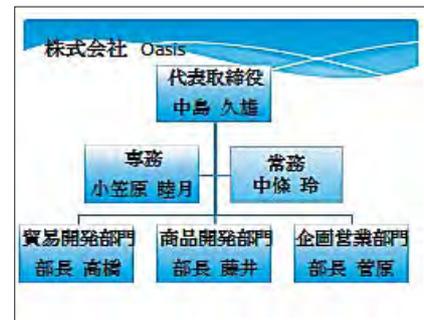
【全体発表概要】

実際に会社を設立して、シミュレーションをすることでFair Tradeとは何か、そもそも開発輸入ビジネスとは何かを体験的に学んだ。会社では3つの部門に分けて、マダガスカル産バオバブの木の石鹼を輸入・販売を行った。

貿易開発部門：実際に現地の工場と交渉を行う部門。メールを送り、相手の反応を探ることが大切。

商品開発部門：商品の値段を決める。安くすればいいというものではない。値段を高くして付加価値をつけることも必要。消費者に「欲しい」、「買いたい」と思わせる絶妙の値段設定が難しかった。

企画営業部門：商品のプロモーションを行う。どこで売なのか。どの年代・性別をターゲットにするのかなど明確にする。クオリティ・デザイン・パッケージ・トレンド・実用性・“異なる”・“未知”がカギ。



学んだこととその根拠

1. コミュニケーションの大切さ

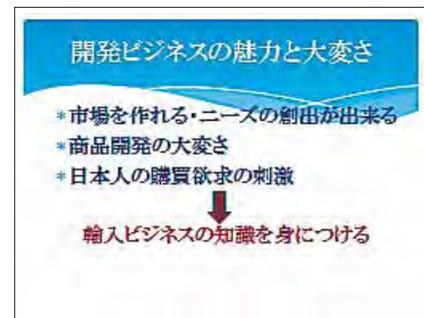
各部門の連携、情報の共有・確認が大切であった。各部門の意見をまとめて一つのプロジェクトを成功させることの難しさがある。各人が得意分野で力を発揮することが必要。

アクションプラン：プロジェクトに参加している全ての人々が能動的に動くことが必要。

2. Fair Trade

まずは、ビジネスが成り立つかが重要。利益を出すことが根底にある。そして、現地の人を助けるために商品を輸入するのではなく、対等に現地の人々の自立を促す・技術提供しアドバイスすることがFair Tradeである。

アクションプラン：常に市場への関心・興味を持ち、アンテナを張ることが必要。



3. 開発輸入ビジネスの魅力と大変さ

新しい市場を作ることができる。ニーズの創出ができる。購買欲求を駆りたてる商品開発の難しさを学んだ。

アクションプラン：輸入ビジネスの知識を身に付けることが必要。例えば、輸入における法律も学ぶ。（化粧品の輸入には、薬事法の知識が必要になる）

学生の感想：コミュニケーションの大切さを実感した。各部門の連携、情報の共有・確認がとても重要であった。ビジネスには、各部門の意見をまとめて一つのプロジェクトを成功させることの難しさがある。各人が得意分野で力（自分の役割）を発揮することが必要である。チームプレーで、全ての人々が能動的に動くことが重要だと感じた。（宇都宮大学 国際学部 3年生 中島 久雄）

ファシリテーター感想：参加者全員が均等に公平に発言できる環境・雰囲気作りに苦労しました。分科会では参加者が互いの意見を尊重し認め合いながら学び合えたこと、チームの成長につながったことに達成感を感じています。チームプレーが求められる今日、ファシリテーターの役割は極めて重要であり、今回の経験が必ず生きてくると確信しています。（宇都宮大学 国際学部 3年 中島 久雄）

講義（I）国際経営コンサルタント

【講師氏名】池田 栄治（いけだ えいじ）

（株）富士ゼロックス総合教育研究所 コンサルティング統括部 シニアコンサルタント

【講義概要】

1. 「国際経営コンサルタント」とは具体的にはどんなことをするのか。

1) コンサルティング業務

①例) 企業の海外進出や海外オペレーションを応戦します。

2) リサーチ業務

①例) 海外市場のマーケティングや投資環境を調べます。

3) グローバル人材育成業務

①例) 海外でリーダーシップの発揮ができる社員を育成します。



2. 求められる能力（3C）

1) コーディネート：プロジェクトマネージャーとして周りを巻き込む

2) コミュニケーション：言語的、非言語的、空気を読む

3) コネクション：組織間、個人間のかかわり方の重要性

3. キャリア形成

1) すべきこと～所属組織の中での自分の役割（周りからの期待）

2) したいこと～単なる「好きなこと、やってみたいこと」ではなくて、生きていくうえで「自分が大切にしている価値」の実現（キャリアアンカー）

3) できること～自分の強み・持ち味が発揮できること

4. メリット・デメリット

5. 分科会：活動シミュレーションの概要

1) 宇都宮餃子の海外戦略の検討

2) グローバルリーダーに求められること、育成方法の検討

【略 歴】

早稲田大学院卒。三井住友銀行に入社後、韓国延世大学に語学留学。三井住友銀行ソウル支店に長年勤務し、政府関連や民間企業への融資業務を担当。日本総合研究所に移り、海外市場調査、海外投資相談、外資系企業の経営コンサルティングに従事し、立命館大学経済学部「アジア経済論」の客員教授を兼務。現在は富士ゼロックス総合教育研究所で、グローバル人材育成のコンサルティング及びトレーナーを務める。

【学生のレポートより】

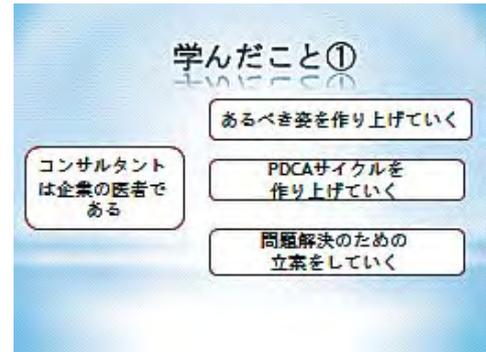
海外で会社を運営することは、やはり日本でやるのとは大きな違いがあり、それをサポートする国際経営コンサルタントという仕事は、これから企業の海外進出が増えていく時代に、より大きな役割を果たすようになるだろう。何か新しい仕事が生まれると、それに伴う溝を埋めるための新たな仕事が生まれるのだなと改めて思った。（宇都宮大学 国際学部 4年生 畑中 彩実）

【全体発表概要】

学んだこととその根拠

1. コンサルタントの仕事は医者：

医者は私たち人間のあらゆるけがや病気を治すが、コンサルタントという仕事は企業の弱点や悩みを受け、解決に導くという点でコンサルタントは医者であるという。問題解決のためにはPDCAサイクル plan、do、check、action（計画→実行→チェック→再実行）が必要であるが、それもコンサルタントの仕事である。また、企業の持つ問題を聞き、その解決策を出すことがコンサルタントの主な仕事内容である。



2. 「キャリア・アンカー」：

キャリア・アンカーとは仕事の上で大切にしている価値であり、大まかに次の8つに分かれる。

- 1、管理的
- 2、技術的
- 3、安全性
- 4、創造性
- 5、自律と独立
- 6、奉仕、社会貢献
- 7、純粋な挑戦
- 8、ワーク・バランス

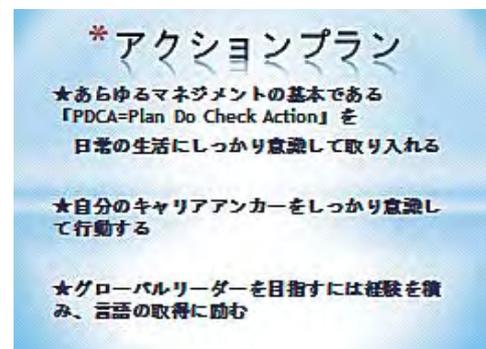
この8つの中から3つ位に絞ることで、自分の求めている条件が見えるようになり、仕事での価値を見つけられる。これからの人生の半分以上が仕事なので仕事を楽しむことで、人生を2倍楽しめる。仕事での価値を見出すことが人生を豊かにする原動力である。

3. 理想を実現する強いリーダーシップが必要：

その理由は、今はグローバル時代であり、また、現段階の日本には世界で通用するリーダーがないからである。そのようなグローバルリーダーは異文化の場で生きていくことができ、周りからも信頼を得ることができるコミュニケーション能力が必要である。コミュニケーションには非言語コミュニケーションも含まれている。人間は言葉で得る印象よりもはるかに表情から相手の気持ちを受け取るため非言語コミュニケーションとは非常に大切なことである。

アクションプラン

私たちが社会にでて活躍するために今すぐできることは、マネジメントの基本であるPDCAを意識して取り入れることである。自分のキャリア・アンカーをしっかりと意識する、グローバルリーダーになるためなら多くの経験と言語の取得が必要である。



学生の感想：コンサルティング業務について、仕事を問わず、海外で活躍する人材形成のために必要な事柄、価値について学べた。実際のコンサルティング業務さながらの企業の海外進出シミュレーションや問題分析も行えた。(宇都宮大学 国際学部 4年生 井津小百合)

国際キャリア開発特論

1. 目的

－問題解決能力を身につける－

国際的な分野で仕事をするための専門的知識と実務能力の向上に向け、第一線で活躍する講師を招き、演習を通して高度な専門知識や技能、仕事への姿勢を学び、国際キャリアの具体化を目指します。

2. 開催日時

2011年2月16日(水)～19日(土) 3泊4日

3. 会場

栃木県芳賀青年の家 〒321-4217 栃木県芳賀郡益子町益子4470

4. 合宿セミナーの様子



学生トークライブ



全体講義



講師とのフリートーク



分科会



分科会



全体発表



1. 開催日程表

1日目（2月16日）

時間	プログラム内容	備考
10:20 11:00	開講式・オリエンテーション	挨拶、プログラム説明
11:00 12:00	アイスブレイク	講師 NPOカタリバ
12:00 13:00	昼食	ファシリテーター打合せ
13:00 18:00	全体講義（国際開発分野でのビジョン実現プロジェクト）	講師 立山 桂司
18:00 19:00	夕食	ファシリテーター打合せ
19:00 21:00	学生トークライブ	講師 NPOカタリバ

2日目（2月17日）

時間	プログラム内容	備考
8:40 10:10	全体講義（海外安全管理）	講師 飯村 学
10:10 12:10	各講師講義（A～H）	
12:10 13:10	昼食	
13:10 14:10	講師とのフリートーク	14:10～15:00 ファシリテーター打合せ
15:00 18:00	分科会	
18:00 19:00	夕食	19:00～21:00交流会

3日目（2月18日）

時間	プログラム内容	備考
9:00 12:00	分科会	
12:00 13:00	昼食	
13:00 16:00	分科会発表準備	16:00～中間発表 (グループがペアになり、お互いの発表を聞く)
17:30 18:30	夕食	
18:30 20:00	分科会発表準備	

4日目（2月19日）

時間	プログラム内容	備考
8:30 11:20	全体発表（グループごと）	発表15分 質疑応答5分
11:30 12:30	総括／レポート作成とキャリア開発	講師 清水 奈名子
12:30 13:30	昼食・反省会	各テーブルで話し合い
13:30 13:50	閉講式	閉講の挨拶、証書の授与

2. 全体講義

全体講義 国際キャリア概論

国際開発分野でのビジョン実現プロジェクト

～ロジカルなビジョンの設定と、ビジョン実現のためのプロポーザルの作り方～

【講師氏名】：立山 桂司（たてやま けいじ）

合同会社適材適所 代表社員

【講義概要】

ビジョンとは何か？

- (1) ビジョンの定義（チャンス、チャレンジ、リスク、ブレイクスルー、ビジョン、夢の関係を含む）
- (2) ビジョンの実現のために必要とされる考え方や力について
- (3) 国際分野でのビジョンの設定と共有（ワーク）



1. ロジカルな考え方

- (1) 因果関係について考える（いくつかの原因とひとつの結果） なぜ遅刻するのか？
- (2) 問題を目的化する（目的を全うするためのいくつかの手段） 遅刻しないようにするには？

2. ロジカルにビジョンを実現するための道筋を考えてみよう！

- (1) ビジョンを実現するためにチャレンジすべきこととは？（ワーク）
- (2) チャレンジするためにつかまなければならないチャンスとは？（ワーク）
- (3) 優先的に進めるべきプロジェクトの選択（ワーク）

3. プロポーザル(企画提案書)の作り方

- (1) プロポーザルのコンテンツ
- (2) プロポーザルの評価

4. ビジョン実現プロジェクトのプロポーザルの作成

- (1) ビジョン実現のための方針、方法、工程、必要となるインプット、予算(ワーク)
- (2) ビジョン実現プロジェクトのプレゼンテーション

【略 歴】

1986年大学を卒業後、エンジニアリング系の開発コンサルティング企業に就職し、国際協力のキャリアをスタートさせた。2002年には、人間・社会開発系のコンサルティングファームのジェネラルマネージャーとして、プロジェクトの形成・推進・運営とともに若手コンサルタントの採用と人材育成、若手人材ネットワークの拡大に貢献した。2006年から3年間は立命館大学キャリアセンターで国際人材輩出のための専門職員として勤務し、就職対策アドバンスプログラムの企画・立案・実施・評価にも携わった。就活応援ブログ「就活テクニックABC!～就活にテクニックはいらない」も公開している（現在、書籍執筆準備のため更新保留中）。2007年には、国際開発と人材育成の理想実現のために自らコンサルティングファーム 適材適所 L L C を設立し、代表を務めている。

【講義概要】

本セミナーでは、(1)ビジョンを組み立て、(2)それをロジカルに考察し、(3)逆転の発想を利用し、自分ができない問題を自分の目的を全うするための手段に置き換え、(4)ロジカルにビジョンを実現するためのチャレンジやチャンスとなるキーワードを抽出し、そして(5)ビジョン実現のためのプロポーザル作りをした。ビジョンとは、自分自身がそうありたいと思う「ありたい姿」(will)と、友人・社会・外国の人たちなど他者が自分はどうあるべきかを考えた「あるべき姿」(must)に+ α を加えたものだ。すなわち、自分の希望を述べる上で、そのためにやらなければならないことを考え、それらを統合したものがビジョンである。ビジョンを整理する際に仕事ありきで考えないことがポイントで、それによって幅広いビジョンが見えてくる。明白なビジョンを持つことは、社会人になっても非常に重要である。

参加者は短期的(え年後)と中長期的(10年以上)のありたい姿とあるべき姿を考え、その4項目を統合してビジョンを作り上げた。ビジョン実現の力とは、一步一步進み、そして辛抱強く環境に順応しながら、全員の幸せが約束されている目的地に向かうことである。夢は抱くものだが、ビジョンは必然を創り出すこと、そしてある程度描くことによって実現することができたため、両者は異なる。

次に、ロジカルな考え方(因果関係)について考える作業で、例として「学校を遅刻する」原因が取り上げられた。その原因を無作為に出し、その中から直接の原因を選ぶ。例として、「時間通りに起きられない」「時間通りに家を出ない」「寄り道をする」が挙げられる。因果関係を踏まえた上で遅刻する場面を考える時、電車が遅れたなど自分でコントロールできないものは排除していく。最後に論理的思考から、学校に遅刻するなら、逆に「学校に遅刻しない」ことを目的にする。問題分析のTreeを作り、「なぜそうなるのか」を裏返すことで、目的のTreeができる。

ビジョンの先にある夢の実現のために、ロジカルにビジョンを実現させなければならない。そのために、自分で「根拠のある神風」を吹かせることで、偶然を起こすことができる。ビジョンは実現へと向かうために、いくつものチャレンジが必要である。例えば語学だと、国際的に通用する高度な語学力というチャレンジは、海外留学、あるいは語学力を必要とする授業やアルバイト、セミナーへの参加や語学資格取得などが考えられる。

以上のことから、チャレンジを成功させるためには、現在の自分ができない原因を考え、それを裏返すと目的にすることが鍵となる。そこで今後何をしなくてはならないのか(=どんなチャンスがあるのか)を考えることができる。チャンスは自分の周辺にたくさんあるが、チャレンジとは先の新たな領域に踏み出すことにあり、リスクを突破することで成長し夢やビジョンの実現につながる。

プロポーザル(企画提案書)では、実現可能性を前提に「チャレンジ」を、方法には時系列に「チャンス」カードを埋め込んだ。また要員計画には大学教員の他、本セミナーで出会った講師、留学の相談員などが考えられ、「チャンス」で取り上げた項目について予算を立てることができる。

最後に、立山氏はうつの提案をした。基本から応用へ向かうこと、初心に戻って疑問を持ち続けて未来を拓くこと、常に貪欲で自由な発想を持つこと、「明日死ぬと言われても、昨日やったことと同じことを今日もやり続けたい」と思える人生を見つけることができるかを自問し続けることである。

学生の考察：抽象的だった単なる夢を、より具体的に、より現実的に、考えられるようになった。今まで、理想であって自分には無理だと思っていたことも、人生における大きなビジョンとしてロジカルに筋道をたてることで、説得力が生まれ、自分にとっても、周りにとっても、納得できるものとなる。私には、論理的に考える力が足りなかったし、きちんと考える機会もなかったので、今回の講義では大きな収穫であると思う。(4年生)



全体講義 海外安全管理

安全管理とリスクマネジメント

【講師氏名】 飯村 学 (いいむら まなぶ)

国際協力機構 (JICA) アフリカ部中西部アフリカ第二課長

【講義概要】

途上国は危ない?…安全をコントロール可能なものにすれば、過剰に恐れる必要はありません。

講義では、アフリカの実例をもとに、治安悪化の政治的・経済的背景、情報分析に基づく安全管理について考えていきます。

1. 途上国に潜む危険とは?
2. 「コンテキスト」をつかもう。
3. リスク分析の実際



【略 歴】

国際協力機構 (JICA) アフリカ部アフリカ第四課長 (中西部アフリカの仏語圏諸国を担当)。前 JICA コンゴ民駐在員事務所長、JICA セネガル事務所。主な専門分野は仏語圏アフリカ (ガバナンス、セキュリティ)、平和構築国支援など。防衛大学校卒 (国際関係論専攻)、元自衛官 (パトリオットミサイル部隊勤務)。

【講義概要】

本セミナーでは情報に焦点を当て、途上国に潜む危険とはどのようなものか具体的に提示し、想定されるリスクを分析した。

参加者がグループになって一番リスクがありそうな国を選び、さまざまなリスクを抽出した。強盗、盗難、人質、誘拐、暴力、車強盗、投石・発砲、爆弾テロ、地雷などさまざまあるが、今回は特に情報と密接に関係がある国際紛争、政治変動、国内騒乱、犯罪等に関するデモ、暴動、爆弾テロ、人質、ハイジャックなどに焦点を当てた。

現地で潜む危険を事前に自分から探ることが重要であり、その情報収集力や分析力が鍵となる。外務省のHP、JICA、在日本当該国人、相手国政府HP、大使館、ニュース、現地新聞、NGO職員、ジャーナリスト、フェイスブック、知人の伝手、旅行会社、旅行のガイドブックなどさまざまな情報源があるが、日本のソースだけではなく、当該国のニュース、国際機関、国連などのソ



スも合わせて収集・分析する必要がある。また、日本人と諸外国・当該国におけるリスクの認知、すなわち安全感覚には相違があることも念頭に置かなければならない。

どのような危険があり、より高いリスクは何なのか。遭遇する確率や起きた場合のインパクトをマッピングし分析することで、遭遇する確率をより低くしたり、起きてしまった時の回避行動を検討するなど、リスクを減らすことができる。また、情報ソースは鮮度、確度、複数ソースの3点が重要である。情報には、事実クロノロジーを含む一次情報と、推測・観測や加工された情報である二次情報がある。二次情報で注意しなければならない点は、情報源の主観が入ることである。情報は大変断片的で、見えないところで多くの情報や事実が存在する。

グループによるケーススタディでは、シナリオを読みながら要らない情報を削除した。重要と思われる情報を確認し、改善または悪化している治安トレンドを考察し、想定されるリスクから改善策を考える作業を行った。治安のトレンドは改善・悪化しているのか、その根拠について議論した。情報はさまざまであり、情報には間違いはないが正しいものもない。リスクは時間の経過とともに流動的であり、常に分析をすることが求められる。



リスクの回避方法に関して、国に関する基礎的な情報・知識を抑えた上で、情報と憶測を区別する。現地の新聞やラジオは特定の政治団体、政府によって支配されている場合も多いので、他の団体との情報交換をし、現在起きていることは何で、事実クロノロジーの存在を踏まえた上で、おそらくこうなるだろうという現状分析が安全管理の上級編として重要である。

最後に、現地での危険の予見と察知では情報分析が重要課題であり、そのためにリスクのスコーピング、マッピング(地図読み)、クロノロジーと憶測・推測の区別などを行い、そして情報から現状分析をすることで即時の対応力や機転力が養えることなどを確認した。

学生の考察：情報ソースを活用するための方法をいくつか知っておく必要があると思った。いろいろな情報を鵜呑みにするのではなく、事実であるのか推測や憶測が含まれたものであるのかを意識して判断したい。(1年生)

3. 講義及び講師、分科会

	講義内容・分科会	講 師	ファシリテーター
A	援助と人権保障	米川 正子	秋元明日香 捧 純也
B	ミレニアム開発目標とジェンダー	大崎 麻子	川島 正恵 望月 悠平 佐藤 康平
C	平和学・紛争転換・非暴力介入	奥本 京子	福島 敬広
D	文化と開発援助	豊田 雅朝	佐川 想 笹本 芽郁
E	外国人観光客増加に向けた戦略策定	中島 洋行	中嶋 陽平
F	H I V／エイズと社会的キャンペーン	吉田 智子	江連 祐希 劉 禹君
G	アート活動を通じた森林保全	水谷 伸吉	赤坂 優実
H	相手目線の国際協力へ向けて	白川 千尋	秋田 裕介 関 龍 白木 隆司 青木 未来

講義（A）援助と人権保障

【講師氏名】米川 正子（よねかわ まさこ）

宇都宮大学 国際学部 特任准教授

【講義内容】

自身のキャリアと関心分野

- ・イギリスでの留学→イスラエルでのキブツのボランティア→現場への関心高まる
- ・なぜ難民の支援・保護活動に従事したのか？
- ・現場での無力感～なぜアフリカ・コンゴにこだわってきたのか？
- ・現在やっている活動：コンゴ紛争やアフリカの人権問題に関するアドボカシー



分科会の課題と問い

- ・援助の歴史
- ・ODA大綱
- ・援助の目的
- ・「国益」とは？
- ・アフリカへの援助
- ・援助のパワー・ポリテイクス
- ・援助と独裁者
- ・人道支援 vs. 人権保障？
- ・民主化 vs. 開発？
- ・人権外交

【略 歴】

南アフリカ・ケープタウン大学院で修士号取得（国際関係）。国連ボランティアでカンボジア、リベリア、南アフリカ、ソマリア、タンザニアとルワンダで選挙監視や人道支援活動に従事。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）職員として、ルワンダ、ケニア、コンゴ民主共和国、コンゴ共和国、ジュネーブ本部、スーダン、チャド、インドネシアで勤務。国際協力機構（JICA）での客員専門員（アフリカの平和構築）を経て、2009年11月より、宇都宮大学国際学部特任准教授。

主著は「世界最悪の紛争『コンゴ』～平和以外に何でもある国」、「アフリカから考える」など。2011年は「平和と法の正義（justice）」に関する研究や啓蒙活動をする予定。

【講義の考察】

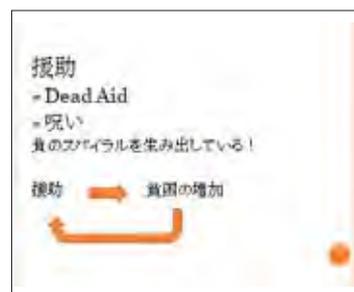
現地のニーズ調査は、支援において重要である。それを行わなければ、支援を受ける側の現状を悪化させてしまい、更に援助側の無駄遣いにもつながる。そのような、援助の失敗を生まないためにも、現地の人々に対し誠実さを持ち、ソフトな面の支援が必要である。（宇都宮大学 国際学部 1年生 寺尾 祥子）

【全体発表概要】

1. 援助について

本分科会では、様々ある援助の中でも、巨額で使い方に問題があるODAが中心に取り上げられた。

一般的に援助は美化されやすいが、①権力国のビジネス化、②依存の促進、③貧困の増加と、そして④軍事化の促進という問題を生み出す場合がよくある。負のスパイラルから、援助は「呪い」、あるいは「Dead Aid」、「Blood Aid」と呼ばれることもできる。



2. 人権保障について

人権は、個人の尊厳であり、個人を幸せにし、生存以上の価値である。と同時に、弱者を助けるためのツールでもある。

援助になぜ人権の要因が必要なのか。インドネシアの事例を挙げると、スハルト政権時代、日本はインドネシアの資源を目的とした援助を行っていた。そのインドネシアは石油を目当てに東ティモールに不法に併合し、東ティモールの市民に「虐殺」行為を犯した。つまり日本の援助は現地の開発や平和のために使われたのではなく、「虐殺」を促進したのである。

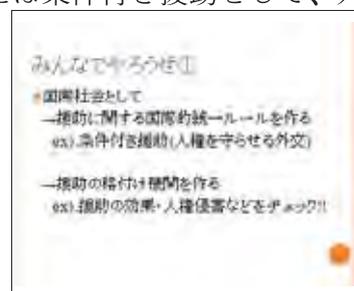
人権に配慮した援助が必要であり、その理由に、ニーズ・主体性・自立の3つが挙げられる。まず、ニーズとは、現地の人々が本当に必要としているものは何かを考えるということである。次に、主体性とは、現地の人を信頼し、尊重し、判断や実行を任せるということである。最後に、自立は外部に経済的・精神的に援助に依存しないことである。もし援助に依存すれば、将来の目標や夢を考えることが難しくなり、人間らしく生きていけなくなる。

3. 日本の援助のあり方について

今までの日本の援助は、インフラ整備などの経済援助が主要であった。それは、被援助国の経済発展が将来日本の利益に繋がるという考えと、経済発展が被援助国にとって最優先に必要なものという考えによっている。しかし、インドネシアにおける深刻な人権侵害が将来二度と起こらないよう、援助に人権の視点を組み込むことが必要である。

4. 国際社会への提言

1つ目に、援助に関して国際的統一ルールを作る。例えば条件付き援助をして、人権を守らせる外交を行う。人権侵害を行っている国に対して一ヶ国のみが援助を行わないのであれば効果はなく、そのために国際社会が団結力を持って同じ方向性に向かって援助をすることが重要である。2つ目に、援助の格付け機関を作ること。援助が本当に役立っているか、人権侵害がされていないかなどを確認することが重要である。



分科会参加者の考察：まず、「援助される側」の気持ちになることのむずかしさ、大切さを実感した。日本にいる日本人としては、援助する側を無意識にとらえており、それは危険であると気付いた。また、援助という言葉から、良いもの、プラスなものというイメージも以前から構築され続けてきたように思う。であるから、実際の援助の実態を知った時、絶望と衝撃が大きかった。そこから生まれた怒りから、この現実を変える方法の一つとしての人権に大きな可能性と希望を見出した。(宇都宮大学国際学部2年生 秋元明日香)

講義（B）ミレニアム開発目標とジェンダー

【講師氏名】大崎 麻子（おおさき あさこ）

開発政策・ジェンダー専門家

【講義概要】

自身のキャリアについて

1. 大学時代：ジャーナリストを目指し、新聞社でのアルバイトに明け暮れる毎日、そして留学
2. 大学院時代：大いなる誤算「ザ・出産」：「国際メディア」専攻から「人権・人道問題」専攻への変更
3. UNDPでの7年半：開発政策における実務と「ジェンダー」視点を叩きこまれる毎日。MDGsの草創期に立ち会う。
4. 帰国後：専門性を活用して、様々なクライアントとの仕事を楽みながら行う日々（外務省、内閣府、JICA、「ほっとけない世界のまずしさ」、G8サミットNGOフォーラム、Take Action Foundation、大学等々）
5. まとめ：ワークライフバランス ～長期スパンで自分を育てよう～



分科会の内容について

◆「ジェンダー」って何!?

「男性」「女性」という言葉を聞いて連想する言葉は？ドラマや歌詞やCMで、男性と女性の関係や役割はどんなふうに表示されている？「ジェンダー」という概念を、私たちの生まれ育った環境や日々の生活に引き寄せて考えます。

◆「ジェンダー」視点でMDGsを見てみよう

MDGsのバックボーンである「人間開発」という概念について学び、「開発におけるジェンダー視点とは何か」を考えます。それらを踏まえ、MDGsの各ゴールの最新の進捗状況を「ジェンダー」視点から検証してみましょう。

◆2015年に向けた政策提言の策定

特定のジェンダー課題を選び、主要開発アクター（途上国政府、ドナー国政府、国際機関、NGO、民間企業など）の比較優位を踏まえた上で、それぞれが担うべき役割・取組みについて提言案を作成しましょう。

～講義と参加型ワークショップを通して学んでいきます～

「ジェンダー視点」は、人間中心の開発に欠かせない視点です。同時に、私たちを取り巻く社会環境やキャリア／ライフプランニングにも様々な示唆を与えてくれます。物事を包括的な視点から捉えるリテラシー能力を高めていきましょう！

【略 歴】

コロンビア大学国際関係・公共政策大学院で国際関係委修士号（人権・人道問題専攻）を取得。1997年に国連開発計画（UNDP）ニューヨーク本部に入局。開発政策局にて、UNDP／日本WID基金の運営を担当し、世界各地でジェンダー平等と女性のエンパワーメントを推進するプロジェクトを実施。2004年にUNDPを退職し、帰国。フリーの専門家として、国際機関、政府機関、NGOなどで、政策立案／提言、研修、開発教育等を行っている。Take Action Foundation 評議、International Women's Club Japan（IWCJ）理事、関西学院大学総合政策部客員教授、港区男女平等参画推進委員。

【全体発表概要】

ミレニアム開発目標は、2000年9月に開催された、国連ミレニアムサミットで189カ国の国家元首がミレニアム宣言に署名をしたことで成立した。これは、今までの知見の総集と言えるものであり、途上国と先進諸国が共に決めた目標達成のために手を組んだ画期的な取り組みである。その中でも、ジェンダーの視点は大変重要である。

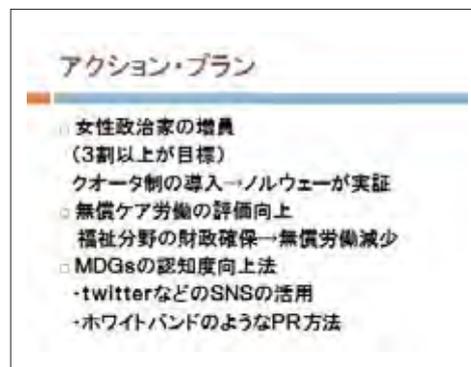
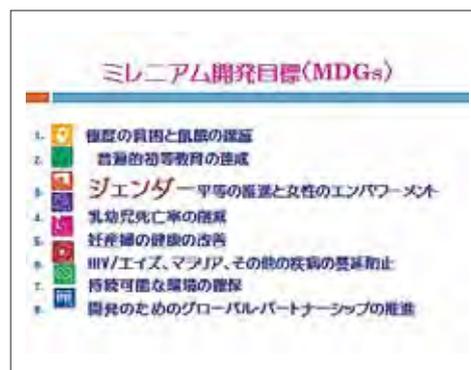
ジェンダーとは、社会的に規定された性差の事である。これと相反するものとしては、セックスがある。セックスは、生物学的な性差の事を指し、染色体XYのXX、に基づく性差の事である。

発展途上国の開発においてもジェンダーの視点は重視されるべきものである。なぜならば、ジェンダーの視点を入れてはじめて、平等に機会が与えられ、男女がともに最終的に同じ良い結果を得ることができるからである。一例として、学校建設において女子児童が性暴力に遭わないように死角を作らないことや、ロールモデルとしての女性教員の登用をすること、通学路の安全を確保し、女子児童が暴力に遭わないようにすること、トイレを男女別にし、月経がきた高学年女子に対して配慮するというジェンダー視点を取り入れた教育開発支援をすることにより、親が、安心して娘を学校に行かせることができ、女子の就学率が大幅に伸びる。つまり、男女の異なるニーズに対応することが、開発支援において大変に重要な点である。

また、アフリカの女性たちがしている家事は、薪集め、水汲み、育児、介護など多岐にわたり、水汲みなどは、数キロも離れた場所に汲みに行かなくてはならず、1日のうちに16時間余りを家族のための労働に費やしている。これに対して社会的な評価は低く、やって当たり前であるという風潮が根付いている。女性たちは、無償ケア労働に1日の時間のほとんどをとられてしまうために、読み書きを習得したり、政治参画をすることができず、女性の社会進出の厳しさに拍車をかけている。故に「女性・男性はXXして当たり前」、あるいは「こうするべきだ」というジェンダーロールを乗り越えて男女がパートナーシップを結ぶことが必要である。

提言は、無償ケア労働の社会的貢献度が高いという事実を皆が認識すること。無償ケア労働で自らの自由な時間が奪われている母親の手伝いを積極的にやること。政府がクォーター制を導入し、企業においてある一定人数の女性を幹部職に採用すること。そしてmixiやtwitterで現状を周りの友人に知ってもらうこと、などが挙げられた。

分科会参加者の考察：女性が自分の体を売ることでお金を得ることは、先生のお話では、幼い時に受けた性的虐待の傷がいやされないまま、大人になり、自尊感情が無くなり、エンパワーされないためだ。とおっしゃっていたが、日本で体を売る女性たちに関してはどうなのだろうかと疑問に感じた。発展途上国と先進国では環境や社会規範が異なるので、女性が自分の体を男性に売って生計を立てている理由も異なるはずだと考える。(宇都宮大学 国際学部 1年生 川島 正恵)



講義（C）平和学・紛争転換・非暴力介入

【講師氏名】 奥本 京子（おくもと きょうこ）

大阪女学院大学 国際・英語学部 准教授

【講義概要】

自身のキャリアについて

平和学・紛争転換・非暴力介入の分野において、大学で教育・トレーニングに携わる一方で、NGO活動、研究、地域でのトレーニング・普及等を行っている。

特に芸術アプローチに関心があり、紛争・平和ワークにおける芸術の役割を探求している。

東北アジアの隠れた紛争（また、顕現した紛争）のあり方を分析し、平和をどのように創り出すかを、当地域の数々のNGOと共に市民社会・NGOのレベルから実践している。



分科会の内容について

紛争を解決するのに軍事介入する「暴力的解決法」があるが、それでは、プロセスも結果も持続的な平和とはいえず、大勢の犠牲が生まれてしまう。平和的手段による紛争転換の手法を用い、身近なところから国際レベルの紛争までさまざまな紛争に非暴力的に「介入」することで解決・転換すること目指そう。構造・文化の変革の意味を具体的に検証し、共感、非暴力、創造性を活用することを、身につけよう。この方法は、国際レベルに活用されているが、われわれの日常の出来事（もめごとなど）の対処法としても有効である。ぜひ、日常の様々な問題を解決する術を、身につけて活用しよう。

【略 歴】

英国国立ランカスター大学にて、平和学修士号取得。

神戸女学院大学院博士後期課程修了。

紛争転換、非暴力介入、文学と演劇の活動と研究を通して平和ワークに励む。

主著に『平和学を学ぶ人のために』（共著、2009）、『ガルトゥング平和学入門』（共著・翻訳、2003）ほか。

日本平和学会（理事、企画委員会委員、平和と芸術分科会責任者、分科会副世話人）

トランセンド研究会（会長）

国際トランセンド（東北アジア地域コンビーナー）

非暴力平和隊・日本（理事）、アクション・アジア（リーダー）

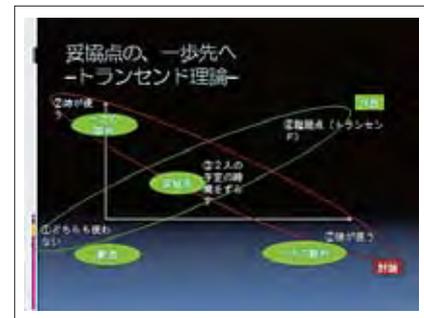
【全体発表概要】

1. 平和学とは、平和の価値に近づくための研究と実践をしていく学問であり、暴力を予防し、平和を創造し、紛争を非暴力的に扱う能力を開発する。一般的に「紛争」は大きなレベルのものイメージをしがちだが、紛争には個人間の対立も含まれる。紛争とは人間関係における自然な現象であり、好転のための機会でもある。



2. 紛争が起こった場合に暴力的手段を用いてその紛争を「解決」という考え方は、戦争や流血などを伴ったものとなってしまう、真の平和を創造することには言えない。しかし、平和的（非暴力的）手段を経てお互いに理解し、協力、和解を経ることで紛争解決ではなく「紛争転換」することが可能である。紛争解決とは今起きている紛争の表層部分を特に重視し、紛争転換とは時代や社会の流れに沿って時間をかけて紛争を和解に向けて転換していくという考え方であり、肯定的・積極的に紛争に向き合う方法を提唱する。

3. ある対立が生じた場合に、妥協点を調整するのではなく、対立や矛盾から超越してお互いに満足するために、対話というプロセスを経て創造的な解決法を探し出す方法を模索するトランセンド理論がある。また、ある紛争が起こったときに初めは当事者だけの問題だと思っていたものが、対話をするうちに別の紛争に発展する恐れもある。それに対して複眼的に物事を見つめて個人で紛争転換に当たるのではなく、様々な学問の専門家と協力することが重要である。しかし、紛争を転換していくためには問題を肯定的に捉え、転換するための創造性が重要だ。



4. 紛争転換には様々な方法が採られているが、奥本先生は芸術的アプローチから紛争転換を目指している。暴力を助長するような芸術（例：戦時中の日本の街で見られた反米の標語などを含有するプロパガンダ絵画など）を批判し、平和を創造する芸術（ジョン・レノンの「イマジン」のような平和を訴える詩など）を用いることで平和ワークが成立するだろう。また、この平和を創造する芸術には、紛争転換に繋がっていく紛争を顕現する芸術が特に重要であるという。しかし、平和的を創る芸術によって、「平和」を無理に押し付けてはならない。

5. 分科会のアクションプランとしては、分科会で学んだトランセンド理論を日常における個人間の対立に応用していく。また、紛争という考え方を正しく理解してもらうためにも、学生たちにワークショップを企画・提供したい。ミクシーなどの情報媒体を用いて世代の違う人たちにも平和学・紛争転換について知ってもらい、理解を深めていきたい。

分科会参加者の考察：平和学の持つ曖昧さは時にデメリットとも捉えられるが、対象の危険性と不安定さを考えれば、明確にし過ぎるとむしろ好ましい結果を生まない場合も生じるために、曖昧にならざるを得ない面も大きいのではないかと感じた。（宇都宮大学 国際学部 3年生 青木 健資）

講義（D）文化と開発援助

【講師氏名】 豊田 雅朝 （とよだ まさとも）

開発コンサルタント

【講義概要】

自身のキャリアについて

1. 大学卒業後のキャリア：（青年海外協力隊、イギリス・フィリピンの大学院、国際協力銀行、北海道大学、現況）
2. キャリア形成に関して（セレンディピティ、ネットワーク、イマジネーション、コミュニケーション能力）
3. アジアの中の日本の現状（開発援助の推移、市場・パートナーとしての新興国・途上国の役割）
4. これからの時代に必要なスキルとは、キャリア形成に関して学生時代になにをすべきか



分科会の内容について

開発援助や国際ビジネスの分野で、文化とはどのように捉えられ、どのような役割・関わりを持つのでしょうか。対象地域に根付く文化は大きな影響を持っており、事業を実施するにあたり、相手の物事の背景、歴史、伝統などのテーマを理解すること、そして自身の文化の特徴を認識することが不可欠となってきます。

当分科会では、文化にかかる視点が開発現場の事業や教育・人材育成に繋がった事例などを取り上げ、特に、現在の開発援助や途上国におけるビジネスの中で文化がどのように捉えられているのか、活動をどのように効果的に取り入れることが出来るのかを考えていきます。さらに議論を通して、文化とは何か、ひいては日本の文化とその活かし方、日本の今後の開発援助や国際ビジネスのあり方、参加者自身のアクションを考えていきます。

参加型ディスカッション方式

議題案（議題自体も議論の中で変わる可能性あり）：

- ・文化とは何か。文化をどう定義するか
- ・開発援助・国際ビジネスにおいて文化とはどんな意味を持つのか
- ・日本人の文化とは何か。グローバリゼーションの中での強みと弱みとは
- ・各国の文化と日本の文化の対比
- ・日本の文化をどう生かしていくか
- ・自身のキャリア形成とどう結びつけるか

【略 歴】

1995年に立命館大学産業社会学部を卒業後、青年海外協力隊に参加（任地：フィリピン、職種：音楽）。その後、ニューキャッスル大学（英国）・アジア経営大学大学院（フィリピン）で開発分野の修士号を取得。アジア経済研究所開発スクールにて開発経済学ディプロマ取得。国際協力銀行（ベトナム・スリランカなどの円借款事業案件形成担当）、北海道大学（大学の国際化プロジェクト担当）の勤務の後、一年あまりの世界放浪を経て、現在、開発援助・ビジネスコンサルタント

【講義の考察】

日本人は集団主義的であり、恥の文化を大切にする。それを示す明確な基準はないが、そのような民族性は国際活動において、重要な役割を果たし、暗黙の了解の中で役割分担がなされているのではないだろうかと感じた。（宇都宮大学 国際学部 1年生 木田 綾香）

【全体発表概要】

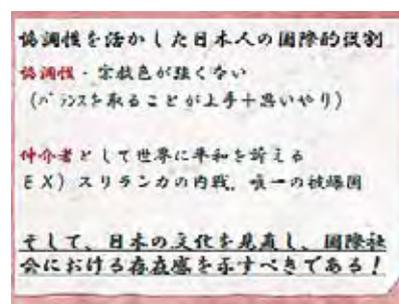
文化の捉え方は人によって様々であるが、私たちの考えた文化の特徴としては、「時・土地など様々な要因によって変化するもの」「単体で総体でもあるもの」となった。特に日本の文化に焦点を絞ると「内と外」「謙虚さ」「協調性」が特徴として挙げられた。

さらに「文化」の概念を実際の現場への生かし方を掘り下げた。特に第3者として開発援助をする場合、「日本人として開発に携わる」ことが重要だと考えられる。他者の理解は、自分と相手の文化の折り合いをつけることによって成されており、したがって日本の文化を考えることは大切であるという結論に達した。



【学んだこと】

1. 「文化」は多種多様である
2. 日本の文化の特徴は主に「内と外」「謙虚さ」「協調性」である
3. 日本人として国際社会に関わっていくことが重要である



【根拠】

1. 文化は時代や土地、結び方によって様々に変化する。
ある時代の文化を維持しようとする、習慣から伝統へ変化し流行へもなりうる。また一人一人文化を持っており、それを町、地域、国とつなげることによって、違った視点から文化を見ることができる。
2. 目に見える「内と外」の例として、玄関から家の中に入る時に、靴を脱ぐことが挙げられる。これは外の物を内に持ち込まない風にも捉えることができる。目に見えない例として、恥について敏感である。「謙虚さ」については気配りがきき、真面目であり、また上下関係を意識する。「協調性」については、「出る杭は打たれる」や、団体行動が上手であることから理解できる。
3. 開発援助に携わる際に、「郷に入っては郷に従え」のように現地の文化を学び、受け入れるだけでなく、第3者としての立場、また日本人の特徴的な文化面を生かすことも重要である。例えば、日本人の協調性の高さや宗教色が薄いことを生かし、仲介者として世界の平和を手助けすることなどが挙げられる。

【アクションプラン】

日本の質の高いサービスを新しい技術・商品として利用し、海外のホテルなどのサービス業界に携わる。身近では海外インターンに行く場合、その事前に関発セミナーを行うことである。加えて、日本の文化を生かした新たなビジネスプランを生むために、学生ワールドカフェを開催することなどが挙げられた。

分科会参加者の考察：文化を理解した上でコミュニケーションを大事にしなければ、支援はほとんど成立しないのだ。日本のように近代化に近づけることが本当の開発であり、相手にとってよいことであるとは言い切れないのだ。また、協力者の自身の背景・価値観・人生観に興味を持つことが開発援助に不可欠なものである。(宇都宮大学 国際学部 1年生 若林 由美)

講義（E）外国人観光客増加に向けた戦略策定

【講師氏名】中島 洋行（なかじま ひろゆき）

作新学院大学 経営学部 准教授

【講義概要】

1. 分科会の目的

- (1) 管理会計の分野で近年注目されているバランス・スコアカードについて理解を深めて、戦略策定および問題解決のツールとして実践の場で活用できるようにする。
- (2) 分科会参加者の多くが在住もしくは通学している栃木県について、「観光」という視点から分析することによって、栃木県に対する理解および関心をさらに深める。
- (3) 日本に在住している者の立場から、外国人観光客のニーズについて考察することによって、今後、外国人に日本を案内する機会に遭遇した際には、良き「ガイド」となれることを目指す。



2. 分科会の内容

- (3)の「講義」以外は分科会参加者のディスカッション中心に行います。
- (1) **用語の定義：「観光」とは何か、「観光客」とはどのような人を指すのか**
この分科会で使用する「観光」および「観光客」の定義について考えます
 - (2) **現状分析①：栃木県にはなぜ外国人観光客があまり訪れないのか？**
外国人観光客が少ない原因について自由に意見を出し合います
 - (3) **講義：SWOT分析とバランス・スコアカード**
この分科会で使用する二つのツールについて担当講師が講義します
 - (4) **現状分析②：栃木県の観光資源に対するSWOT分析**
栃木県の観光資源について、強み（Strong）、弱み（Weak）、機会（Opportunity）、脅威（Threat）をそれぞれ分析します
 - (5) **考察①：重要成功要因の識別**
現状分析をふまえて、外国人観光客を増やすという戦略に対して何が重要成功要因であるかを考察します
 - (6) **考察②：因果連鎖モデルの構築**
(5)で識別した複数の重要成功要因間に介在する因果連鎖について考察します
 - (7) **考察③：戦略マップの作成**
(5)と(6)で議論した内容をふまえて戦略マップを作成し、具体的な戦略をまとめます
 - (8) **中間・最終発表の準備**

3. メッセージ

この分科会では経営学や観光に関するテーマを扱いますが、これらの分野に関する予備知識は不要です。分科会参加者の熱い議論と、既存の学問領域にとらわれない自由な発想から、斬新な戦略が産み出されることを期待しています。

【略歴】

作新学院大学経営学部准教授として会計ファイナンスコースに所属し、管理会計論、原価計算論など会計学関連の授業を主に担当。学内外の教員で組織する観光まちづくり研究会に所属し、会計学分野以外でも幅広く活動。留学生委員として留学生の教育および支援に従事。

【講義の考察】

経営学的手法を用いて外国人観光客問題を分析すると何が見えてくるのか、またどのような戦略を立てる事が可能なのか強く関心を抱いた。特にSWOT分析のように多角的な分析ツールを用いた結果立体的に問題の構造や本質を明らかに出来ると想定されるので、その結果にも興味がある。（宇都宮大学 国際学部 2年生 小向 郁衣）

【全体発表概要】

日本を訪れる外国人観光客のうち、栃木県を訪れる人々は3.6%のみで、その数を増やす戦略を練った。まず初めに観光と観光客の定義づけをし、前者を「食べる、見る、楽しむ、学ぶ、気分転換などの目的をもって、有名な場所に行き、主体的に非日常的な体験をすること」とし、後者を「観光を通して地域の利益に貢献する人」とした。それに基づいて、バランススコアカードという目標達成のテンプレートを用いて戦略を作った。栃木県への外国人観光客増加という目標に向かって、SWOT（Strong, Weak, Opportunity, Threat：強み、弱み、機会、脅威）で現状の分析を行う。すると日光東照宮などの強みや栃木県の位置や知名度の弱み、交通網整備のチャンスや不況の脅威などが挙げられた。それをもとに、PRの強化、受入れ体制の整備、魅力的なツアーの3つの重要成功要因を抽出した。それらやるべき順番に並べ、具体的なアイデアに落とし、戦略マップとして図化し、各アイデアの関連を矢印でつないで表した。その結果、外国人のニーズを把握し、在日外国人や留学生をガイドとして栃木巡りツアーを組み、無料で外国人観光客にモニターになってもらう。そして、口コミで栃木県を旅行する楽しさを広める流れを中心にした戦略をつくりあげた。

分科会で学んだこと

1. 定義づけ

当たり前だと思っている言葉でも、その意味について話し合うと異論がでる。一般的に使用されている言葉をお互いに違った意味でとらえていては話がまとまらない。議論の中で、常にお互いの理解を確認することの重要性を学んだ。

2. SWOT分析

SWOTとは4つの視点で物事を分析する方法である。強みと弱みは自分でコントロール可能で、機会と脅威は外部の要因である。この方法は自己分析など使用範囲が広い。視点を定めることによってアイデアも出やすくなり、結果もまとめやすくなった。

3. バランススコアカード

目標を定め、現状分析をした後に重要成功要因を抽出し、やるべき順序に並べて戦略を作る方法である。本来は経営学の手法で、重要成功要因とその順序まで決まっている。このように型にはめることによって、効率よく戦略を作ることができた。

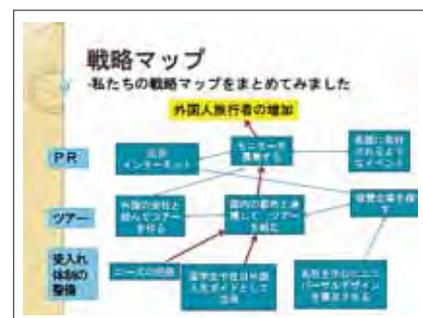


根拠

観光というと、具体的なツアーを作るなどの方向で考えること当初頭にあった。今回各種の方法を用いて、観光客増加に向けた軸ができることによって、それを中心としたまとまりのある計画が立てられるようになり、検証もしやすい。そのような土台作りが目標達成には重要である。

アクションプラン

今回学んだバランススコアカードやSWOT分析を用いて、学生同士で旅行に行く計画を立てる。また、旅行だけでなく、自己分析や勉強計画などいろいろなことに応用してみる。



分科会参加者の考察：重点を戦略策定にしたことは正解であったと思う。ここでの戦略策定は日常から仕事、将来へ活用することのできるものである。全体講義で行ったビジョンについてのもので似ているが、ここでの手法はより現実味を帯びていたと思う。(宇都宮大学国際学部 2年生 山内 真心)

講義（F）H I Vエイズと社会的キャンペーン

【講師氏名】吉田 智子（よしだ ともこ）

サンスター株式会社 広報室

【講義概要】

自身のキャリアについて

1. 大学時代：国際関係学科でテーマに悩んでいるときに会った、あるミュージカル
2. 大学院時代：2つの運動との出会い、カンボジアでのインターンの経験
3. 帰国後：サンスターでのH I V／エイズキャンペーン
4. まとめ：就職したときの想いと、今だから思う企業という場の活かし方



分科会の内容について

原文→「H I V／エイズは、貧困を抱える途上国や開発の問題だと思われがちですが、日本にもH I Vとともに生きる人びとが2万人あまりいます。そのことと向き合うことなしに、世界のH I V／エイズについて考えることはできません。自分たちの文化や社会、グローバルな政治や経済と向き合いながら、H I V／エイズという課題を自分自身が身近に捉え、さらに社会を巻き込んでいくために、どのような方法が可能かを一緒に考えていきましょう。」

- H I V／エイズのもつイメージと現実の状況を比べてみよう
- 自分たちへのテスト：どこで、誰からその情報を手に入れてきた？
- 実態調査にチャレンジ！
- キャンペーンを作ってみよう

【略 歴】

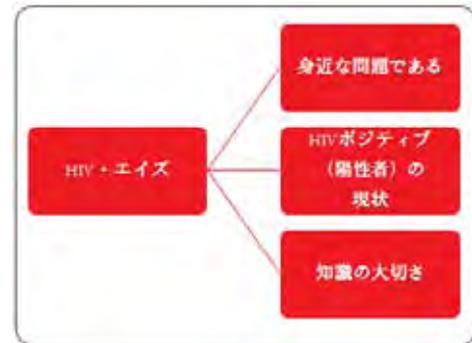
ニューヨーク大学院で修士号（公衆衛生・国際保健教育専攻）を取得。国際移民機関（IOM）カンボジア事務所でのインターンシップを経験。日本初のエイズ・ユースフォーラム（2003）の立ち上げなど、若者向けエイズ啓発キャンペーンに関わりつつ、H I V／エイズに関する社会貢献および社内教育活動を提案。

【全体発表概要】

学んだことと根拠

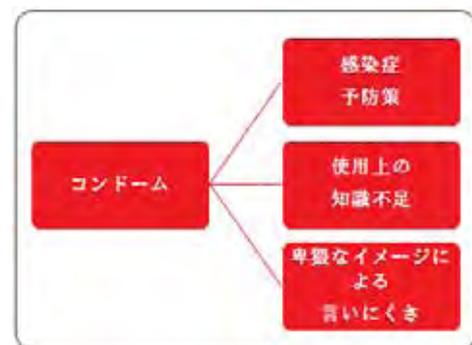
① HIV・エイズの知識：

薬のアクセスがあれば、現在ほとんどのHIV陽性者は毎月一回の通院と毎日同じ時間に薬を飲みながら、普通に日常生活を送ることができる。また、HIVの伝染プロセスとして、血液、粘膜、母性感染三つに大きく分けられ、HIVウィルスは水、空気、熱に弱いため、普通の接触は感染しない。HIV・エイズに関する知識不足が偏見や差別に繋がるので、HIV・エイズに関する知識が必要だと考えられる。



② コンドーム：

若者の間では、コンドームの使い方やその目的が誤解されている。コンドームは妊娠だけではなく、感染症も予防するという重要な役割を果たしている。HIV・エイズ感染者の社会的差別をなくすために、社会的キャンペーンを活用する必要がある。

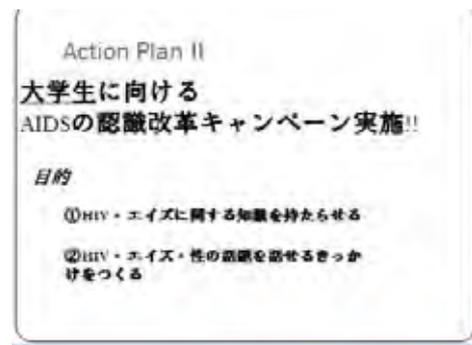


③ キャンペーンのとらえ方：

メッセージのとらえ方によって、キャンペーンのメッセージが逆効果になる場合もある。キャンペーン作りを実際に体験し、大学生を対象とするHIVエイズの年間キャンペーンを作成した。

提言

- ① HIV・エイズの正しい知識を身につけることが大切である。
- ② コンドームの使い方やセックスなどについてオープンに話せる環境を作ることが大事である。
- ③ 分科会Fのメンバーで『彼氏にコンドームを渡そう』というキャンペーンを企画している。このキャンペーンを通じて、大学生がセックスやコンドームなどオープンに話が出来ることによって、HIV・エイズに関する認識と知識を高めるきっかけを作る。



分科会参加者の考察：日本のエイズポジティブ者が1万人を超え、毎日4人に1人が感染している。それにもかかわらず、ある意識調査では90パーセント以上の人々は、周囲にポジティブ者がいないと答えた。このような結果から、社会的にHIVエイズが認知されていないこと、またポジティブ者が自身のことを言い出せない環境が形成されていることが判明した。HIVエイズの問題を医学的だけでなく、偏見や差別といった社会的の両側面から考えなければならぬ。(宇都宮大学 国際学部 1年生 寺尾 祥子)

講義（G）アート活動を通じた森林保全

【講師氏名】水谷 伸吉（みずたに しんきち）

一般社団法人 more trees 事務局長

【講義概要】

自身のキャリアについて

- ◆環境問題に関心を持ったきっかけ
- ◆ボルネオでの植林体験
- ◆メーカー勤務時代
- ◆一度目の転職：インドネシアでの植林団体
- ◆二度目の転職：more treesの立ち上げ



分科会の内容について

- 世界の森林、日本の森林の現状について知識を深める
- 保護と保全の違いとは？
- 森を歩こう（セミナー会場の周辺を一緒に散策してみます）
- 森林問題、環境問題への参加をより大衆に広げるためには？
～アート、音楽、ファッション、ビジネスを絡めたムーブメントを考える
- 森と街、先進国と途上国がつながる（つなぐ）には？
- 環境の仕事に就くには？

※2011年は、国連が定める「国際森林年」です。

グループディスカッションやブレインストーミング、フィールドワークを交えつつ、先進国として、都市住民としてならでの、森林保全の手段やあり方を模索していきます。

【略 歴】

1978年東京生まれ。

慶応義塾大学経済学部にて環境経済学を専攻後、2000年より㈱クボタに入社、環境プラント部門に従事。2003年よりインドネシアでの植林団体に移り、熱帯雨林の再生に取り組む。

2007年に音楽家・坂本龍一氏の呼びかけによる森林保全団体「more trees」の立ち上げに伴い、活動に参画し事務局長に就任。森づくりをベースとしたカーボンオフセットのほか、日本の間伐材利用促進や地域再生、エコツーリズムなども手掛ける。

【講義の考察】

森林減少の原因は途上国の人にあって先進国の人にはないというわけではないのである。森林を伐採してできた畑で作られるものの中には、先進国に輸出しているものもあるからだ。私たちは、こういった事実からも森林問題について真剣に考える必要があると言えるだろう。（宇都宮大学国際学部1年生 會田翔子）

【全体発表概要】

現在、世界の森林は危機にさらされている。森林伐採や火災などによって、1秒間にテニスコート20面分もの森林が失われている。植林活動によって緑を取り戻している地域もあるものの、その面積はまだ少なく減少率のほうが高い。その中で日本はノルウェーに次いで森林保有率世界第2位であり、世界有数の森林保有国であるが、林業に従事する人々が少なくなり、間伐がゆきとどかず木材の劣化を引き起こすなど人工林の質的な問題に直面している。最近では、森林保護と地球温暖化対策の一環としてカーボンオフセットが行われている。森林の量と質の劣化を食い止め、森林保全をするためには、アートや音楽などの文化や経済活動を通して、都市と森が「つながる」ことが必要不可欠である。

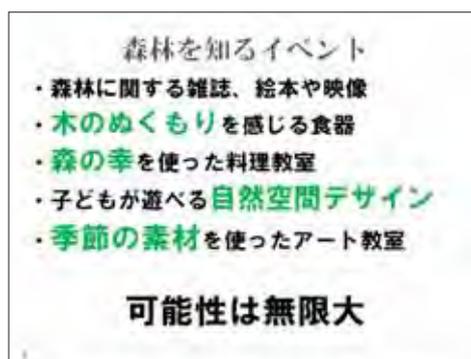
more trees の活動から学んだこと

- ① 都市と森とのつながり：more trees が活動する最大の目的が、都市と森とのつながりである。森からの豊かな恵みを得るためにmore treesがアートや音楽などを使ってサービスの提供をしている。都市に住む人々や企業がその対価を支払って、森づくりに役立つサイクルを構築し、都市と森との橋渡し役として more trees が活動している。
- ② 保護≠保全:保護と保全、似ているようだが、実は大きく違う。保護は自然などに人間の手を加えずそのままにしておくことであり、保全は人間の手を加えながら自然を守ることであり、日本の伝統的な里山などは、保全によって守られてきた。里山という日本独自の文化を守るためにも、人の手を入れて森を守る、保全が必要である。
- ③ 森林との共存と共生：森林にとって最もよい状態は、森林を破壊する人間や動物が減ることである。しかしそれは現実には不可能なことであるため、森林保全に“BEST”ではなく“BETTER”な形を取って、森林と共生する。



分科会での提言（学生の編み出したプラン）

- ① One goal One tree…小学生のサッカー大会で1ゴールにつき一本の苗木をプレゼントすることにより、植林する企画。森林保全とともに教育の側面からもつながりを持つとうという考えから生まれた。
- ② 森林のテーマパーク…森林の持つ癒し効果を利用して身体機能を回復させるようなテーマパークを作る構想。フィットチッド、色彩的効果、聴覚的効果などのセラピー効果を使って様々なアトラクションを考える。
- ③ 森カフェ…木材を使った食器や、地域で取れるものを料理した食事など森からの恵みを利用したカフェ。森林保全の啓発活動とともに、子供と母親のためのカフェという側面を兼ね備えるのが目的であり、カフェには森林を題材にした絵本や子供と母親のためのイベントなども企画される。



分科会参加者の考察：環境破壊が叫ばれている今日、自然との共存を目指さなければならなく、我々一人ひとりが意識して行動しなければならない。このように、人間に課せられている課題は多くあるが、私にできることからコツコツとやっていきたい（宇都宮大学 国際学部 2年生 小林 佑馬）

講義 (H) 相手目線の国際協力に向けて

【講師氏名】 白川 千尋 (しらかわ ちひろ)

国立民族学博物館 先端人類科学研究部 准教授

【講義概要】

自身のキャリアについて

小さい頃に海外で暮らした経験があったせいか海外に関心があり、大学(学部)では文化人類学を専攻。また、高校生の頃に青年海外協力隊に関する新聞記事を読み、参加したいと思うようになりましたが、大学卒業後すぐ(新卒)では参加できないと思い、修士課程に進学することに。学部で専攻していた文化人類学は協力隊の活動に役に立たないと考え(誤解し)、修士課程では環境科学に専攻を変更しました。

修士課程在学中に協力隊に参加。南太平洋のヴァヌアツでマラリア対策に携わりました。活動中に国際協力のなかでの文化人類学の必要性や重要性を痛感し、帰国して修士課程を修了後、博士課程に進学。再び文化人類学を専攻し、ヴァヌアツの人々の伝統医療に関する研究で博士号を取得しました。

博士課程修了後は大学で文化人類学を教えつつ、WHOの専門家としてサモアやフィジーでフィラリア対策に関わりました。

現在は国立民族学博物館という文化人類学の研究機関・博物館で研究と大学院教育などに携わりながら、JICAの専門家としてミャンマーでマラリア対策に関わっています。



分科会の内容について

◆イントロダクション：文化人類学の考え方

「人が変われば見方も変わる」、「自分の常識を疑う」。こうしたことと関係する「エミックとエティック」、「相対主義的視点」など、文化人類学の重要な概念について紹介します。これらは国際協力の現場でも必要となってくる概念です。

◆ケース・スタディ：「問題」の捉え方

国際協力の現場では、協力する側の期待に反するようなことがよく起きます。協力する側はそれを「問題」と捉えますが、果たしてそれだけで良いのか…。自分が医療協力をする側になったと仮定し、具体的な活動プランをつくってみるなかで、「問題」の捉え方について考えます。

【略 歴】

総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻(国立民族学博物館)修了、博士(文学)。1991年から93年まで青年海外協力隊員としてヴァヌアツでマラリア対策に従事。WHO短期専門家(サモア・フィジー、フィラリア対策)、JICA短期専門家(ミャンマー、マラリア対策)を経験。専門は文化人類学。

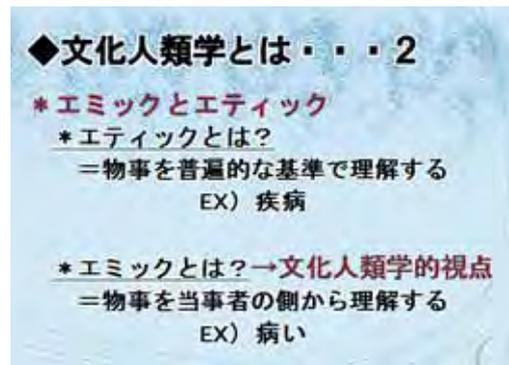
【講義の考察】

文化の違いによって、価値観の食い違いやニーズのギャップが生まれてしまうことは、開発援助において最も難しい問題である。理解しようと思っても、どうしても主観にとらわれてしまうのが人間であり、そのためには、裏付けを重ねていながら、理論的に相手を見つめるための客観的考え方が必要だと感じた。(宇都宮大学 国際学部 1年生 山崎 舞子)

【全体発表概要】

◆文化人類学とは？

- ・異文化理解・他者理解の学問
- ・イギリス、アメリカなどの開発援助の場には、必ず文化人類学と社会学の研究者がいる
- ・開発人類学（国際協力・開発援助にまつわる文化人類学のこと）
- ・開発援助に大切な要因はフィールドワーク、エミックな視点、相対主義的視点



◆フィールドワーク

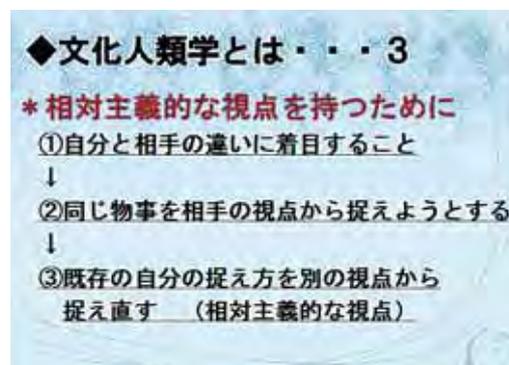
- ・旅行と違って、現場に1～2年長期的に単独滞在する
- ・現地語習得（公用語－英語とフランス語、地方語－島が違うだけで言葉が違う）
→人々と信頼関係を築く→人々の視点からその社会・文化を深く理解する
- ・インタビュー、参与観察（自分も関わりつつ観察する）

◆エティックとエミック（文化人類学では厳格に分ける）

- ・エティック＝物事を客観的・普遍的基準によって理解する(科学的基準)
例：疾病（disease）
- ・エミック＝物事をその担い手・当事者の側から理解する（主観的）例：病い（illness）

◆相対主義的視点（文化人類学の重要点）

- ① 自分と相手の違いに注目（共通点体と自分にとっての認識になってしまうため）
- ② 理解しようとしていることを相手の視点に立ってみる
- ③ 自分の視点の再構築



◆アクションプラン

- ・食べ物の好き嫌いを考える：相対主義的な考えを持つ練習になる
- ・親に毎日メールをする：大切な人の気持ち（親の自分を心配する気持ち）を考える
- ・怒る前に訳を聞く：何か理不尽なことがあった時も、相手のことを考える

分科会参加学生の考察：自分の思い込みではない相手の本当の価値観、考え方、ニーズを把握した上で支援をすることと、思い込みだけで支援をするのでは全く違う。常に自分の価値観や考え方を多角的に捉える必要があると感じた。（宇都宮大学 国際学部 1年生 庄司 萌）

4. 総括／レポート作成とキャリア開発

思考力と文章力を身につける

【講師氏名】 清水奈名子（しみず ななこ）

宇都宮大学 国際学部 講師

1. レポート課題の目的：思考力と文章力を身につける

あらゆる職業に共通して必要とされる能力：

正確で明晰な文章作成能力

講義・分科会・最終発表会



考察 → 思考の整理 → 思考の言語化 → 文章作成
身に付く能力①：文章を書く作業をとおして思考力を鍛える
≡言葉を豊かにする → 思考力の強化



2. レポート課題の到達点

☆到達点：実証性＋明確性＋論理性 → 客観的で説得力のある議論

自分とは異なる意見、立場の他者にとっても、説得力のある議論を展開する必要性

⇔「私の感想」・「私の信念・信条」・「私の理想」を一方的に書くのではない

読み手は他者：自分の考えが読み手に正確に伝わるように、論理的に記述する

3. レポート課題の執筆方法①：総論・原則編

☆基本形：①自分で問いを立て、②調べて考えをまとめ、③他の人に分かる明確な言葉で記述する

調べた事実・事例・先行研究 → 論拠 → 考察・結論

・主張したい分析や結論を先に提示しない → 主観的・独断的

・十分な証明なしに、不必要な断定は避ける → 非論理的

・「問題である」と書く前に、なぜ、何が問題であるのか、具体的・実証的に記述する

☆原則：結論に至る考察の過程が重要

・結論を導く事実や学説を、最も説得力のある順番に並べ、論理的に議論を組み立てる
→ 「すべての議論は必然的に展開していく」＝議論のすべてが主題に関連する

・論文の冒頭で必ず主題を明確に提示する／主題や論理展開に関係のないことは書かない

4. レポート課題の執筆方法②：技術編 —社会で通じる文章執筆の技術—

(1) 文章形式・書式

・「～である」「～だ」調で書くこと ⇔ 「～です」「～ます」調は一般的には用いない

・段落（一文字下げると改行する）／『書名』『論文題名・引用文』

・記号（～＝？・など）や横文字を混ぜ書きしない

・外国語の単語を用いる際には、必ず日本語を書いてから（ ）に入れる

例】人間の安全保障（human security）

・固有名詞や数字などの表記は必ず統一する（アメリカと米国／算用数字と漢数字）

・参考文献・資料を使用した場合は、必ず注に明記し、最後に文献リストを載せる

和文：松井芳郎他編『国際法 第4版』有斐閣 2002年、2頁。

欧文：Nigel D. White, The United Nations System : Toward International Justice, Boulder/London : Lynne Rienner Publishers, 2002, P.5.

→インターネット・サイト含めて、出典を示さない引用は剽窃行為として問題となるので **要注意**

Wikipediaなど、著者名や出典が明確ではないサイトの引用も不可

(2) 文法・文章表現：正確な文章を書く

- ・助詞（てにをは）／主語と述語のつながりの確認
 - －長文にせず、簡潔に
 - －句読点をきちんと付けて、文章の構造を明確にする
- ・接続詞を有効に使う
 - －適切な接続詞を使うことで、議論の流れを明瞭にする
 - －同じものを多用しない（しかし・つまり・また）
 - －漢字（特に誤変換）や慣用表現の間違いをなくす
 - 道のりが大きい・集団的自衛権においては・脱退に対する規定は・憲章の方では
- ・明確さ：曖昧な表現は避け、具体的・客観的に
 - －言葉の意味・定義を丁寧に書く
 - 「～の点に関して強化された」「～という意味での正当性を備えている」
 - －事実を述べる際に曖昧な表現を多用しない／主観的かつ印象論的表現は避ける
 - 「～に見える」「～のようだ」／「～してほしい」「絶対におかしい」「～は良くない」「～するのはひどい」
 - －「話し言葉」を使わない →印象論的・不明確
 - ⇨メールやツイッターの表現とは異なる
 - 「みたい」「ちょっと」「どんな」「こんな場合」「このとこだけ」「この箇所」「～がひっかかる」
 - －カタカナ語を不必要に多用せず、日本語で書く
 - メンバー・リアクション・ファクター・ネガティブ・カバーする・クリアする・ストップする
 - －文章を完結させる：体言止めは用いない
 - 「～について。」「～なこと。」「～のように。」またはその他の名詞で終わらないように

5. 文章力を身につけるには：基礎訓練の積み重ねによる「習熟」（スポーツや楽器と同じ）

- ・構成の下書き：書き始める前に、必ず議論の構想を下書きする
 - －議論の素材（事実・学説）：何を使うか・どのような順番で並べるか
 - －議論の構造：全ての議論が必然的に展開しているか
- ・辞書の活用：辞書を必ず手元において常に参照し、意味内容や漢字などを確認する
- ・音読：声に出して文章を読み、文法、表現、リズムを確認する（句読点の位置も含めて）
- ・推敲：書き終えたら印刷し、採点者になったつもりで2回は読み直し添削する
- ・読み合わせ：他の人に読んで聞かせる、または読んでもらう

☆中長期的戦略：質の高い文章に常に親しみ、その構造や技法を意識して読む。業を学び、真似する

【講義概要】

時間管理に関して、もっと自分に厳しくあるべきだ。分科会の発表のために夜遅くまで準備した努力を誉める。しかし社会人になると、複数の仕事を並行で進めなければいけなく、時間管理を怠けることは通用しなくなる。質の高い仕事をするために、常にベストな状態で臨むことが重要である。

レポート作成の目的は、考える力を強化し、正確で明確な文章力を得ることである。それは考えて話すことを整理した上で言語化し、考えを整頓することである。レポートは感想文ではなく、他者に分かるように書き、特に自分と立場が異なる人にも納得できるような文章を書く必要がある。時には正解をだすことは複雑であるが、レポートの結論は不明確であってもいい。その結果にいたった思考のプロセスを述べるのが重要である。

ではどうすれば文章力が身につくのか？楽器・スポーツと同様で、最初から良い文章は書けなく、短期間に上達しない。構想を最初練った上で、下書きをし、辞書を必ず使い、音読をする。大学の授業で練習するなど、毎日の積み重ねを日常化すると、確実に上達する。他人の欠点はよく見えるため、友達と読み合わせることを勧める。また、質の高い文章に常に触れていると、語彙が増え、したがって自分を表現できる言葉が増える。

学生の考察：「参加して良かった」だけでは良くないと思う。この経験を今後の学校生活にも活かさなければならぬし、将来にもつなげたい。これが達成されて初めて、「参加して良かった」となるのではないだろうか。（2年生）

国際実務英語 I

1. 目的

—世界で通じる英語に触れる—

国際ビジネスや国際協力や国際交流活動・観光業などで活躍できる実践的な英語運用能力を身につけます。自分の意志を伝える表現力や異文化の中で働くためのコミュニケーションスキルの向上を目指します。

2. 開催日時

2010年9月18日(土)～20日(月) 2泊3日

3. 会場

栃木県芳賀青年の家 〒321-4217 栃木県芳賀郡益子町益子4470

4. 合宿セミナーの様子



全体講義



全体講義



分科会



全体発表



総括



閉講式



1. 開催日程表

1日目(18日) 1st day (September 18th)

時間 Time	プログラム内容 Activities	備考 Additional Information
10:20 11:00	開講式・オリエンテーション	
11:00 11:50	全体講義: Skills of Learning Foreign Languages	講師:羽根拓也氏
12:00 13:00	昼食	学生インターンシップ報告
13:00 16:10	全体講義: Skills of Learning Foreign Languages	講師:羽根拓也氏
16:10 16:20	誓約書記入	
16:20 17:20	講義(A)~(F) 各10分	
17:30 18:30	夕食	
18:30 19:00	チェックイン・ファシリテーター講師打合せ	
19:00 21:00	交流会	

2日目(19日) 2nd day (September 19th)

時間 Time	プログラム内容 Activities	備考 Additional Information
8:30 10:00	全体講義 (分科会とプレゼンテーションのための英語表現)	講師:レベッカ・メイス氏
10:00 11:50	分科会 (適宜休憩)	
12:00 13:00	昼食	
13:00 16:00	分科会 (適宜休憩)	
16:00 17:20	発表準備	
17:30 18:30	夕食	
18:30 19:30	中間発表 (10分程度)	
19:00 21:00	発表準備	

3日目(20日) 3rd day (September 20th)

時間 Time	プログラム内容 Activities	備考 Additional Information
8:30 9:30	発表準備	
9:30 11:50	全体発表	発表10分 質疑応答5分
12:00 13:00	昼食	
13:00 14:00	総括	
14:00 14:20	閉講式 (終了証授与)	

2. 全体講義

Skills of Learning Foreign Languages

—1日で500単語の記憶を可能にする元ハーバード人気講師が教える語学学習術とは？—

【講師氏名】：羽根 拓也（はね たくや）

株式会社アクティブラーニング代表取締役社長

【講義概要】

国際キャリアに欠かせない語学力。鍵はインストールの方法にあった。ハーバード大学で語学を指導し、優秀指導証書を授与された元ハーバード大学講師が直接指導。1日に500単語の暗記も可能にするという語学学習得の秘訣をワークショップ形式で体感！



▼語学学習法の技法紹介&ワークショップ（日本語）

- △語学学習得に必要な「能動力」
- △大脳生理学的に見た学習の原理
- △定着効果を倍増させる他者利用術
- △あらゆる言語習得に役立つ習得ワーク

▼一部で学んだ理論を実践（英語）

第一部で習った内容の実践として、英語でのアウトプットを実践。学んだ技法を使って全員参加型の徹底コミュニケーションタイムを実践。会話しながら学び続ける能動学習を体感。

【略 歴】

文部科学省：就業力支援プロジェクト審査委員 経済産業省：社会人基礎力育成プロジェクト委員 デジタルハリウッド大学（院）教授・教育手法最高責任者、山口大学客員教授

日本の塾、予備校で指導後、渡米。ハーバード大学等、アメリカの有名大学で語学専任教師として活躍。独自の指導法が 高い評価を受け、平成6年、同大より優秀指導証書授与。米国で高い評価を受けた独自の教育法を体系化。帰国後、97年、「人間力育成」に特化したアクティブラーニング（以下AL）社を設立。ソニー、博報堂、リクルート、JRといった大手企業をはじめ、経産省、JICA等、公的機関が続々AL社のプログラムを導入。現在、全国の国立、私立大学でも、大学改革、学科開発のコンサルティング、教員向けFD指導、学生向け、「アクティブラーニングクラス」「就学力育成クラス」などを提供し、高い評価を受けている。

2009年、世界の起業家を評価する「アントレプレナーオブザイヤー」の日本セミファイナリストに選ばれる。2010年、羽根が企画開発支援したJR東日本のe-learningプログラムが経済産業大臣賞を受賞。

Students' Impression :

The idea that learning foreign languages is a kind of sports was very interesting for me. From now on, I would like to use various theories which Mr. Hane showed us in the lecture, such as IT theory (impression and times) and IMR theory (input, mix and recall), and to be more ambitious in learning foreign languages.

(HAKUOH UNIVERSITY Faculty of Business Administration 3年 Masato Ikenoue)

Seminar : Useful Expressions in Group Discussion and Presentation

Name of lecture : Rebecca Mace

English teacher

Brief Contents :

1. Teacher introduction
2. Warm-up activity-Get to know your classmates by talking to them about their unusual experiences.
3. Review of useful language phrases-Matching exercise-Pair work
4. Use the phrases that you have learned ! Activity : Groups practice common phrases used in discussions by debating (agreeing/disagreeing) on controversial topics.
5. Organizing presentations-Learn how to effectively organize and give a presentation.
6. Body language: Successful communication isn't ALL speaking ! Learn some common types of body language and traditions in different cultures. Activity : Groups create their own "culture's" body language and traditions and present to the class. Be creative and have fun !



Profile :

Rebecca Mace is from Portland, Oregon, USA and she has been an English teacher for over twenty years. She has taught English in private language schools, universities, and elementary and middle-schools, not only in USA, but also in Venezuela, Turkey, Japan, and Korea, and now she is back in Japan. She has also traveled in Greece, Thailand, The Philippines, Vietnam and Cambodia.

Message :

During my time living, traveling, and teaching abroad, I have become quite aware of how an international career can be full of challenges and great rewards. My life has become rich and full of unforgettable experiences that will stay with me forever! If your dream is to pursue an international career, I encourage you to fulfill your dreams ! An international career can help bridge the cultures of the world as well as provide you with insight and awareness of the world we live. I hope I can help you to have a fulfilling and informative experience here at the International Career Development English camp by sharing my experiences with you. Please feel free to ask me any questions you might have during the camp. I would be very happy to talk to any of you at any time !

Students' Impression :

In fact, it was difficult for me to learn some words and phrases like the class in high school. But the discussion was a lot of fun. I made some mistakes but I did not care about it. (HAKUOH UNIVERSITY Faculty of Business Administration 3年 Mutsuki Ogasawara)

3. 講義及び講師、分科会

	講義内容・分科会	講 師	ファシリテーター	学生実行委員
A	人道支援と平和構築 Humanitarian Aid and Peacebuilding	米川 正子 Ms. Masako Yonekawa	仲松ミゲル Migeru Nakamatsu 望月 悠平 Yuhei Mochizuki 遠藤 宗之介 Sonosuke Endou 秋元 明日香 Asuka Akimoto	渡邊亜沙美 Asami Watanabe
B	メディアと平和教育 Media and Peace Education	アルビー・シャープ Mr. Albie Sharp	何 美琪 Biki Ka 川上 あい Ai Kawakami 井関 恵 Megumi Iseki	似内 竜介 Ryosuke Nitani
C	食糧安全保障と農業 Food security and Agriculture	ティモシー・アパウ Mr. Timothy Appau	上田 ミリアン ナオミ Miriam Naomi Ueda	大金里香子 Rikako Ogane
D	異文化コミュニケーションと訪日観光 Cross-Cultural Communication for Inbound Tourism	高宮 暖子 Ms. Atsuko Takamiya	劉 禹君 Ukun Ryu 笹本 芽郁 Mei Sasamoto 小菅 美樹 Miki Kosuge	井上 璃美 Remi Inoue
E	ビジネスにおける コミュニケーション Business Communication	蓮見 仁美 Ms. Hitomi Hasumi	趙 美慧 Bikei Cho 小笠原睦月 Mutsuki Ogasawara 金 鐘相 Jonsan Kim	菊田れいな Reina Kikuta

Theme (A) Humanitarian Aid and Peace building

Lecturer : Masako Yonekawa

Associate Professor of Utsunomiya University

Brief Contents :

My career and my interest

studies in UK -> volunteer work in Israel -> interest in working in the "field" -> United Nations Volunteer -> United Nations High Commissioner for Refugees office (UNHCR) -> interest in peace and conflict in Africa (especially Democratic Republic of Congo (DRC) and Rwanda)



Humanitarian aid

1. Understanding the victims' needs and concern
2. Difference in victims' concerns in natural and man-made disaster
3. Can natural disaster be a man-made disaster as well?
4. How to respond to the disaster better?

Peacebuilding

1. Difference between reconstruction (after natural disaster) and peacebuilding (after man-made disaster)
2. Understanding the victims' needs and concern
3. Why is peacebuilding not working well?

Suggestion

How to minimize the gap between the theory and practice

Profile :

After working as United Nations Volunteer in Cambodia, Liberia, South Africa, Somalia, Tanzania and Rwanda, Masako Yonekawa joined UNHCR in 1996, working first as Field Officer in Rwanda, followed by Roving Field Officer in Kenya, Field Officer in DRC, Executive Assistant to the High Commissioner in Geneva (Headquarter), and Head of Field Office in Goma, DRC. Since October 2008, she worked as Visiting Senior Adviser (peace building in Africa) at JICA Headquarter. She holds a M.Sc in international relations from University of Cape Town in South Africa.

Students' Impression :

This world is indeed very dangerous, terrible, sad and dirty. Masako saw a lot of situation like this but she never gave up. She said that questioning "why?" is very important in our life and I agree with her opinion. (HAKUOH UNIVERSITY Faculty of Education 4年 Aya Takahashi)

Three Keywords :

1. Priority

In the field, there are a lot of victims of disasters and they have a lot of needs. For example, clean water, foods, houses, education, health care, security, and so on. But we cannot do everything at once. So we have to put priority. And we thought security was the first priority, because, if there is no security, aid does not work efficiently. We also introduced three ways to make security. The first one is sending PKO to protect victims and remove mines and so on. The second way is doing DDR (Disarmament, Demobilization and Reintegration). The last one is giving punishment for criminals especially war criminals. The victims' hope is to get normal life. We think priority makes it fast and efficient.

2. Political

Political will of the government leaders also has a strong influence. There are 2 kinds of disaster. The first disaster is called natural disaster like tsunami, earthquake and so on. The second is called man-made disaster like governments' slow actions or corruption. When the government refuses any help for humanitarian assistance or when the government decided to go to war and does not care about people, a lot of them become victims.



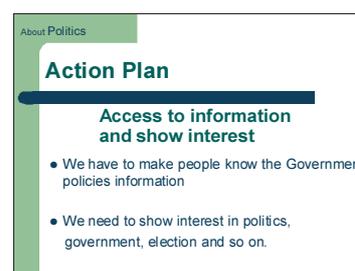
3. Peace

Good government is a key to achieve peace. There are 3 definitions for good government.

First, it means that you have sovereign rights to control territory and the people. Second, that you have the right to decide the security and to order the nation and making laws. The last one is that you have the control of all the ministries, like ministry of economy, ministry of education, etc. Democracy is a foundation for selecting good leader by election. Good leader leads to non-violence politics for people. We need to show interest in politics, government, election and so on. Showing interest in them is one of ways to open the peace to democracy politics. There are three reasons to achieve “peacebuilding”. The first one is about community. The second is to elect a good leader and the last one is to trust each other. The community which has cooperation and kindness will come to trust each other. This is important to keep a community safe for a long time. In addition, there should be a trust between a community and leader.

Action Plans :

To access to the information about what the government is doing and show interest. In order to make a democratic government, we need the cooperation of all the people of the nation. We have to make them know the government policies information, so as to make him or her participate in the government.



Theme (B) Peace Education and Media

Lecturer : Albie Sharp

Associate Professor of Ritsumeikan University

Brief Contents :

Introduction-Life stages by place :

- Where was I born ? Where did I grow up ?
- What was I like when I was young ? How does that help me now ?
- Where have I been ? What did I do there ? How does that influence me now ?
- Why did I come to Japan ? What have I done here ?
- Why did I become a teacher ? What do I teach ?
- How did I become involved in peace studies ?
- What am I doing now ? Will it help to make a better society ? How ?



Key points :

- It took me a long time to decide what I wanted to do and how I wanted to do it !
You don't need to decide right now. And don't be afraid of change !
- Peace is something that we can practice in the way we live. It's not something we should wait for world leaders to do.
- Conflict is creative! Being in conflict doesn't mean you are always negative or wrong.
It is a chance for you to explore new ideas and develop new solutions !
- A good motto for this workshop : Do it badly !

The Workshop :

One of the main ideas of Peace Education is that everyone should learn from each other, rather than having one person (usually the teacher) telling other people how to think.

In this way, peace education tries to match its goals with its practices-a non-violent approach to learning. This workshop should help you to develop your opinions as well as the ability to express them. Together, we will look at :

- the various meanings and concepts of peace
- conflict mapping
- conflict resolution
- peace photography
- war and peace in the media
- alternatives

Profile :

Albie Sharpe is teaching in the Interfaculty Institute of International Studies, specializing in public health, international social welfare and peace studies. He has a Masters in Public Health and International Development Studies from Flinders University, and is currently working on his PhD in Public Health at the University of NSW. He has also been involved in the organization of a number of peace-education events, including a group of photographers involved in a visual exploration of the concept of peace photography.

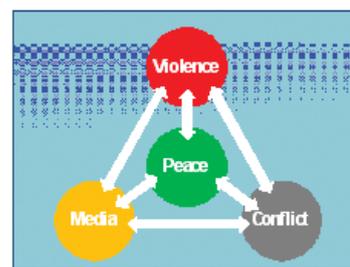
Students' Impression :

We always get information from TV, newspapers etc. We are easily influenced by them though all of them cannot be true. I think it is important for us to use media after careful thought (HAKUOH UNIVERSITY Faculty of Education 4年 Saori Fujita)

Keywords :

Conflict, Violence, Media

The group B decided to talk about “Peace” . Then we asked everybody to think about “Peace” . After that we presented our 3 topics : Conflict, Violence and Media. In our first topic, conflict, we talked that there were many conflicts in the world today. Moreover, we wanted to express that conflict has different meanings. Doing that, we tried to link to violence, our second topic. We said, ” If the condition that conflict continues for a long time, people are getting angry and lead to violence” . We thought that it was a good way to do the transition from conflict to violence.



In our second topic, violence, we tried to explain that violence had a deep definition. In fact, Mr. Albie, our professor said that we could divide violence into two parts; “visible violence” and “invisible violence” . In the “visible violence” , there was physical violence such as hitting, beating, stabbing and so on. Then in the “invisible violence” there is cultural violence such as, hate speech, persecution, obsession, and on the other hand, structural violence such as, colonialism, apartheid, slavery and so on.

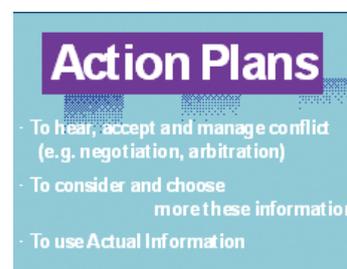
In our final topic, Media, we decided to link our three topics to peace. In fact, we did by ourselves a Triangle schema linking Conflict, Violence and Media to Peace. The reason was Media was very familiar and the best way to get Information of the world easily for everybody nowadays. In addition, we thought that media had a big influence on people. It was so effective, because it can take control people's mind and behavior.

Actions Plans :

1. If we are in a conflict with someone, we should try to hear, accept and manage the conflict.
For example : negotiation, arbitration.
2. We can consider and choose more reliable information from different information.
For example : video game.
3. We can also use Twitter or YouTube because they are useful to get actual information.

Summary :

Finally, we thought that Peace had different meaning to everybody. Therefore, it was very difficult to define exactly what Peace was for us. However, we thought that we were able to know a little how to approach to Peace. It was to try to understand every situation relatively. So trying to accept the adversary's opinion was also very important for peacebuilding. In other words “to compromise” was very important when one conflict occurred before the beginning of the violence and before the diffusion into the media.



Theme (C) Food Security and Agriculture

Lecture : Timothy Appau

Community Coordinator of Asian Rural Institute (ARI)

Brief Contents:

Different Definitions of “Food Security”

1. Access by all people at all times to enough food for an active, healthy life.
2. All people at all times have both physical and economic access to the basic food the need.
3. Access by all people at all times to sufficient food and nutrition for a healthy and productive life.
4. When all people at all times have access to sufficient food to meet their dietary needs for a productive and healthy life.



In pursuit of food security objectives in a specific country does not necessarily mean that the said country has to depend on food aid. As the Chinese says goes, *'Teach people how to do fishing and you will feed them for life, but giving fish to people you feed them for a day'* therefore in a given situation, food aid may or may not be the best and most appropriate intervention to achieve food security.

Relations to Agriculture

When it comes to food security the policy framework toward agriculture in every country should be very good to encourage the farmers to work hard. Every country needs to understand that beauty of the dignity of work. The sensitivity of agriculture is even more for developing countries, for whom agriculture is a way of life, and those engaged were not doing so for commerce or profit-orient occupation, but because their small-holdings and land was an assets handed over for generations in their families. Food production in the developing country for domestic consumption is as important as food security.

Issues in Africa

In most countries of the sub-Saharan Africa has been affected due to some epidemics like Malaria and HIV/AIDS. The potential impact of the diseases on food production is the major concern because of the region's already low and declining per capital food consumption and low level of agriculture productivity. The most affected countries slow growth in agricultural productivity and overall economy resulted in growing food insecurity over the last two decades.

Profile :

Bernard Timothy Appau is from Ghana. He has studied agriculture in the Philippines, and Asian Rural Institute (ARI) in Tochigi, Japan. He teaches and practices organic agriculture and community development in the institute to train leaders from different countries. He has also worked for development projects including food aid to refugees from Ivory Coast in Ghana as a part of his involvement in the Christian Ministry.

Students' Impression :

I found that aid is very important. Only giving food and money to developing countries is not sufficient. We should think more about the best way to aid. (HAKUOH UNIVERSITY Faculty of Law 2年 Shiori Hishinuma)

Three Important Keywords

1. Food Security

- Definition : " all people at all times have access to sufficient foods for healthy and productive life"
- Food security problem in DEVELOPING countries : hunger, disease, lack of nutrition
- Food security problem in DEVELOPED countries : decrease of self-sufficient ratio of food (Japan), poisoned food (ex. Gyoza scandal → causing cancer).

2. Agriculture

- AGRICULTURE is the base of living. We cannot get any food without it (= farming is the way to live)
- Modern education helps promoting making bad image of AGRICULTURE
- Sustainable production (ex. Organic farm)

3. Community Power

- Globalization
 - = "Americanization" - Losing own identity
 - = New technology - Not communicating directly
- Problems : isolated death, loneliness, suicide for stress



Being parted from community

- Localization
 - = Rooted in the area, self-sufficiency
 - = Being closer to community
- Local identity, realization of life
- To protect traditional way originated from each area.



Action Plans

1. Take action in local area
2. See outside world and build own identity
3. Try to know about daily foods



Theme (D) Cross-Cultural Communication for Inbound Tourism

Lecturer : Atsuko Takamiya

Tour Guide-Interpreter

Brief Contents:

*What is Tsuyaku Guide and Inbound Tourism (mission, contribution...)

*Why Tourism is important ?

*Recent trends on Inbound Tourism

*What is 'Globish' ?

*English as a travel protocol

*What you need more than perfect English

*Reference

*Any questions ? (I am very happy to answer)



Profile:

Atsuko Takamiya, after graduating from Sophia University's department of English studies, contributed to the promotion of school computing system at Fuji Electric group company. Passing the national exam, she currently works as a freelance English speaking tour guide and an interpreter to promote tourism.

Students' Impression :

I had an image that tour guide should be an easy job, which is to have fun with tourists, but I was wrong. There are many people with different back (HAKUOH UNIVERSITY Faculty of Business Administration 3年 Rina Takahashi)

My Mission as Tsuyaku Guide

- *make customers feel **safe and welcome**
- *give efficient navigation and good **hospitality**

- > Create Japan Fans!
- > Contribute to Tourism
- > Contribute to World Peace
- > Revitalize Local cities
- > As a result, Bring Money to Japan

English as a travel protocol

- *Guests are from
 - different countries
 - different background
- *And sometimes I have to shout!
(Festivals, Crowds... not always quiet)

- *English should be...
 - > Clear and Simple
 - > Customer Oriented
 - > Happy and Comfortable with humors & smile ;)

3 key words:

1. Difficulties of the tour guide's work

There are many differences between the tour guide and the tourists. Many troubles can happen during the tour.

For example :

Different languages.

Time conflicts

Tourists do not know Japanese manners : eat food when they are walking or speak loudly in public……

Japanese rules are different from other countries.



How to solve the problems ?

Try to understand each other

Share information : religion, allergy, provide information about Japan.

Ask and pay attention

Need to study own culture

2. Tourism can make Japan more active

Tourism can make many shops, restaurants, transportation more active and it can earn money for Japan.

3. Tourism is a passport to peace

We think we can make peace through the tourism. If people travel a foreign country, they will meet many different people and learn different cultures so that they can learn the differences between two countries and start to accept the differences. We can also learn newly about ourselves.

Action plan :

- Try to study more about our own countries.
- Try to be a volunteer as a tour guide.
- Make a club of the tour guide.
- Let more people know about the job of tour guide.



Theme (E) Business Communication

Lecturer : Hitomi Hasumi

Representative of the Japanese office of Pacific Soybean & Grain / English teacher

Brief Contents

■Presentation

1. Not knowing where I'll be – what you do now continues for the future
2. Experiences in the real business world
3. There's always the solution

■Workshop

1. Socializing tips for the first time meeting
2. Learning business words with business flow
3. Description and explanation
4. Comparison and making choices
5. Telephoning – Requesting and clarifying information
6. Useful expression for meetings and presentations
7. Case study – Simulate typical communication through the sample case
8. Simulate meeting and presentation through a project



Profile :

Hitomi Hasumi has graduated from Heald Business College in USA after working several years in Japan. After graduated the college, Hitomi joined the trading company, Pacific Soybeans & Grain in San Francisco. In 1998, she opened the Japan office of the company, and has been working for trading business between Japan and USA. She has also taught English in different schools and communities.

Students' Impression :

By doing matching exercise for business, I realized that I did not have enough vocabulary with me. Therefore, I should study more vocabulary for business English. (HAKUOH UNIVERSITY Faculty of Business Administration 3年 Masato Ikenoue)

3 key words:

1. Business manner

In the future business communication will be very important, because company should pay attention to the world. Especially, company should use English. The teacher worked in Pacific Soybeans and Grain and exports beans. When the company export, business manner and business communication is very important, I have dealings with many organization to export beans. How you contact with customer is most important in the beginning of the business.

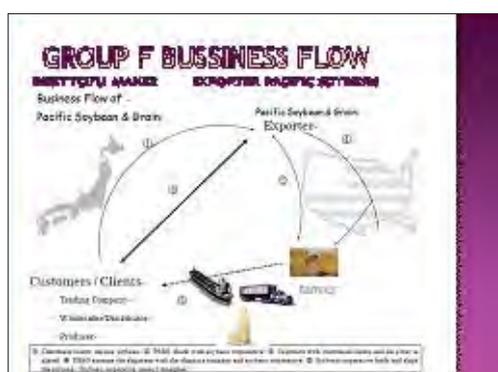
Without only by an international business, the manner is a very important, but the international business is related to the background of the country. So we need to understand that to involving in the international business.

2. Simulation

We experienced international business in a simulation. Theme is “business flow of pacific soybean & grain” . There are many situations in the business. So we chose important scene : the way of the greetings, reservation, inspection and so on. Some students play famer, hotel front, customer, and company.

3. What we have learned

We could learn typical communication in the business. For example, first greetings and the way of the reservation of the hotel, etc. We want to master this way of speaking in the international business. We thought that the foreign capital work is more exciting than national business. We want to participate in this kind of job someday.



附 表

参加者名簿

国際キャリア開発基礎

No.	氏名	大学	学部	学年	分科会	No.	氏名	大学	学部	学年	分科会
1	庄司 萌	宇都宮大学	国際	1	A	66	亀ヶ澤美樹	白鷗大学	教育	4	B
2	兼子 由衣	宇都宮大学	国際	1	H	67	岡本 志穂	白鷗大学	経営	1	A
3	佐々木 秋	宇都宮大学	国際	1	D	68	大福地那奈	白鷗大学	経営	1	A
4	高中 祥太	宇都宮大学	国際	1	D	69	小林 文也	白鷗大学	経営	2	B
5	金子有里紗	宇都宮大学	国際	1	H	70	関亦 一輝	白鷗大学	経営	2	B
6	加藤 ジオランデル	宇都宮大学	国際	1	A	71	川口ゆずり	白鷗大学	経営	3	F
7	河 龍太	宇都宮大学	国際	1	D	72	小笠原睦月	白鷗大学	経営	3	H
8	安富 智希	宇都宮大学	国際	1	D	73	鳴瀬 貴子	白鷗大学	経営	3	D
9	田口 瑞姫	宇都宮大学	国際	1	A	74	秋元 仁文	白鷗大学	経営	3	H
10	黒淵 琴美	宇都宮大学	国際	1	A	75	松田 麻衣	白鷗大学	経営	3	F
11	田中 えり	宇都宮大学	国際	1	F	76	丸谷 彩香	白鷗大学	経営	3	I
12	萩谷 竜樹	宇都宮大学	国際	1	B	77	小池 絵美	白鷗大学	経営	3	I
13	若林 由美	宇都宮大学	国際	1	H	78	木村 友紀	白鷗大学	経営	3	F
14	宮田真貴子	宇都宮大学	国際	1	G	79	仁平 由美	白鷗大学	経営	3	E
15	中條 玲	宇都宮大学	国際	1	H	80	大沼 里美	白鷗大学	経営	3	F
16	佐藤 利洋	宇都宮大学	国際	1	F	81	古山あさみ	白鷗大学	経営	3	H
17	坂本美沙子	宇都宮大学	国際	1	F	82	中嶋 里美	白鷗大学	経営	3	H
18	須郷 千晴	宇都宮大学	国際	1	H	83	小菅 美樹	白鷗大学	経営	3	H
19	柿塚 咲	宇都宮大学	国際	1	F	84	菅原 祐貴	白鷗大学	経営	3	H
20	笹森 詩野	宇都宮大学	国際	1	H	85	藤井 樹	白鷗大学	経営	3	H
21	川島 正恵	宇都宮大学	国際	1	A	86	土屋 時子	白鷗大学	経営	3	G
22	阿部 友紀	宇都宮大学	国際	1	F	87	佐藤 綾	白鷗大学	経営	3	G
23	宮坂 和稔	宇都宮大学	国際	1	A	88	梨木 弓華	白鷗大学	経営	3	E
24	逸見 栞	宇都宮大学	国際	2	B	89	鈴木沙也佳	白鷗大学	経営	3	E
25	劉 禹君	宇都宮大学	国際	2	E	90	関 博美	白鷗大学	経営	4	D
26	秋元明日香	宇都宮大学	国際	2	A	91	斉藤 直音	白鷗大学	経営	4	I
27	岩崎 芽依	宇都宮大学	国際	2	F	92	佐藤 匠	白鷗大学	経営	4	G
28	江連 祐希	宇都宮大学	国際	2	F	93	平澤 和章	白鷗大学	経営	4	I
29	横尾 知香	宇都宮大学	国際	2	H	94	斉藤 弘貴	白鷗大学	経営	4	I
30	青野 宏美	宇都宮大学	国際	2	H	95	関口 尚弘	白鷗大学	法	2	F
31	宇佐美綾香	宇都宮大学	国際	2	I	96	木村 有希	白鷗大学	法	2	F
32	佐藤 康平	宇都宮大学	国際	2	F	97	仲松なおみ	白鷗大学	法	2	H
33	波多腰優里	宇都宮大学	国際	2	I	98	佐藤 史明	白鷗大学	法	2	F
34	青木 健資	宇都宮大学	国際	3	F	99	佐川 想	白鷗大学	経営	2	B
35	中島 久雄	宇都宮大学	国際	3	H	100	斎藤 貴之	国際医療福祉大学	薬学科	1	D
36	赤坂 優実	宇都宮大学	国際	3	G	101	小島 亜樹	国際医療福祉大学	—	3	C
37	高橋 瞳	宇都宮大学	国際	3	F	102	岩楯 智未	国際医療福祉大学	—	3	C
38	宮川今日子	宇都宮大学	国際	3	I	103	秋田 裕介	国際医療福祉大学	保険医療	3	C
39	鈴木瑠里子	宇都宮大学	国際	3	H	104	須藤真知子	共愛学園前橋国際大学	国際社会	1	D
40	濱田 清貴	宇都宮大学	国際	3	F	105	亀井 梓乃	共愛学園前橋国際大学	国際社会	1	H
41	速水絵里子	宇都宮大学	国際	3	I	106	金子 真弓	共愛学園前橋国際大学	国際社会	1	G
42	アギーレハレーラ ガブリエラ マルシア	宇都宮大学	国際	4	A	107	佐藤 優子	共愛学園前橋国際大学	国際社会	2	E
43	佐藤 杏子	宇都宮大学	国際	4	C	108	細野 衣里	共愛学園前橋国際大学	国際社会	1	A
44	畑中 彩実	宇都宮大学	国際	4	A	109	中嶋 陽平	共愛学園前橋国際大学	国際社会	2	G
45	高橋里詠子	宇都宮大学	国際	4	H	110	青木 未来	共愛学園前橋国際大学	国際社会	3	I
46	齋藤 亜季	宇都宮大学	国際	4	F	111	須郷 生咲	共愛学園前橋国際大学	国際社会	4	E
47	佐藤麻美子	宇都宮大学	国際	4	G	112	江川 愛子	広島大学	総合科	3	F
48	張 欣	宇都宮大学	国際	4	G	113	荒木真由子	静岡県立大学	国際関係	3	A
49	井津小百合	宇都宮大学	国際	4	I	114	佐藤 美来	自治医科大学	看護	3	C
50	上田 英二	宇都宮大学	国際	研究生	F	115	藤田 和樹	自治医科大学	医	3	F
51	グエン クオバオ	作新学院大学	経営	3	F	116	羽石 英広	成蹊大学	法	1	F
52	全 仙子	作新学院大学	経営	3	F	117	市原 彩香	津田塾大学	学芸	2	D
53	金 仙姫	作新学院大学	経営	3	E	118	谷内田絢子	東京工業大学	情報理工学	修士	A
54	古田土陽介	作新学院大学	総合政策	4	G	119	吉田百合香	同志社大学	法	2	D
55	押久保竜祐	作新学院大学	総合政策	4	G	120	近藤 光	徳島大学	工	3	G
56	熊田知絵美	作新学院大学	人間文化	3	F	121	田原 賢三	横浜市立大学	国際	3	F
57	柿崎 朋子	白鷗大学	教育	1	A	122	井上 愛美	国際基督教大学	—	3	A
58	木村 友也	白鷗大学	教育	2	D	123	金 恵英	桜美林大学	—	—	A
59	似内 竜介	白鷗大学	教育	3	E	124	戸田麻衣子	専修大学	経済	4	H
60	捧 純也	白鷗大学	教育	3	A	125	福岡 賢哲	専修大学	文	4	A
61	望月 悠平	白鷗大学	教育	3	B	126	行田 莉奈	中央大学	文	2	H
62	井上 璃美	白鷗大学	教育	3	H	127	井上 良	東京外国語大学	外国語	3	F
63	渡邊亜沙美	白鷗大学	教育	3	H	128	高島あゆみ	東北大学	工	2	A
64	高山 尚儀	白鷗大学	教育	3	D	129	遠藤宗之介	立教大学	コミュニティ	—	D
65	田中 靖子	白鷗大学	教育	4	E	130	木原 涼子	獨協大学	外国語	1	B

参加者内訳（合計130名：男性40名、女性90名）

宇都宮大学	50名	成蹊大学	1名	共愛学園前橋国際大学	8名
白鷗大学	43名	津田塾大学	1名	桜美林大学	1名
作新学院大学	6名	東京工業大学	1名	専修大学	2名
国際医療福祉大学	4名	同志社大学	1名	中央大学	1名
自治医科大学	2名	徳島大学	1名	東京外国語大学	1名
国際基督教大学	1名	広島大学	1名	東北大学	1名
静岡県立大学	1名	横浜市立大学	1名	立教大学	1名
獨協大学	1名			合計	130名

学年別参加者内訳

学年	人数
1年生	33名
2年生	24名
3年生	49名
4年生	20名
大学院	1名
その他	3名
計	130名

国際実務英語 I

No.	氏名	学年	大学	学部	分科会	No.	氏名	学年	大学	学部	分科会
1	小向 郁衣	2	宇都宮大学	国際	D	28	小笠原睦月	3	白鷗大学	経営	F
2	横尾 知香	2	宇都宮大学	国際	D	29	小菅 美樹	3	白鷗大学	経営	E
3	会田 翔子	1	宇都宮大学	国際	B	30	須田 裕成	3	白鷗大学	経営	F
4	阿部 友紀	1	宇都宮大学	国際	F	31	高橋 李奈	3	白鷗大学	経営	D
5	川口 優	1	宇都宮大学	国際	E	32	古山あさみ	3	白鷗大学	経営	E
6	川島 正恵	1	宇都宮大学	国際	C	33	池ノ上真知	3	白鷗大学	経営	F
7	庄司 萌	1	宇都宮大学	国際	C	34	川崎麻里奈	1	白鷗大学	経営	E
8	高中 祥太	1	宇都宮大学	国際	A	35	佐藤 尋美	1	白鷗大学	経営	E
9	趙 ビケイ	1	宇都宮大学	国際	F	36	福田 マラリセ	1	白鷗大学	経営	E
10	棚内柚佳里	1	宇都宮大学	国際	A	37	菱沼 志織	2	白鷗大学	法	C
11	仲松ミゲル	1	宇都宮大学	国際	A	38	橋本亜朱華	2	白鷗大学	法	C
12	山崎 舞子	1	宇都宮大学	国際	F	39	藤田さおり	4	白鷗大学	教育	B
13	若林 由美	1	宇都宮大学	国際	F	40	高橋 彩	4	白鷗大学	教育	A
14	宇佐美咲季	1	宇都宮大学	国際	A	41	望月 悠平	3	白鷗大学	教育	A
15	古谷 亜衣	1	宇都宮大学	国際	F	42	遠藤宗之介	2	立教大学	コミュニティ福祉	A
16	笹本 芽郁	1	宇都宮大学	国際	E	43	井関 恵	1	その他	国際	B
17	渡邊 玖実	1	宇都宮大学	国際	F	44	岩淵 絢香	2	岩手県立盛岡短期大学	国際文化	D
18	何 美琪	4	宇都宮大学	国際	B	45	齋藤 貴之	1	国際医療福祉大学	薬	F
19	張 欣	4	宇都宮大学	国際	D	46	青木 未来	3	共愛学園前橋国際大学	国際社会	D
20	秋元明日香	2	宇都宮大学	国際	A	47	大田 咲	2	岩手県立大学 盛岡短期大学	国際文化	D
21	青野 宏美	2	宇都宮大学	国際	D	48	田中 悠理	修士	東京大学	新領域創成科学研究科	A
22	兼子 由衣	1	宇都宮大学	国際	A	49	須郷 生咲	4	共愛学園前橋国際大学	国際社会	B
23	田中 えり	1	宇都宮大学	国際	A	50	中島 陽平	2	共愛学園前橋国際大学	国際	B
24	山下恵梨佳	1	宇都宮大学	国際	A	51	難波 千晶	4		外国語	A
25	佐々木 秋	1	宇都宮大学	国際	A	52	川上 あい	2	共愛学園前橋国際大学	国際	B
26	劉 禹君	2	宇都宮大学	国際	D	53	大須賀愛幸	3	宮崎大学	農	C
27	ブレンデン バン ストーク	修士	宇都宮大学	国際	T A	54	金 鐘相	2	足利工業大学	建築	F

参加者内訳（男性11名、女性43名、計54名）

宇都宮大学	27名	足利工業大学	1名	共愛学園前橋国際大学	4名
白鷗大学	14名	立教大学	1名	宮崎大学	1名
作新学院	0名	岩手県立大学盛岡短期大学	2名	その他	2名
国際医療福祉大学	1名	東京大学	1名		

学年別参加者内訳

学年	人数
1年生	24名
2年生	13名
3年生	9名
4年生	5名
その他	3名

国際キャリア開発特論参加者名簿

No.	氏名	大学	学部	学年	分科会	No.	氏名	大学	学部	学年	分科会
1	河 龍太	宇都宮大学	国際	1	D	39	似内 竜介	白鷺大学	教育	3	H
2	安富 智希	宇都宮大学	国際	1	C	40	望月 悠平	白鷺大学	教育	3	B
3	宮澤 将乃	宇都宮大学	国際	1	D	41	佐藤 尋美	白鷺大学	経営	1	H
4	高中 祥太	宇都宮大学	国際	1	G	42	福田 ママリセ	白鷺大学	経営	1	H
5	笹本 芽郁	宇都宮大学	国際	1	D	43	佐川 想	白鷺大学	経営	2	D
6	山本 海渡	宇都宮大学	国際	1	B	44	川口ゆず子	白鷺大学	経営	3	G
7	山崎 舞子	宇都宮大学	国際	1	D	45	萩元 仁文	白鷺大学	経営	3	
8	寺尾 祥子	宇都宮大学	国際	1	F	46	荒川 実香	白鷺大学	法	2	F
9	若林 由美	宇都宮大学	国際	1	D	47	木村 有希	白鷺大学	法	2	H
10	庄司 萌	宇都宮大学	国際	1	H	48	仲松なおみ	白鷺大学	法	2	D
11	新垣 花苗	宇都宮大学	国際	1	G	49	福島 敬広	白鷺大学	法	2	C
12	川島 正恵	宇都宮大学	国際	1	B	50	佐藤 友香	白鷺大学	法	2	
13	萩谷 竜樹	宇都宮大学	国際	1	F	51	神谷 理恵	白鷺大学	法	2	G
14	畠山 晃穂	宇都宮大学	国際	1	E	52	秋田 裕介	国際医療福祉大学	保険医療	3	H
15	木田 綾香	宇都宮大学	国際	1	F	53	中台 銀河	北海道大学	工	1	D
16	倉田 翔子	宇都宮大学	国際	1	E	54	保坂由紀子	北海道大学	文	3	A
17	江連 祐希	宇都宮大学	国際	2	F	55	鶴岡 大希	北海道大学	法		A
18	佐藤 康平	宇都宮大学	国際	2	B	56	佐谷 孝行	神田外語大学	外国語	1	G
19	山内 真心	宇都宮大学	国際	2	E	57	浅野 祐子	神田外語大学	外国語	2	H
20	秋元明日香	宇都宮大学	国際	2	A	58	飯田 瑞	静岡県立大学	国際	3	D
21	小向 郁衣	宇都宮大学	国際	2	D	59	荒木真由子	静岡県立大学	国際関係	3	C
22	小林 佑馬	宇都宮大学	国際	2	G	60	渡邊 庸子	津田塾大学	学芸	3	H
23	中瀬 淳	宇都宮大学	国際	2	E	61	伊藤 瑞穂	津田塾大学	国際	1	B
24	劉 禹君	宇都宮大学	国際	2	F	62	佐瀬あゆみ	横浜市立大学	国際総合科	1	B
25	佐藤志保里	宇都宮大学	国際	3	E	63	木村 彩子	横浜市立大学	国際総合科	1	D
26	青木 健資	宇都宮大学	国際	3	C	64	白木 隆司	首都大学東京	都市教養	4	H
27	赤坂 優実	宇都宮大学	国際	3	G	65	桑名 智子	小樽商科大学	経営	3	A
28	濱田 清貴	宇都宮大学	国際	3	B	66	関 友哉	青山学院大学	総合文化政策	3	C
29	佐藤 杏子	宇都宮大学	国際	4	C	67	岸原 礼	専修大学	経済	2	D
30	佐々木陽吾	宇都宮大学	教育	2	G	68	佐野 純一	下関市立大学	経済	1	A
31	村上 貴彦	作新学院大学	経営	1	G	69	作佐部彩花	学習院大学	法	2	B
32	田野実 翔	作新学院大学	経営	1	G	70	中嶋 陽平	共愛学園前橋国際大学	国際	2	E
33	金 仙姫	作新学院大学	経営	3	E	71	青木 未来	共愛学園前橋国際大学	国際社会	3	H
34	全 仙子	作新学院大学	経営	3	E	72	瀬戸川麻結	国際教養大学	国際教養	2	H
35	呂 宏博	作新学院大学	経営	研究生	E	73	中川 七海	東京理科大学	工	1	D
36	鈴木 辰徳	作新学院大学	総合政策	4	G	74	関 龍	獨協大学	法	4	H
37	柿崎 朋子	白鷺大学	教育	1	E	75	大崎 龍史	香川大学	教育	3	G
38	捧 純也	白鷺大学	教育	3	A	76	吉村 美穂	愛知教育大学	国際	4	H

参加者内訳 (合計76名、男性31名、女性45名)

宇都宮大学	30名	横浜市立大学	2名	青山学院大学	1名
白鷺大学	15名	共愛学園前橋国際大学	2名	愛知教育大学	1名
作新学院大学	6名	首都大学東京	1名	下関市立大学	1名
国際医療福祉大学	1名	学習院大学	1名	香川大学	1名
北海道大学	3名	小樽商科大学	1名	専修大学	1名
神田外語大学	2名	獨協大学	1名	国際教養大学	1名
静岡県立大学	2名	東京理科大学	1名		
津田塾大学	2名			合計	76名

学年別参加者内訳

学年	人数
1年生	28名
2年生	21名
3年生	20名
4年生	5名
その他	2名

実行委員会名簿

開催担当理事	渡邊 直樹 (宇都宮大学副学長)
取組担当	友松 篤信 (宇都宮大学国際学部教授)
実行委員会	屋代 英二 (JICA地球ひろば)
委員長	長門 芳子 (いっくら国際文化交流会 会長)
	大野 邦雄 (作新学院大学 特任教授)
	鈴木 隆 (作新学院大学 経営学部准教授)
	野村 安子 (作新学院大学 国際キャリア開発プログラム事務局)
	結城 史隆 (白鷗大学 教育学部教授)
	眞貝 沙羅 (白鷗大学 特任講師)
	鶴見佳代子 (白鷗大学 国際キャリア開発プログラム事務担当)
	福原 毅文 (国際医療福祉大学 医療福祉学部教授)
	高際 澄雄 (宇都宮大学 国際学部教授)
	重田 康博 (宇都宮大学 国際学部教授)
	清水奈名子 (宇都宮大学 国際学部講師)
	米川 正子 (宇都宮大学 国際学部特任准教授)
	末廣 啓子 (宇都宮大学 キャリア教育・就職支援センター 教授)
	品川 昇 (宇都宮大学 国際学部 事務長)
	久野 秀和 (宇都宮大学 国際学部 専門職員)
	小竹 章裕 (宇都宮大学 国際学部 総務係員)
	坂本 昌美 (宇都宮大学 国際学部 特任事務職員)
	矢口 隼人 (宇都宮大学 キャリア教育・就職支援室係長)
	大橋 和宏 (宇都宮大学 学務部 修学支援課国際学部係長)

学生実行委員

国際キャリア開発基礎 (宇都宮大学 学生実行委員)

倉持 光葉 篠原美佐希
小林ひとみ 藤村麻衣子

国際キャリア開発特論 (宇都宮大学 学生実行委員)

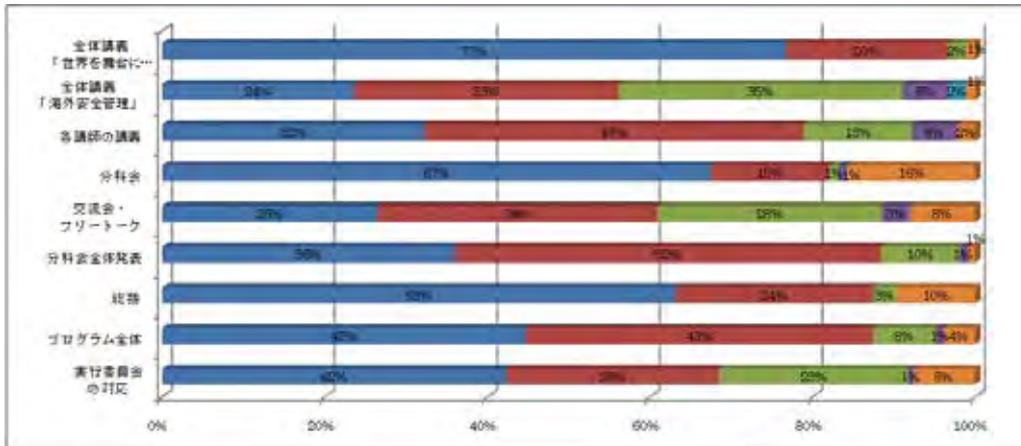
バン ストーク ブレンデン 川島 正恵
會田 翔子 秋元明日香
赤坂 優実 江連 祐希
秋田 裕介 (国際医療福祉大学)

国際実務英語 I (白鷗大学 学生実行委員)

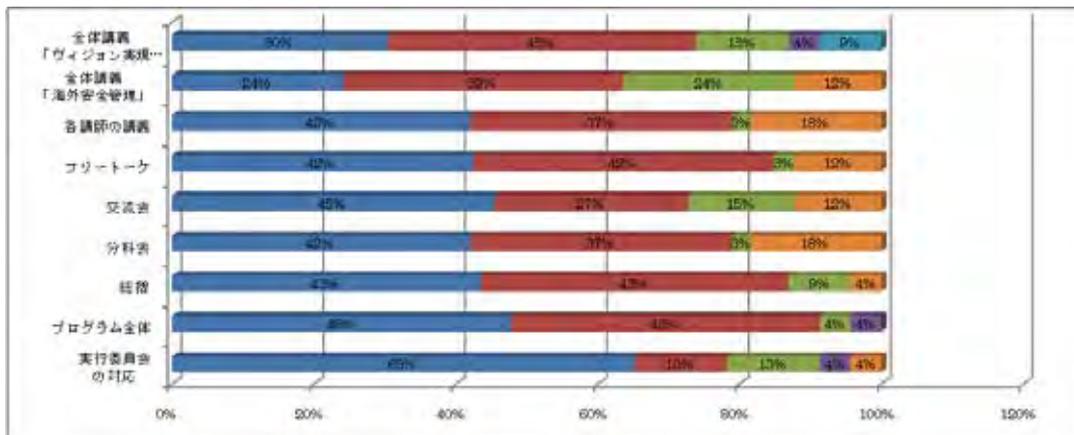
委員長 藤田さおり
井上 璃美 大金里香子
菊田れいな 鈴木沙也佳
似内 竜介 仁平 由美
萩元 仁美 渡邊亜沙美

参加者アンケート

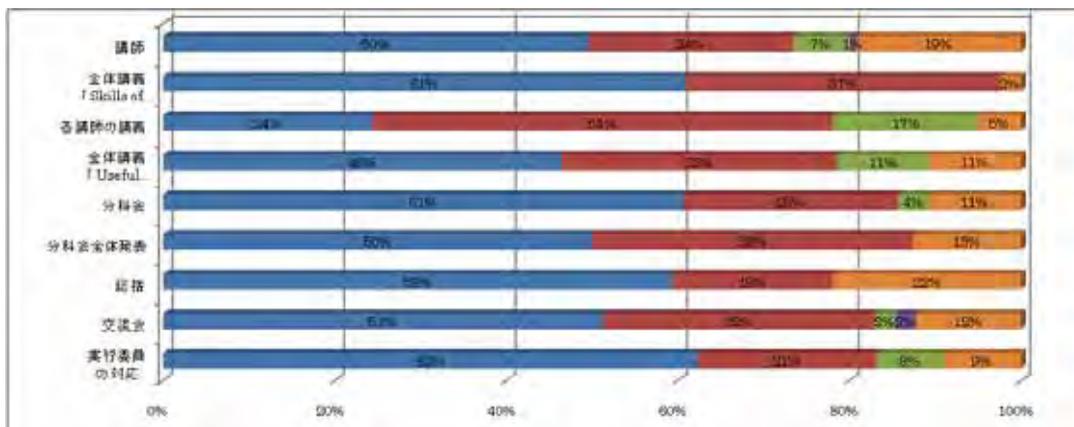
国際キャリア開発基礎



国際キャリア開発特論



国際実務英語 I



凡例

- 大変満足
- 満足
- 普通
- あまり満足しなかった
- 全く満足しなかった
- 不参加、未回答

第2部

国際キャリア実習

1. 実習 I の概要

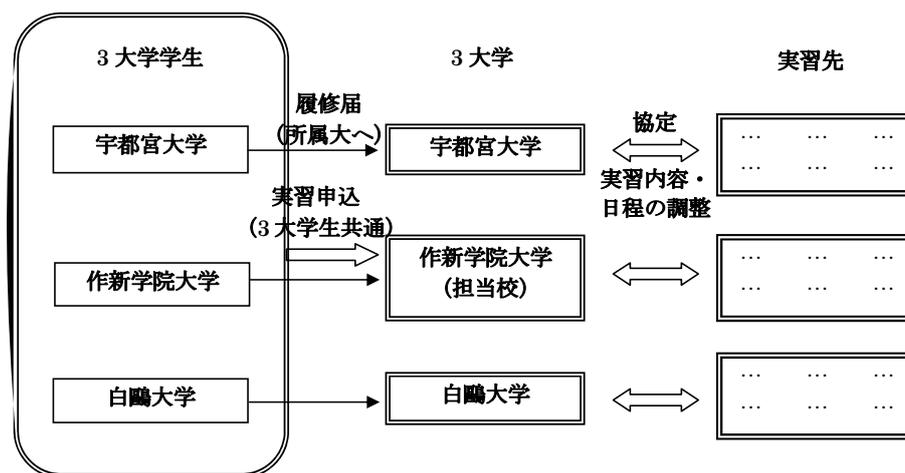
国際キャリア実習 I は国際ビジネスや国際協力、国際交流活動・観光業などで活躍することを目指して、国内の企業・NGO・公的機関・地方自治体、国際機関などでインターンとして実習経験を積み、実務能力を高めることを目的に、合宿セミナーと関連付けて実施するもので、国内を受入先対象とした「国際キャリア実習 I」（以後、実習 I）と、海外を対象とした「国際キャリア実習 II」（以後、実習 II）とがある。

実習 I は22年度から随時実施し、23年度も継続する。23年度は実習 II も加わり、実習 I と II は併存して実施することになる。

実習先は3大学の特色を生かし、特任教員を主体に、協力教員や外部協力者の協力を得て国際協力、国際ビジネス、観光まちづくり、国際理解の分野で開拓した。

実習 I、IIとも実習生のきめ細かなフォローをする必要性から、対象者は本プログラムによる特任教員を有する宇都宮大学、作新学院大学、白鷗大学の3大学の学生に限定している。

【履修届、実習申込みルート】



実習 I、IIとも作新学院大学が担当校としての役割を担うが、他大学との役割分担は以下の通りである。

【担当校としての作新学院大学の役割】

- ・実習生一括管理
- ・書類整備
- ・マニュアル作成

【3大学共通の役割】

- ・実習先開拓
- ・実習先との協定締結
- ・開拓した受入先と実習生との調整
- ・所属大学学生の評価・指導

2. 実習先

実習先は前述のように、3大学の特任教員を主体に、協力教員や外部協力者の協力を得て開拓したが、その結果、実習先数は24団体・機関・企業となった。

実習先の詳細は別添の資料番号1を参照。

3. 実施の流れ

学生がインターンシップを受講するに当たっては提出する書類が数種類あり、実習申込から終了までのステップと、提出する書類を一覧表にまとめたのが別添の資料番号2のフローチャートである。

4. 実習先との協定

実習先との協定については、(案)として作成したものを実習先に提示し、内容を摺り合わせをした上で実習先毎に作成している。

同意した協定書は2通作成し、お互いの捺印、あるいはサインをもって締結となしている。別添の資料番号3は元になる協定書(案)である。

5. 実習時に必要な書類

前述のように、実習Iの申込時から終了時までにはわたっては数種類の書類があるが、学生が作成する書類、受入先が作成する書類、そして、特任教員が作成する書類を、それぞれの項目毎にまとめたのが下記である。

それらの書類は別添の資料番号4-1から4-9までに示す。

【学生が作成するもの】

実習I参加申込書(資料番号4-1)

志望動機調査票(資料番号4-2)

実習計画書(資料番号4-3)

誓約書(資料番号4-4)

実習記録(中間期)(約1カ月以上の長期にわたる場合)(資料番号4-5)

最終報告書(資料番号4-6)

【実習先が作成するもの】

覚書(資料番号4-7)

実習計画書(上記と共通)

実習記録(中間期)(上記と共通)

評価表(資料番号4-8)

【特任教員が作成するもの】

覚書(上記と共通)

実習計画書(上記と共通)

実習記録(中間期)(上記と共通)

教員評価票(資料番号4-9)

6. 実習生の感想・実習先の評価

中間報告や最終報告を元に抜粋した実習生の感想、並びに、評価表から抜粋した実習先の評価点や評価コメントを紹介する。

6-1 実習生の感想

実習先：AHV、NPO法人JEN、JICA地球ひろば、
十日町地域おこし委員会JEN、那須烏山市観光協会
実習生数：6名

6-1-1 実習の成果

- ・短期間だったので、一回くらいでは本当の裏方の仕事の大変さは分かり切ることはできないと思うが、たった一回でも、本当に大変な仕事だ、ということを実感し、これからの自分の部活動への意気込みが変化した。一番上で働くことの責任の重さを実感した。 4年生 女
- ・企業も個人も多くの人と連携していると感じました。私の地元と比べると、住民の近所のつながりが広くあるように窺えました。
- ・また、田畑を多くみられる中、セブンイレブンやしまむらといった新しい店が建ち始めているのに気がつきました。スーパーと商店街の両立を目指せたら、住みやすく、景色の素晴らしい生活を送ることが出来る様な環境が生れると思います。 3年生 女
- ・農業体験では、稲刈りや稲架掛け、30kgの米をせっせと運んだりするなど、思っていた以上に本格的な活動をしました。熱い太陽の下で1日中汗を流しながら米と向き合っ、改めて農業の大変さや重要さがわかりました。農業の2日間はとても濃い内容で、身体的にも精神的にも以前より少し強くなれた気がしました。 3年生 女
- ・この実習を通じて、自主的に物事を考える癖をつける意識が養われました。既存の状態で如何に良い変化を与えるか、多少の変化でどのような改善が見込めるかなど、何事においても発想の転換と思考の柔軟さが重要であると改めて感じました。 3年生 女
- ・国内事業部広報インターンとして知り得る部分については協力理解できるように努めながら業務にあたった。しかし、英文文書など英語で取り交わされている書類等については理解しきれなかった部分もあった。全体的に見れば、おおむね実習目的を達成できたと思う。実習担当者の方を始め、国内事業部の方々が業務内容やJENの活動等をその都度丁寧に説明をしてくださり、理解の手助けになってくださった。 3年生 女
- ・今回の実習研修を通じて一番成長したことは人との関わり方です。なぜならば、わたしは元々人見知り性格であり何事にもマイナスな考え方をしていたのでインターンに行く前はとてもその点で不安であったからです。自分が考えているより実習先の人たちはとても優しく、歓迎ムードで歓迎されとても安心しました。その結果、自分から自分の意見を言えるようになったし、第一印象で人を判断しないで「この人はどのような人なのかな」と考え初めて会った人との興味・関心が高まったと自負しています。 2年生 男

6-1-2 学んだこと

- ・企問書の作り方(期間、各係の仕事、人の動きなど細かな企画書の作り方)パンフレットの作り方(何を伝えたいか、他の冊子との色合いやバランス、挿入する写真の選び方など) 4年生 女
- ・今回は初めての経験ばかりで、私の知識は小さなものでしかないことに気づかされました。農業体験で、初めて稲刈りを経験させていただきました。正直に言うと、暑くて、疲れて、つらかったです。しかし、美しい稲穂や、刈り進めていくと、目で見て

わかる程に進んで、刈ったスペースが広がっていき、まるで開拓したような高揚感、歩けばバッタやイナゴやカエルが跳びまわり、終わった後の疲労感、すべてに感動のような気持ちを覚えました。このような体験をさせていただき、心から感謝しています。
3年生 女

- ・祭り、伝統工芸、自然などを非常に大切にしていることが、盛んな様子からわかりました。そのことから、この町はまちづくりが徹底されていると感じました。この実習期間中いかに自分の殻を破って知らない人たちとかかわっていけるかということも試された気がしました。「自ら歩み寄り、声をかけ、その場を作り上げる」、そうして、私自身の人間性を磨けるよう、これからも年齢・性別・国籍を問わず色々な人たちと交流することが重要だと学びました。
3年生 女
- ・和紙を作りだしていく工程の繊細さとこだわりにやはり難しさを感じ、原料である那須コウゾも含め、程村紙の希少価値を知り、この歴史ある和紙が、国内外問わず様々な場所で知られるべきだと感じました。古民家に滞在し、土間にあるかまどでご飯を作ったり、蚊帳の中で就寝したりと、普段の宇都宮での生活からかけ離れた暮らしを実践しました。数十年前までは当たり前の暮らし方が、利便性の追求によって現在のライフスタイルにどれほど変化していったのか、肌で感じました。
3年生 女
- ・海外事業部の方は出国・帰国が頻繁にあり、実際私がインターンとして活動している期間にもパキスタンの洪水被害を受けて、1人のスタッフが現地へ赴き、また、2名のスタッフが赴任先から帰国するということがあった。高度なスキルを要する事務所で働くという経験をしたことは、普段の学生生活からは得られないものだ。
3年生 女
- ・実際に草むしりなどしてみても感じるとは、草むしりといえど要領がいい人はうまく根っこから抜くことができるし、一か所に抜いた草をまとめておき捨てる時に手間がかからないようにするなど、草むしりといえども頭を使う仕事なのだとの自分の要領の悪さに嘆いていました。他にもいろいろな作業をしましたが、逆に農夫さんの足手まといになるなど目立ってしまいました。
2年生 男

6-1-3 将来への影響

- ・このインターンに参加をし、私はこれからの自分の部活動への心意気は変化すると思っています。自分たちの演奏活動の裏で、私たち以上に一生懸命働きかけてくださっている方々がいることに気がつかされました。一つのイベントのために最初から最後まで綿密に計画を練り、多大な時間を費やして活動していらっしゃる方々で働かせていただきました。まず私は、その方が作成した企画書を見て、とても驚きました。何ヶ月も前から予定と細かな人の動きがびっしりと書いてあり、これを毎回作成していくのは本当に大変だと思いました。練習は大変だけれども、私たちのコンサートのために一生懸命計画を練って準備をしてくださっている方々、そしてお客さんのために、私はこれからさらに感謝の気持ちを持って部活動に励んでいきたいと思っています。
4年生 女
- ・自給自足の田舎暮らしに興味を持ちました。しかし、大半は半農半サラの生活が基本となっていて、私の出会った人々は、照明の制作をされていたり、大工の棟梁をされていたりしました。田舎暮らしの自給自足生活にあこがれましたが、出合った方々は、みなさんとても優しく、価値観がしっかりかたまり、自分の仕事にまっすぐに見えました。私も就職して徹底的に学んで、自分の核となるものを確立させなくては行けないと痛感させられました。
3年生 女
- ・実習を終えて、改めて私は「何かを作ること」、芸術が好きだと再確認しました。これからも自分の興味をもとに、研究し、意欲的に取り組んでいきたいです。実習期間中、自分がどういう人間なのか前よりももっとわかった気がします。反対に新しい自分も発見できた気がしました。礼儀や感謝する心など、人と人のつながりがどんなに大切なものかもわかりました。この実習を通して、些細なことでもひとつひとつの活

動には意味があり、社会で自立・自律していくためには、積極的な活動の心がけ、生活習慣、人間関係などの大事な力をつけていくことがこれからも必要なのだと感じました。 3年生 女

- 地方市町村における問題点の類似が見られると感じました。これらの問題点に対して、地域に特化した改善方法を見出し、それを声高に伝えていくことが重要であると感じました。今後はまちづくりの観点に留まることなく、新しい発見に繋がる「気付き」を日頃から意識しながら、その対象が如何にして今の状態にあるかを深く探求するよう心掛けたいと思います。 3年生 女
- NPO法人は財政基盤が脆弱であることが多く、新卒で採用しても即戦力となるまで育て上げるだけの体制がない。事前に調べて知っていた事実だが実際にそのことを痛感することになった。したがって、いきなり国際協力の分野に新卒採用を狙うのではなく、一度社会人経験を経てから、というキャリア形成の道を積極的に考えていきたいと思った。 3年生 女
- 実習で学んだ、小さなことにも気づくことや、他人への気遣い、そして積極的に行動するという姿勢を、勉強・部活・サークル・アルバイトなど様々な分野に使っていきたいと思います。 2年生 男

6-1-4 反省点

- 一回だけの企画書作成の経験だったので、もっと綿密に時間をかけて作成してみたかった。ロシアについて、今まで学んだことがなく、知識も少なかったので、コンサートでのお話や美術館での講話の時に難しくついていけないことがたくさんあった。もっと事前に勉強をしておけばよかった。 4年生 女
- 自ら発信しないと、相手が返答してくれないことは頭ではわかっているのに、つい失敗を恐れて、挑戦することにためらってしまっていました。また、スケジュールが余裕を持って作られていたため、ペースを保つのが難しく、ついだらけがちになってしまったことも反省しています。 3年生 女
- 実習全体の反省点としては、比較的スケジュールが大まかに区切られていたので、次に何をやるのかを早自に把握しながら、より積極的な行動が必要であったかと思いません。 3年生 女
- 自分の足で、自分の目で確かめることが大切なので、今後注意したいです。また、どうしていいかわからないときに、そこで立ち止まってしまったことがありました。失敗を恐れずに、もっと私は進んで決行すべきだと思いました。「もし失敗したら・・・」と考えずに、とりあえず実行してみることを常に頭に入れておきたいです。 3年生 女
- 英語力の欠如があることによって、海外事業部の部長とのコミュニケーションが思うようにとれなかったことが残念だった。前半の期間はスタッフ全員が日本人スタッフだったため、公用語は日本語でミーティングなどが執り行われていたが、インターンシップが中盤になったころ、ハイチの支援地からフランス人の海外事業部部長が帰国し、それからは事務所の公用語が基本的に英語に切り替わった。それからは、毎週のミーティングがすべて英語になり、聞き逃す点が増えたのが残念だった。それでも、根気強く質問をしたりして理解に努めることができたのは良かったと思う。 3年生 女
- ホームページの資料集めを始めた時、どこから始めればいいのか悩んでいました、経験がないと仕事に手を入れるのは難しい事です、これからもいろいろな体験をやって、経験を貯めて、仕事に頑張りたいと思います。 3年生 女

6-2 受入先の評価

実習先A 2名（8月2日～9日）（8月15日～26日）

評価項目	評価点（5点満点）
積極性・熱心さ	4.75
コミュニケーション能力	3.5
チーム・ワーク力	4.5
提案力	2.75
就業態度	4.5

【評価コメント】

- ・全体的に就業態度も良く、礼儀正しく、周りに気を配ることができていた。
- ・仕事や将来に対して意識も高く、人当たりがいいため、受入側や青年海外協力隊候補生から信頼を得ていた点を高く評価したい。
- ・日を重ねるにつれ、農作業に慣れ、当団体スタッフや農家との関係を徐々に構築していき、日々の就業に対するモチベーションも高まっていった。
- ・時間外の業務を自ら志願して行ない、せっきょくてきに質問する等、積極性が増していく様子が見られた。
- ・今後は更にコミュニケーション能力と目的意識を高めて、充実した学生生活と夢の実現に向けてまい進して頂きたい。

実習先B 1名（9月18日～10月4日）

評価項目	評価点（5点満点）
積極性・熱心さ	5
コミュニケーション能力	5
チーム・ワーク力	4
提案力	4
就業態度	5

【評価コメント】

- ・明るくはきはきとして、やりたいことにトライする行動力を持ち、適応性にも優れている。
- ・サポーターではあったが、音楽の企画力を学んでくれたことと思う。色々な仕事に興味があるようだが、もう少し奥深く調べてみるのもこれからの将来に反映することと思う。

実習先C 3名（9月7日～15日（2名））（9月7日～17日）

評価項目	評価点（5点満点）
積極性・熱心さ	4
コミュニケーション能力	3.67
チーム・ワーク力	3.67
提案力	4
就業態度	4

【評価コメント】

- ・実習を通じて里山地域の良いところを理解し、観光資源として積極的に提言してくれた。
- ・実習を楽しみながら有意義な体験をしてくれ、素晴らしい実習だったと思います。
- ・積極的に活動し、提言も具体的で活動目標も作っていたのは良かった。
- ・短い時間ではあったが、地域の人々とのコミュニケーションの取り方を考えたなら、更に有意義な実習になったと思う。
- ・初めはおとなしいようであったが、すぐに元気になり、その後は積極的に活動した。
- ・この実習は本人にとっても良い経験になったものと思います。

7. 実習生の指導について

3大学の特任教員は、教員の所属する実習生の実習を通じての面談や指導を行なった実績をポートフォリオや個別指導記録に記載する。

ポートフォリオや個別指導記録には、国際キャリア開発プログラムの他のシラバスの履修歴や個別指導歴も記載し、学生のキャリア開発支援を総合的に行なうことに使用している。

別添の資料番号5-1、5-2に、ポートフォリオ、並びに、個別指導記録を示す。

尚、実習に先立って、特任教員は実習生に実施の流れをフローチャートを用いて説明し、合わせて実習先で失礼にならないよう、必要に応じ各大学で用いられている手引書などを用いてビジネスマナーの指導を行なうようにしているが、3大学共通の手引書としてまとめるべく、現在作成中である。

附 表

■国際協力

No.	受け入れ先	場所	テーマ・活動内容
1	JICA 青年海外協力隊二本松訓練所(独立行政法人)	福島県	JICA ボランティアの派遣前訓練支援 青年海外協力隊派遣前訓練の業務補佐、国際協力関連の講義・実習への参加
2	やしの実の会	茨城県	フィリピン、セブ島のスラムにおける教育支援(奨学金プロジェクト等)/イベント手伝い
3	学校法人アジア学院(学校法人)	栃木県	食と農、共生社会、自給自足、農業を通じた国際協力:農場作業、給食作り、食品加工、事務補佐等(インターン希望者のニーズによって調整)。
4	宇都宮大学・国際学部・国際キャリア開発プログラム	宇都宮大 作新大 白鷗大	プログラムの宣伝活動、会場設定とマネジメント、関連資料の作成
5	NPO 法人自然塾寺子屋(非営利活動法人 NPO)	群馬県	地域活性化、農村開発、農業、青年海外協力隊: 1) ① 農家ネットワーク組織と連携した農業活性化イベント(農活プロジェクト)の企画・広報・運営等のコーディネート、事務全般。② 地域ブランドの普及イベントの企画・運営。 2) 農村開発研修のサブ・コーディネーターとしてスケジュール管理、研修所の運営、事務等。
6	十日町地域おこし委員会/JEN(ジェン)(行政・非営利活動法人 NPO)	新潟県	村おこし、農業、食の安全保障、都市化、高齢化、自然との共生 草刈り、稲刈り、雪かき、盆踊り企画(地域おこしに関する調査や研究も可能)
7	NGO 草の根援助運動(非営利活動法人 NPO)	神奈川県	国際協力関連イベント手伝いや広報などの業務補佐等。
8	国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)(国連機関)	東京都	難民に関する宣伝活動、イベント会場マネジメント、その他の職員のアシスト業務
9	JEN(ジェン)(非営利活動法人 NPO)	東京都	宣伝活動、イベント会場マネジメント、その他の職員のアシスト業務
10	ヒューマン・ライツ・ウォッチ(国際 NGO)	東京都	外交政策の調査、HRW が発表するニュースリリースの翻訳、イベントサポート、データベース管理など
11	NPO 法人 HANDS(非営利活動法人 NPO)	東京都	途上国における保健活動、国内で出来る国際協力活動、NPO の広報活動:海外プロジェクトの業務補佐、広報・マーケティング関連業務、庶務業務等。
12	ヒューマン・ライツ・ナウ(NGO)	東京都	人権侵害に苦しむ地域に駆けつけて現地 NGO と協力して事実調査を行い、世界にむけて報告し、人権状況の改善を訴える。平和構築における人権・法の支配の尊重の実現、現地 NGO と連携したエンパワーメント型の法整備支援。
13	独立行政法人国際協力機構 JICA	国内各事務所	一般業務補助もしくは配属先が設定した特定テーマに関する業務(補助)

■ 国際理解

No.	受け入れ先	場所	テーマ・活動内容
14	栃木県国際交流協会 (自治体)	栃木県	地域の外国人を対象とした日本語教室でのボランティア活動、国際交流イベントの手伝い、広報等業務補佐等
15	小山市国際交流協会 (自治体)	栃木県	国際交流、地域の外国人問題を考える:地域の外国人を対象とした日本語教室でのボランティア活動、国際交流イベントの手伝い、広報等業務補佐等。
16	JICA 地球ひろば (独立行政法人)	東京都	展示コーナー(体験ゾーン)の見学、説明方法についての概説、ジュニア地球案内人として来訪者への対応、展示の説明、ワークショップの作成、国際協力に関する講義、国際協力関係者との交流プログラム

■ 国際ビジネス

17	株式会社 FAR EAST	埼玉県	開発途上国との開発輸入ビジネスの現場と実際を知る。
18	(株)上原園	栃木県	種苗関係の国際雑誌の翻訳、現場実習
19	(株)中村製作所	栃木県	海外工場との連携業務の実務体験。海外では研修期間を通じて、“世界の工場”と言われている中国の実情を肌で体験する

■ 観光まちづくり

20	(合)福田製紙所	栃木県	和紙漉の体験と、和紙を用いたペーパーアートを実習
21	那須烏山市観光協会	栃木県	市の歴史や観光資源を学び、伝統工芸の体験やタウンウォッチングを通じて観光隆盛を提言する
22	那須烏山市商工観光課 (地方自治体)	栃木県	各職場の実務体験、並びに、観光隆盛のテーマ対して企画・立案を行なうことで観光行政の一端を経験する
23	AHV(アーティストホームヴィ レッジ)	栃木県	国際コンクール日本予選の企画立案やコンクールの運営補助。カザフスタンではコンクール本選での日本からの参加者のアテンドや文化施設を視察する。

■ 国際交流、国際支援

24	国際NGOいっくら (NGO)	栃木県	いっくら主催事業(多文化共生、国際理解、日本語指導など)の企画・立案やアシスタント。 その他、国際観光ガイドアシスタント、観光ガイド用資料作成など。
25	宇都宮市清原地区市民センタ ー (行政)	栃木県	①清原地区外国人在住者など向けのブログ作成 ②宇都宮市(清原地区市民センター)のホームページ作成 ③清原地区住民へのアンケート結果の分析

国際キャリア実習Ⅰ・フローチャート

アクション	実習生 作成書類	3大学側 準備書類名	実習先 関連書類	備 考
協定書締結				
↓				
受講登録(在籍大学へ)				
↓				
申し込み(作新大へ)	実習Ⅰ申込書	実習Ⅰ申込書		
↓				
申込受付メール				
↓				
実習先へ受入れを打診	志望動機調査票 履歴書	志望動機調査票		斡旋者
↓				
面談				斡旋者と在籍大学 特任教員
↓				
実習先との面談調整(必要に応じ)				斡旋者
↓				
実習先と調整(日程・メニュー)	実習計画書 誓約書	覚書 実習計画書 ← 調整 →	覚書 実習 スケジュール案	斡旋者
↓				
実習開始				
↓				
実習	実習記録 (中間期)	実習記録 (中間期)		
↓				
レポート提出	実習最終報告書	実習最終報告書	実習評価表 (受入先用)	在籍大学で評価
↓				
受入先へ礼状	礼状	(礼状指導)		斡旋者
↓				
報告会		ポートフォリオ 管理		実施するかどうか は各大学で判断

インターンシップ実習生派遣に関する協定書（案）

「地域の大学連携による学生の国際キャリア開発プログラム」取組担当者 友松篤信(以下「甲」という。)と_____ (以下「乙」という。)は、「地域の大学連携による学生の国際キャリア開発プログラム」(以下「プログラム」という。)に関わるインターン実習について、次のように協定を締結する。

第一条 (目的) インターン実習は、将来の活躍を目指して、国際的な分野の団体及び職種において現場体験を積むことにより、自分の適性を知り職業意識を高めることを目的とする

第二条 (実習生) インターン実習生(以下「実習生」という。)は、プログラムの「国際キャリア実習Ⅰ」の受講者とする。

第三条 (実習期間) 実習生の実習期間は、別紙覚書により取り交わすものとする。ただし、必要あるときは甲乙協議のうえ実習期間を延長することができる。

第四条 (指導・監督) 甲は、インターン実習の実施にあたり、実習生に対して乙の就業規則を尊重するとともに、就業時間及び職務遂行については乙の指導、監督、助言等に従うよう指導する。

第五条 (賃金等) 乙は、実習生に対する賃金・通勤手当等を原則として支給しない。

第六条 (守秘義務) 甲は、実習生が実習期間中に乙において知り得た業務上の機密事項については、インターン実習期間を終えた後も守秘するよう指導を徹底する。

第七条 (実習生に対する処分) 乙は、前条に違背するなど、実習生が明らかに信義に反する行為を行ったと認められる場合、速やかに甲に報告するものとする。

2 乙は、実習生に本条第1項に定める行為が認められる場合、インターン実習を中止することができるものとする。

3 甲は、乙から本条第1項に定める報告を受けた場合、事実確認等を経て、実習生に対して適切な措置を行うものとする。

第八条 (保険の加入) インターン実習実施中及び通勤に際しての災害については、学生は「学生教育研究災害損害保険(インターンシップ活動賠償責任保険の補償を含む)」をもって充て、社会人は事前に加入した各種保険をもって充てる。インターン実習実施中及び通勤に際しての災害が発生した場合は、甲、乙ともに誠意を以って問題の解決に当たるものとする。

第九条 (協議) この協定に定める事項に疑義が生じた場合、あるいは、この協定書に定めのない事項が生じた場合、甲と乙は協議の上対応するものとする。

第十条 (契約期間) 協定書の有効期間は、締結日から平成24年3月末日までとする。ただし、契約期間終了の1ヶ月前までに、甲乙いずれからも延長しないという申し入れがない場合は、本協定は、自動的に1年間延長されるものとし、以後も同様とする。

この協定書は2通作成し、甲乙それぞれ記入捺印のうえ、各自1通を保有するものとする。

平成 年 月 日

甲 〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350

国立大学法人 宇都宮大学 国際学部教授

地域の大学連携による学生の国際キャリア開発プログラム

取組担当者 友松 篤信 印

乙 〒 _____

団体名 _____

役職名 _____

氏名 _____ 印

受付日：平成22年 月 日

「国際キャリア開発プログラム」【国際キャリア実習Ⅰ】
参加申込書

1. 参加者

氏名 (フリガナ) _____ 性別 (男・女) _____

住所 _____ 郵便番号 〒 _____

学校名 _____ 学部・学科 _____ 学年 _____

連絡先	TEL :
	E-mail :

2. 参加希望先 及び実習時期・期間

希望する実習先を第3希望(必須ではありません)まで記入してください。実習先の都合や希望の人数・日程等のバランス上、調整することがありますので、予めご了承ください。尚、規定の80時間を超えて実習を希望する場合は希望期間も記入してください。

実習先によってはホームステイが可能などもあります。そこでのホームステイを希望する場合は所定の欄に○印を付けてください。

	企業・団体・機関名	希望時期 (例：7月末～9月初)	希望期間 (例：3週間)	ホームステイ希望
第1希望				
第2希望				
第3希望				

3. この実習について何で知りましたか。

ホームページ (国際キャリア開発プログラム、宇都宮大学、作新学院大学、白鷗大学)
ポスター チラシ 友人から 教員から その他 (_____)

4. ホームステイ希望者は食事等に関する要望を教えてください。(食物アレルギーなど)

5. 費用について

実習先への交通費や昼食代、あるいは宿泊する場合の費用などは原則、全て受講者の負担になります。

6. その他

・実習先によっては事前に面接を行ない、受入れるかどうかを判断する場合がありますので、予めご了承ください。

・実習の条件として保険の加入が必須です。未加入の人は実習先が決まったら速やかに保険に加入して下さい。

推奨例：学生教育研究災害傷害保険・学研災付帯賠償責任保険

- ・実習に先立ち、事前指導を受けていただきます。日程については別途連絡いたします。
- ・実習先との調整などを含め、上記の全ての条件が整い次第、実習受入れの連絡をいたします。
- ・本申し込みにより得られた個人情報、本プログラムに関する事項以外には使用いたしません。

【問い合わせ先】

作新学院大学 国際キャリア開発プログラム事務局

TEL・FAX 028-670-3702

【申し込み先】 E-mail: kokusai@sakushin-u.ac.jp

誓約書

この度、貴社・貴団体においてインターン実習を行うにあたり、下記の事項を誓約し厳守することを誓います。

記

1. 実習期間中は、貴社・貴団体の就業規則及び諸規定に従います。
2. 実習期間中は貴社・貴団体の管理・監督のもと、その指示に従います。
3. 実習に際しては、次の事項を厳守します。
 - 1) 貴社・貴団体の名誉を汚すような言動や行動は行いません。
 - 2) 貴社・貴団体の営む事業を妨害するような言動や行動は行いません。
 - 3) 実習中知り得た機密事項は一切外部に漏洩しません。
4. 故意または過失により貴社・貴団体に損害を与えた時は、直ちに弁償いたします。
5. 実習中に自己の不注意により万一災害を受けた場合は、貴社・貴団体に迷惑をかけることなく自己の責任において処理します。
6. 実習期間中、自己負担で、学生は「学生教育研究災害損害保険（インターンシップ活動賠償責任保険の補償を含む）」に加入し、社会人は各種保険に加入します。
7. 実習参加にあたり、計画書を提出し、終了後に報告書を提出します。
8. 実習実施に要する費用は自己負担を原則とし、提供した役務に対する報酬等は受け取りません。

平成____年____月____日

____大学：____学部____学科____年
____所属（社会人の場合）

氏名：____印

平成____年____月____日作成

国際キャリア実習 I

インターンシップ実習記録 (中間期)

インターン実習生氏名	
大学名	
担当教員氏名	
実習先団体	
実習期間(実習時間数)	

実習内容 (何を学んだか、実施したこと)
反省点 (理解できなかったこと、問題点は無かったか)
今後の課題 (改善点、実習終了までに達成すべきこと)

実習先担当者コメント
氏名： _____ 日付：平成 ____ 年 ____ 月 ____ 日

国際キャリア実習 I

インターンシップ実習最終報告書

インターン実習者氏名	
大 学 名	
実 習 先 団 体	
実 習 期 間	年 月 日 ~ 年 月 日

●以下の項目についてA4用紙2~3枚程度でまとめて下さい。

1. 実習目的
(今回の実習内容(テーマ・課題)目的を記載して下さい。)
2. 実習の成果
(1の成果を自分なりに評価し、記載して下さい。)
3. 学んだこと
(実習期間中、業務上実習先組織で感じたことや、学んだことがあれば記載して下さい。)
4. 将来への影響
(将来のキャリアを考える際、今回の実習はあなたにとってどのような効果を与えましたか。)
5. 反省点
(実習中の自分が理解できなかったこと、不足していたことを挙げて下さい。)
6. 実習先への提言
(実習先の組織や業務への提言をどうぞ。)

●実習の5段階評価

あてはまる数字に○を付けて下さい。

1 そうでない、2 あまりそうでない、3 どちらともいえない、4 概ねそうである、5 そうである

実習のテーマ、内容を理解できたか。	1	2	3	4	5
実習を通してキャリアや進路考えることができたか。	1	2	3	4	5
実習内容は期待通りだったか。	1	2	3	4	5
実習内容や国際分野に興味関心を持ったか。	1	2	3	4	5
実習担当者・担当教員の熱意や意欲を感じたか。	1	2	3	4	5

当授業へのコメントや提案があればどうぞ。

覚 書

インターン実習の条件を下記の通り定める。

実習生氏名 : _____

受入期間 : 平成 年 月 日 () ~ 平成 年 月 日 ()

実習先団体名 : _____

実習先住所 : _____

実習先担当者連絡先

氏 名 : _____

部 署 : _____

電話番号 : _____

E-mail : _____

プログラム担当教員連絡先

氏 名 : _____

所 属 : _____

電話番号 : _____

E-mail : _____

実習手当等 : 支給しない

その他 : 実習終了後に報告書を提出

平成 年 月 日記入

国際キャリア実習 I

評 価 表

実習者氏名 _____

大学名 _____

実習先団体 _____

実習期間 _____

1. 5段階評価

あてはまる数字に○を付けて下さい。

1 ない、2 あまりない、3 普通、4 優れている、5 とても優れている

評価項目	評 価 点				
積極性・熱心さ	1	2	3	4	5
コミュニケーション能力	1	2	3	4	5
チーム・ワーク力	1	2	3	4	5
提案力	1	2	3	4	5
就業態度	1	2	3	4	5

2. 実習全体に関するコメントと実習生へのアドバイスをお願いします。

実習先担当者 所 属： _____

役 職： _____

ご氏名： _____

国際キャリア実習 I・II

教員評価票

実習者氏名 _____

実習先団体 _____

実習期間 _____

最終評価

実習全体に関する最終評価

(面談、マナー指導、受入先評価、中間・最終報告書などを参考に総合評価)

可 否

理由： _____

地域の大学連携による学生の国際キャリア開発プログラム

履修生ポートフォリオ

平成 年 月 日

教員名：

学生氏名

英字	<input type="text"/>
カナ	<input type="text"/>
漢字	<input type="text"/>

性別

1	2
男	女

住所

郵便番号 〒	<input type="text"/>
都道	<input type="text"/>
府県	<input type="text"/>

電話番号

実家 ()	携帯番号 ()
--------	----------

E-mail

PC	携帯アドレス
----	--------

所属

大学	学部	学科
----	----	----

学年

 年

学籍番号

生年月日 (西暦)

 年 月 日生

履修歴 (該当に○)

国際キャリア開発基礎	<input type="checkbox"/>	年度
国際キャリア開発特論	<input type="checkbox"/>	年度
国際キャリア実習 I	<input type="checkbox"/>	年度
国際キャリア実習 II	<input type="checkbox"/>	年度
国際実務英語 I	<input type="checkbox"/>	年度
国際実務英語 II	<input type="checkbox"/>	年度

希望進路 (業界、職種など)

関心分野 (該当に○)

国際ビジネス	国際理解	国際協力
観光	通訳・翻訳	国際交流
その他 ()		

取得済み免許・資格名

ボランティア経験等

■個別指導記録■

学生氏名： _____ 学籍番号 _____

	日程	指導内容	担当者	備考
第 1 回	/ /			
第 2 回	/ /			
第 3 回	/ /			
第 4 回	/ /			
第 5 回	/ /			
第 6 回	/ /			
第 7 回	/ /			

国際キャリア実習Ⅰ 履修者一覧表

	氏名	大学名	学部	学年	実習先	実習期間
1	小池利早子	宇都宮大学	国際学部	3年	那須烏山市観光協会	9/7-9/17
2	小林 文也	白鷗大学	経営学部	2年	NPO法人自然塾寺子屋	8/16-8/26
3	佐川 想	白鷗大学	経営学部	2年	NPO法人自然塾寺子屋	8/2-8/10
4	川口ゆず子	白鷗大学	経営学部	3年	NPO法人JEN	8/3-8/27
5	菱沼 志織	白鷗大学	法学部	2年	宇都宮市国際交流協会	9/7-9/22
6	萩元 仁文	白鷗大学	経営学部	3年	那須烏山市観光協会	9/7-9/17
7	武田はるか	白鷗大学	教育学部	3年	那須烏山市観光協会	9/7-9/15
8	柳田 文	白鷗大学	教育学部	4年	JICA地球ひろば	8/11-9/4
					AHV	9/20-10/10
9	田中 靖子	白鷗大学	教育学部	4年	栃木県国際交流協会	9/30-12/4
10	似内 竜介	白鷗大学	教育学部	3年	十日町市地域おこし実行委員会	2/21-3/7
11	藤田さおり	白鷗大学	教育学部	4年	栃木県国際交流協会	9/30-12/15
12	加藤雄一郎	白鷗大学	法学部	4年	小山市国際交流協会	10/12-2/28
13	大金里香子	白鷗大学	教育学	3年	栃木県国際交流協会	2/2-2/25
14	金 仙姫	作新学院大学	経済学部	3年	(株)上原園	2/10-2/10
15	小林ひとみ	宇都宮大学	国際学部	3年	国際キャリア開発プログラム	6/1-3/30

編集後記

〈国際キャリア開発プログラム 取組責任者 宇都宮大教授 友松篤信〉

「国際キャリア開発基礎」「国際キャリア開発特論」「国際実務英語」は、本年9月と2月にそれぞれ「国際キャリア合宿セミナー」として開催された。国内インターンシップを行う「国際キャリア実習Ⅰ」（通年）は、随時、学生の参加を得て、企業、NPO、自治体等で実施されている。国際キャリア合宿セミナーには、宇都宮大、白鷗大、作新学院大に加え、国際医療福祉大、北海道大、東北大、津田塾大、立教大などから合計260名が参加した。

「国際キャリア合宿セミナー」の特徴は、第1に、栃木県、全国の多様な学生が参加する分科会での高度な討論内容である。第2に、第一線で活躍する講師と膝を交えて語ることによる感化とインスピレーションである。第3に、栃木県内4大学の連携協力、栃木県、国際協力機構・JICA地球ひろば、大学コンソーシアムとちぎ、国際交流団体による後援、企業の協賛による強固な実施基盤と学生実行委員の企画段階からの参加である。

本年度は、全体講義として、学習内容のアウトプットを組み込んだ効率的な学習方法「アクティブラーニング」やロジカルシンキングの方法を学んだ。幸いこれらの企画は、参加者から大変好評であった。「国際キャリア合宿セミナー」の中心的企画「分科会」には、参加者から募ったファシリテーターが司会を務める。参加者は分科会のいずれかに参加し、その分野に必要な資質・能力や基礎知識、その職に至るキャリアパスを自ら考え、業務シミュレーションなどを体験する。学生たち、また各界の情熱的な講師陣にとっても、新鮮な企画であったと思われる。今回初めて「ファシリテーター養成講座」を事前に開催した。また、セミナー終了後、ファシリテーター、実行委員による反省会で来年度への課題を確認した。ファシリテーターを中心に参加者間の情報ネットワークが形成され、ミニ合宿も実施された。こうした参加者の自発的取組みは、当初の期待を超えるものである。「国際キャリア合宿セミナー」は、産学官連携の全国規模のセミナーとして着実に発展している。関係各位および各団体に深く感謝したい。

〈宇都宮大学 特任准教授 米川正子〉

本プログラムに関わって一つ言えることは、教員が元気で前向きだと学生もはつらつし、その逆も言えることである。学生にとって魅力的でふさわしい学習方法、その環境づくり、そしてキャリアパスの情報共有に関して教員が学生と共に真剣に考えると、その情熱は学生にも伝わる。

「地方大学だから、（東京近郊の大学と違って）刺激が少ない」と言われるが、都会の大学にいる学生でも自分で動かなければ結局変わらない。教員は学生の可能性の広がりにお手伝いはできるが、最終的にそれを実現できるのは学生自身の意志による。学生にはいろんな経験をしてもらい、国際キャリアに関して大いに考え悩んでほしい。そうすれば、より明確でより豊かなキャリアを迎えることができるだろう。

〈作新学院大学 特任教授 大野邦雄〉

平成22年度に行なった合宿セミナーでは、プログラム構成、講師の選択、学生実行委員会など一定の実績をあげたものと思われる。このことは、自己評価だけではなく、外部評価や受講生のアンケート結果の満足度からも裏付けされている。実習Ⅰについては実習先として、特任教員を中心に、協力教員や外部協力者の人脈を生かし、国内24か所、海外37ヶ所を開拓し、学生の選択肢を拡げることができ、また、既に実習を終えた学生の満足度も高かった。但し、この一年間は合宿セミナーや実習Ⅰを無事実施することを主眼としてきたこともあり、全体的にはシラバス間の脈略や24年度以降を見据えた取り組みなどに課題が残った。従って、23年度は本来のプログラムの趣旨に則り、国際キャリア教育の本質的な論議、協力教員や外部協力者の更なる意見聴取、3大学協力体制のより強固な構築、合宿セミナー講師選定の更なる論議、実習先においての他のインターンシップ斡旋機関との差別化などにも取り組み、更なる充実化を目指したい。

〈白鷗大学 特任講師 眞貝沙羅〉

昨今内向きの学生が増えていると言われているが、当事業の実施する合宿セミナーやインターンシップに参加することで、世界への関心を広げ、将来のビジョンを描けるようになった学生に何度も出会って来た。「国際」は敷居が高いと言っていた学生が、目を輝かせて研究室で語り、アクションを起こしていく姿こそが事業の成果だと思う。合宿セミナーの参加者の間には大学間を越えた人的ネットワークが形成されつつあり、OB会や学生実行委員会の発足を通して当事業の運営に関わるなど自主的な動きが起き始めている。「国際的な仕事」と言った時、必ずしも海外に出ていくことだけを意味するのではなく、多様な背景を持つ他者を理解し、高いコミュニケーション能力を持って活動を続けることなのではないかと、この1年半学生とともに学んだ。

【協力者一覧】

主 催：宇都宮大学 白鷗大学 作新学院大学 大学コンソーシアムとちぎ
協 力：国際医療福祉大学
共 催：(独) 国際協力機構・J I C A地球ひろば
後 援：栃木県 (財)栃木県国際交流協会 (株)国際開発ジャーナル社
栃木県 J I C A 専門家連絡会 栃木県青年海外協力隊 O B 会
いっくら国際文化交流会
協 賛：(財)あしぎん国際交流財団 キリンビール(株)栃木支社

執筆・編集・担当

宇都宮大学 (国際学部)

教授 友松 篤信
特任准教授 米川 正子
特任事務職員 坂本 昌美

作新学院大学 (経営学部)

特任教授 大野 邦雄
事務局 野村 安子

白鷗大学 (教育学部)

特任講師 眞貝 沙羅
事務担当 鶴見佳代子

平成21年度文部科学省
大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム
「地域の大学連携による学生の国際キャリア開発プログラム」
平成22年度国際キャリア開発プログラム報告書

発 行 平成23年 3 月